

福岡市埋蔵文化財調査報告書第868集

ZASSHONOKUMA SITE

雜餉隈遺跡5

—第14・15次調査報告—



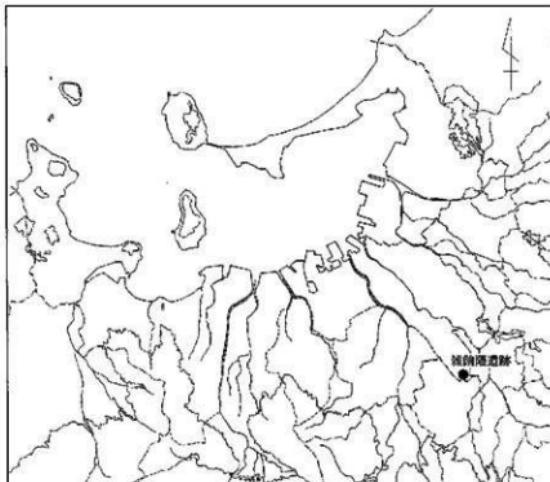
2005

福岡市教育委員会

岡三リビック(株) 埋蔵文化財調査室

ZASSHONOKUMA SITE
雜餉隈遺跡 5

— 第 14・15 次調査報告 —



遺跡番号 調査番号
ZSK-14 0243
ZSK-15 0349

2005

福岡市教育委員会
岡三リビック(株) 埋蔵文化財調査室



カラー写真 1. 第 14 次調査 北側全景（南側から）



カラー写真 2. SC005 穹穴式住居跡
竈・土坑 1 遺物出土状況（南側から）



カラー写真 3. SC008 穹穴式住居跡
竈・P2 遺物出土状況（東側から）



カラー写真 4. SC013 穹穴式住居跡
竈 2・P4 遺物出土状況（西側から）



カラー写真 5. SC011・SC012 穹穴式住居跡
竈完掘状況（西側から）

巻頭カラー 2



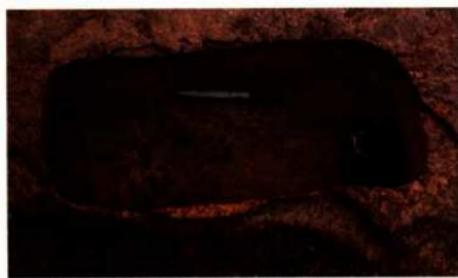
カラー写真6. 第15次調査 SR002(右)・SR003(左) 木棺墓(南側から)
遺構の長軸方向の傾きは、ほぼ同じで、共に東側の床面に完存の壺が出土する



カラー写真7. SR002 木棺墓遺物出土状況(北側から)



カラー写真8. SR002 木棺墓出土の壺(西側から)



カラー写真9. SR003 木棺墓遺物出土状況(南側から)



カラー写真10. SR003 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石器
(南側から)



カラー写真 11. SR011 木棺墓遺物出土状況（東側から）
手前の蓋とベルト部分以外の、裏込めされた粘土を掘削した状態



カラー写真 12. SR011 木棺墓完掘状況（東側から）



カラー写真 13. SR015 木棺墓遺物出土状況（西側から）
床面は 2 段に掘削され、石劍と石鐵は上段の高さで認められた



カラー写真 14. SR015 木棺墓完掘状況（西側から）



カラー写真 15. SR015 木棺墓遺物出土状況（南側から）
右側の蓋は、遺構の上面で認められた



カラー写真 16. SR015 木棺墓出土の
有柄式磨製石劍と磨製石鐵
(南側から)

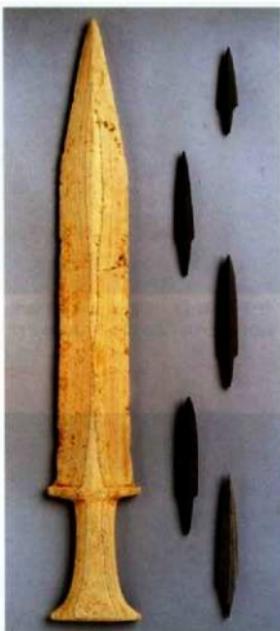
巻頭カラー 4



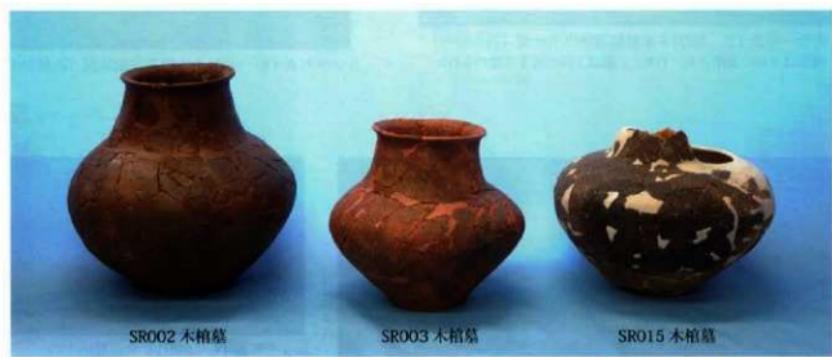
カラー写真 17. SR003 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石鎌



カラー写真 18. SR011 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣



カラー写真 19. SR015 木棺墓出土の
有柄式磨製石剣と磨製石鎌



SR002 木棺墓

SR003 木棺墓

SR015 木棺墓

カラー写真 20. 木棺墓出土の壺

序

現在、国際化の流れの中でアジア地域により一層開かれた国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区雜餉隈遺跡内の開発事業に先立って行われた第14次・15次発掘調査を報告するものです。調査の結果、旧石器時代・弥生時代・奈良時代における遺構および遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまでの費用負担などのご協力賜りました株式会社理研ハウス、九州旅客鉄道株式会社様をはじめとする関係者の方々および地元の方々には、多人なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表すとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック(株)埋蔵文化財調査室が実施した雑誌遺跡の第14次・15次発掘調査の報告書である。
2. 第14次調査は、理研ハウスの集合住宅建設に伴い2002年11月1日から2003年1月24日かけて実施した。
第15次調査は、九州旅客鉄道の集合住宅建設に伴う2003年11月10日から2004年3月5日にかけて実施した。
3. 本書の執筆・編集は、堀尾孝志・天野直子・入江俊行が分担して行った。
4. 遺構の実測図は、堀尾孝志・人江俊行が行った。
5. 遺物の実測図は、天野直子・平野由紀子・佐田裕一・中下まり江が行った。
6. 遺構・遺物のトレース図は、Adobe Illustrator 10を使用し、松尾祥子・倉園真記がトレースを行った。
7. 遺構・遺物の写真は、堀尾孝志が撮影した。
8. 英文訳は、倉園真記が行った。
9. 遺構及び遺物の色調については、『新版標準土色帖 2002年版』を基準にした。
10. 遺構番号は調査区内で連番をつけ、遺構の略号を冠して呼称する。遺構の略号は以下の通りである。
竪穴式住居跡 SC　　土坑 SK　　木棺墓 SR　　柱穴 P　　小穴 SP
11. 方位は真北で統一し、磁北は西偏約 $6^{\circ} 20'$ となる。
12. 本報告書に係わる図面・写真・遺物等は、『埋蔵文化財の整理・収蔵要項』福岡市教育委員会1994年に従い、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する。

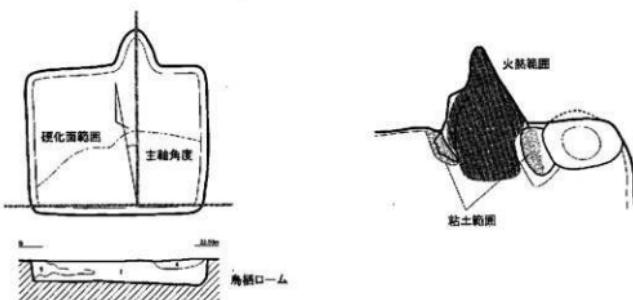
凡　　例

1. Fig (図)・Tab (表)・PL (写真) の見方

- ① Fig (図)・Tab (表)・PL (写真) のキャプション番号は、第14次と15次の混乱を避けるため通し番号とした。
- ② Fig (図)・Tab (表)・PL (写真) 中の遺物と遺構の各番号は、収蔵する都合で第14次と15次は分けて通し番号とした。

2. 遺構平面図の見方

- ① 住居跡の主軸線の角度は、対面する壁面と窓中心を通る軸線が垂直に交わるように設定し、真北からの傾斜角度を指す。
- ② 窓の被熱部分と粘土部分の表現は、2種類のトーンによって区別する。

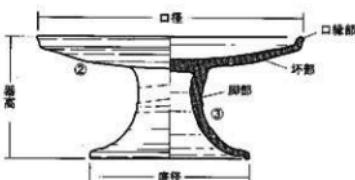
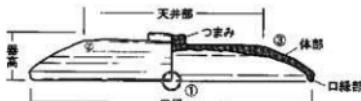
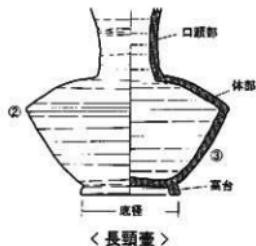
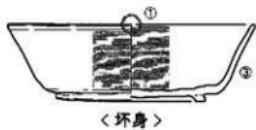


3. 遺物実測図の見方と各部の名称

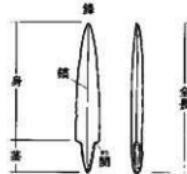
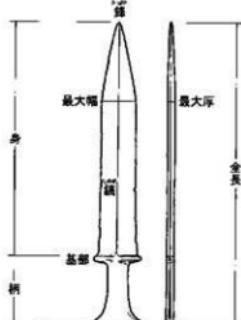
本書における遺物実測図の表現および各部の名称は、以下の通りである。

- ① 土器の残存度が1/2以下で、片側を反転させて推定実測したものについては、中心線に対し間隔を掛けて表現する。
- ② 回転ヘラ削り調整が行われた位置は、稜線よりも細い実線で表現する。
- ③ 土器の断面において、網かけのないものは土師器、あるものは須恵器を表現する。

【奈良時代】



【弥生時代】



〈有柄式磨製石剣〉

本文目次

I. 遺跡の概要			
1. 遺跡の立地と環境	1	SK006.....	114
2. 遺跡の歴史的背景	1	SC007.....	115
II. 第14次調査の概要		SC008.....	116
1. 調査に至る経緯	7	SC009.....	118
2. 調査体制	7	SK010.....	122
III. 第14次発掘調査の記録		SR011.....	124
SC001.....	8	SK012.....	126
SC002.....	9	SK013.....	126
SC003.....	15	SK014.....	127
SK004.....	17	SR015.....	128
SC005.....	18	SK016.....	130
SC006.....	21	SC017.....	131
SC007.....	25	SC018.....	131
SC008.....	28	SC019.....	131
SC009.....	34	梶乱・表土.....	134
SK010.....	37		
SC011.....	38	VI. まとめ	
SC012.....	41	1. 調査の概要.....	140
SC013.....	44	2. 古代の集落について.....	140
SC014.....	48	3. 古代の出土遺物について.....	142
SC015.....	49	4. 種飼院遺跡から見えてくるもの.....	143
SC016.....	54	5. 弥生早期の木柾墓について.....	144
SC017.....	57	6. 有柄式磨製石剣と弥生早期の種飼院遺跡.....	146
SC018.....	61	VII. SUMMARY.....	148
SK019.....	64	49 報告書抄録.....	149
SK020.....	65		
SC021.....	68		
SK022.....	75		
SC023.....	76		
SC024.....	80		
SK025.....	83		
SK026.....	83		
試掘坑1・2	84		
旧石器	85		
撲乱	86		
IV. 第15次調査の概要			
1. 調査に至る経緯	105	Fig. 1 種飼院遺跡と周辺遺跡.....	2
2. 調査体制	105	Fig. 2 調査区位置図-1.....	3
V. 第15次発掘調査の記録		Fig. 3 調査区位置図-2.....	4
SC001.....	106	Fig. 4 第14・15次調査構造配置図.....	5, 6
SR002.....	110	Fig. 5 SC001 遺構 平断面図.....	8
SR003.....	111	Fig. 6 SC001 山土遺物実測図.....	9
SK004.....	113	Fig. 7 SC002 遺構 平断面図.....	10
SC005.....	113	Fig. 8 SC002 窓1・2 平断面図.....	11
		Fig. 9 SC002 山土遺物実測図-1.....	12
		Fig. 10 SC002 出上遺物実測図-2.....	13
		Fig. 11 SC003 遺構 平断面図.....	15
		Fig. 12 SC003 山土遺物実測図.....	16
		Fig. 13 SK004 遺構 平断面図.....	17
		Fig. 14 SK004 出上遺物実測図.....	17
		Fig. 15 SC005 遺構 平断面図.....	18
		Fig. 16 SC005 窓平断面図.....	19
		Fig. 17 SC005 出上遺物実測図.....	20
		Fig. 18 SC006 遺構 平断面図.....	22
		Fig. 19 SC006 窓平断面図.....	23
		Fig. 20 SC006 山土遺物実測図.....	24

Fig.21	SCO07 遺構平断面図	25
Fig.22	SCO07 窟1 平断面図	26
Fig.23	SCO07 窟2 平断面図	26
Fig.24	SCO07 出土遺物実測図	27
Fig.25	SCO08 遺構平断面図	29
Fig.26	SCO08 窟平断面図	30
Fig.27	SCO08 出土遺物実測図-1	31
Fig.28	SCO08 出土遺物実測図-2	32
Fig.29	SCO09 遺構平断面図	35
Fig.30	SCO09 窟平断面図	35
Fig.31	SCO09 山土遺物実測図	36
Fig.32	SK010 遺構平断面図	37
Fig.33	SK010 出土遺物実測図	37
Fig.34	SC011 遺構平断面図	38
Fig.35	SC011 窟平断面図	39
Fig.36	SC011 出土遺物実測図	40
Fig.37	SC012 遺構平断面図	42
Fig.38	SC012 窟平断面図	42
Fig.39	SC012 山土遺物実測図	43
Fig.40	SC013 遺構平断面図	45
Fig.41	SC013 窟1 平断面図	45
Fig.42	SC013 窟2 平断面図	46
Fig.43	SC013 出土遺物実測図	47
Fig.44	SC014 遺構平断面図	48
Fig.45	SC015 遺構平断面図	49
Fig.46	SC015 窟平断面図	50
Fig.47	SC015 出土遺物実測図-1	50
Fig.48	SC015 出土遺物実測図-2	51
Fig.49	SC015 山土遺物実測図-3	52
Fig.50	SC016 遺構平断面図	55
Fig.51	SC016 窟平断面図	55
Fig.52	SC016 出土遺物実測図	56
Fig.53	SC017 遺構平断面図	58
Fig.54	SC017 窟平断面図	58
Fig.55	SC017 出土遺物実測図-1	59
Fig.56	SC017 山土遺物実測図-2	60
Fig.57	SC018 遺構平断面図	61
Fig.58	SC018 窟平断面図	62
Fig.59	SC018 出土遺物実測図	63
Fig.60	SK019 遺構平断面図	64
Fig.61	SK019 出土遺物実測図	65
Fig.62	SK020 遺構平断面図	65
Fig.63	SK020 出土遺物実測図-1	66
Fig.64	SK020 出土遺物実測図-2	67
Fig.65	SC021 遺構平断面図	69
Fig.66	SC021 出土遺物実測図-1	70
Fig.67	SC021 出土遺物実測図-2	71
Fig.68	SC021 山土遺物実測図-3	72
Fig.69	SK022 遺構平断面図	75
Fig.70	SK022 出土遺物実測図	75
Fig.71	SC023 遺構平断面図	76
Fig.72	SC023 窟平断面図	77
Fig.73	SC023 出土遺物実測図-1	77
Fig.74	SC023 出土遺物実測図-2	78
Fig.75	SC023 出土遺物実測図-3	79
Fig.76	SC024 遺構平断面図	81
Fig.77	SC024 出土遺物実測図	82
Fig.78	SK025 遺構平断面図	83
Fig.79	SK026 遺構平断面図	83
Fig.80	試掘坑1・2 平断面図	84
Fig.81	旧石器出土遺物実測図	85
Fig.82	搅乱山土遺物実測図	86
Fig.83	SC001・SK006 遺構平断面図	106
Fig.84	SC001 出土遺物実測図-1	107
Fig.85	SC001 出土遺物実測図-2	108
Fig.86	SR002 遺構平断面図	110
Fig.87	SR002 出土遺物実測図	110
Fig.88	SR003 遺構平断面図	111
Fig.89	SR003 出土遺物実測図	112
Fig.90	SK004 遺構平断面図	113
Fig.91	SC005 遺構平断面図	113
Fig.92	SC005 窟平断面図	114
Fig.93	SK006 出土遺物実測図	115
Fig.94	SC007 遺構平断面図	115
Fig.95	SC007 出土遺物実測図	116
Fig.96	SC008 遺構平断面図	117
Fig.97	SC008 出土遺物実測図	118
Fig.98	SC009 遺構平断面図	119
Fig.99	SC009 窟平断面図	120
Fig.100	SC009 出土遺物実測図	121
Fig.101	SK010 遺構平断面図	123
Fig.102	SK010 山土遺物実測図	123
Fig.103	SR011 遺構平断面図	124
Fig.104	SR011 出土遺物実測図	125
Fig.105	SK012・013 遺構平断面図	126
Fig.106	SK014 遺構平断面図	127
Fig.107	SK014 出土遺物実測図	127
Fig.108	SR015 遺構平断面図	128
Fig.109	SR015 出土遺物実測図	129
Fig.110	SK016 遺構平断面図	130
Fig.111	SC017・018・019 遺構平断面図	131
Fig.112	SC017 出土遺物実測図	132
Fig.113	SC018 山土遺物実測図	133
Fig.114	搅乱・表土出土遺物実測図	134

- Fig.115 穴式住居跡の規模と類型 140
 Fig.116 穴式住居跡の主軸角度 140
 Fig.117 重複する穴式住居跡の遺物 143

表目次

Tab. 1	SC001 遺構観察表	8
Tab. 2	SC001 出上遺物観察表	9
Tab. 3	SC002 遺構観察表	12
Tab. 4	SC002 山土遺物観察表-1	13
Tab. 5	SC002 出上遺物観察表-2	14
Tab. 6	SC003 遺構観察表	16
Tab. 7	SC003 山土遺物観察表	16
Tab. 8	SK004 山土遺物観察表	17
Tab. 9	SC005 遺構観察表	19
Tab.10	SC005 出上遺物観察表	21
Tab.11	SC006 遺構観察表	23
Tab.12	SC006 出土遺物観察表	24
Tab.13	SC007 遺構観察表	27
Tab.14	SC007 出上遺物観察表	28
Tab.15	SC008 遺構観察表	30
Tab.16	SC008 出上遺物観察表-1	33
Tab.17	SC008 出土遺物観察表-2	34
Tab.18	SC009 遺構観察表	36
Tab.19	SC009 出上遺物観察表	36
Tab.20	SK010 出上遺物観察表	37
Tab.21	SC011 遺構観察表	39
Tab.22	SC011 山土遺物観察表-1	40
Tab.23	SC011 出上遺物観察表-2	41
Tab.24	SC012 遺構観察表	43
Tab.25	SC012 出土遺物観察表	44
Tab.26	SC013 遺構観察表	46
Tab.27	SC013 出土遺物観察表	47
Tab.28	SC014 遺構観察表	48
Tab.29	SC015 遺構観察表	50
Tab.30	SC015 出上遺物観察表-1	53
Tab.31	SC015 出上遺物観察表-2	54
Tab.32	SC016 遺構観察表	55
Tab.33	SC016 出土遺物観察表	57
Tab.34	SC017 遺構観察表	59
Tab.35	SC017 出土遺物観察表	60
Tab.36	SC018 遺構観察表	62
Tab.37	SC018 出土遺物観察表	64
Tab.38	SK019 出上遺物観察表	65
Tab.39	SK020 出土遺物観察表-1	67
Tab.40	SK020 山土遺物観察表-2	68
Tab.41	SC021 出土遺物観察表	69

Tab.42	SC021 出土遺物観察表-1	73
Tab.43	SC021 山土遺物観察表-2	74
Tab.44	SK022 出上遺物観察表	75
Tab.45	SC023 遺構観察表	77
Tab.46	SC023 出土遺物観察表-1	79
Tab.47	SC023 山土遺物観察表-2	80
Tab.48	SC024 遺構観察表	81
Tab.49	SC024 山土遺物観察表	82
Tab.50	旧石器出土遺物観察表	86
Tab.51	擾乱出土遺物観察表	86
Tab.52	SC001 遺構観察表	107
Tab.53	SC001 出土遺物観察表-1	108
Tab.54	SC001 出上遺物観察表-2	109
Tab.55	SRO02 出土遺物観察表	110
Tab.56	SRO03 出土遺物観察表	112
Tab.57	SC005 遺構観察表	114
Tab.58	SK006 出土遺物観察表	115
Tab.59	SC007 遺構観察表	116
Tab.60	SC007 出土遺物観察表	116
Tab.61	SC008 遺構観察表	117
Tab.62	SC008 出土遺物観察表	118
Tab.63	SC009 遺構観察表	121
Tab.64	SC009 出土遺物観察表	122
Tab.65	SK010 出上遺物観察表	123
Tab.66	SRO11 出土遺物観察表	125
Tab.67	SK014 山土遺物観察表	127
Tab.68	SRO15 出土遺物観察表	130
Tab.69	SC017 遺構観察表	132
Tab.70	SC017 出土遺物観察表	132
Tab.71	SC018 遺構観察表	133
Tab.72	SC018 出土遺物観察表	133
Tab.73	SC019 遺構観察表	134
Tab.74	擾乱・表土出土遺物観察表	134

図版目次

【巻頭図版】

巻頭カラー 1

- 写真 1. 第 14 次調査 北側全景
 写真 2. SC005 穴式住居跡
 地・土坑 1 遺物出土状況
 写真 3. SC008 穴式住居跡
 離遺物出土状況
 写真 4. SC013 穴式住居跡
 離遺物出土状況
 写真 5. SC011・SC012 穴式住居跡
 離完掘状況

卷頭カラー－2	
か-写真 6. SRO02・SRO03 木棺墓	⑩. SC018 窪穴式住居跡 罐
か-写真 7. SRO02 木棺墓遺物出土状況	⑪. SK019 土坑
か-写真 8. SRO02 木棺墓出土の壺	⑫. SK020 土坑
か-写真 9. SRO03 木棺墓遺物出土状況	
か-写真 10. SRO03 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鎌	
卷頭カラー－3	
か-写真 11. SRO11 木棺墓遺物出土状況	PI.4 90
か-写真 12. SRO11 木棺墓完掘状況	⑬. SC021 窪穴式住居跡
か-写真 13. SRO15 木棺墓遺物出土状況	⑭. SC024・SC023 窪穴式住居跡 SK022・SK026 上坑 完掘状況
か-写真 14. SRO15 木棺墓完掘状況	⑮. 調査区南側全景
か-写真 15. SRO15 木棺墓遺物出土状況	⑯. SK025 上坑
か-写真 16. SRO15 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鎌	⑰. 試掘坑1 収石器出土状況
卷頭カラー－4	⑱. SK020 土坑
か-写真 17. SRO03 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鎌	⑲. 調査区北側全景
か-写真 18. SRO11 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣	
か-写真 19. SRO15 木棺墓出土の 有柄式磨製石剣と磨製石鎌	
か-写真 20. 木棺墓出土の壺	
PL1 87	
①. SC001 窪穴式住居跡	PL5 遺物写真 001～025 91
②. SC002 窪穴式住居跡 罐 1・2	PL6 遺物写真 026～047 92
③. SC002 窪穴式住居跡	PL7 遺物写真 048～078 93
④. SC003 窪穴式住居跡	PL8 遺物写真 079～098 94
⑤. SK004 土坑	PI.9 遺物写真 099～128 95
⑥. SC005 窪穴式住居跡	PL10 遺物写真 129～155 96
PL2 88	PL11 遺物写真 156～178 97
⑦. SC006・SC007 窪穴式住居跡	PL12 遺物写真 179～199 98
⑧. SC006 窪穴式住居跡	PL13 遺物写真 200～222 99
⑨. SC008 窪穴式住居跡	PL14 遺物写真 223～250 100
⑩. SC009 窪穴式住居跡・SK010 土坑	PL15 遺物写真 251～267 101
⑪. SC003・SC012・SC013・SC014・SC011 窪穴式住居跡 使用面全景	PL16 遺物写真 268～289 102
⑫. SC015 窪穴式住居跡	PL17 遺物写真 290～302 103
PL3 89	PL18 遺物写真 303～322 104
⑬. SC016 窪穴式住居跡	PL19 135
⑭. SC018・SC017 窪穴式住居跡	①. SC001 窪穴式住居跡
⑮. SC017 窪穴式住居跡 罐使用面完掘状況	②. SC005 窪穴式住居跡
	③. SC008 窪穴式住居跡
	④. SC009 窪穴式住居跡
	⑤. SK010 上坑
	⑥. SC017・018・019 窪穴式住居跡
	⑦. SC018 窪穴式住居跡 P1 遺物出土状況
	PL20 遺物写真 001～025 136
	PL21 遺物写真 026～039 137
	PL22 遺物写真 040～049 138
	PL23 遺物写真 050～065 139

I. 遺跡の概要

1. 遺跡の立地と環境

雑餉隈遺跡が所在する福岡平野は博多湾に面し、海浜・砂丘・潟・沖積低地・段丘・丘陵・山地と多様な自然環境を内包している。長い歴史の中では、海岸部における環境の変化が最も著しく、海進・海退や砂丘の形成などが絶えず行われてきた。また内陸部も河川による侵食や堆積作用がみられ、こうした環境の変化が先人の営みを、大きく左右してきたことはいうまでもない。

雑餉隈遺跡は行政区画でいうと、福岡市の南端に位置し、東側に大野城市、西側に春日市の市境が迫る。地形的には春日丘陵の東側に平行して延びる、標高 20 数mの台地上にある。この台地は北西から緩やかな谷が幾筋もあり込み、それぞれが舌状地形を形成する。この舌状台地ごとに、南八幡遺跡・麦野 A～C 遺跡、そして雑餉隈遺跡に分けられるが、地形的な境界は漠然としている。当該調査地点は、その舌状地形において、南端部を占める位置にあり、縁辺に向かうに従い緩やかに傾斜していく。

基本土層は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に粗砂・細砂・シルトが堆積する。さらに上層は阿蘇火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム・新開ロームで形成され、遺構はこのローム上面で確認されることになる。

2. 遺跡の歴史的背景

当遺跡は先でも述べた、南八幡遺跡や麦野遺跡とは密接な関連性にある。こうした呼称は便宜上、舌状台地ごとに呼び分けられているに過ぎなく、一連の古代集落跡といえる。

各時代を簡単にみておくと、旧石器時代の遺物は新期ロームの上層から出土し、尖頭器や石刃などが確認されているが、僅少な量である。

弥生時代においても、依然として遺構の密度には希薄性が感じられる。上な発見例を抜き出してみると、雑餉隈遺跡 5 次調査において、前期の住居跡と貯蔵穴が存在する。さらに同地点では、中期段階に入る直径 8 m および円形の大型住居跡がみつかっている。ここ以外では南八幡遺跡の 2 次と 3 次調査で、住居跡が確認されている程度である。しかし、本書に収められている第 15 次の調査成果では、夜白式の上器を作り 4 基の木棺墓が確認され、その内の 3 基には大陸からもたらされたと考えられる、有柄式磨製石剣が副葬されていたという新発見があった。これにより、この周辺における弥生時代のあり方に再認識を迫るのは当然であり、巨視的には弥生文化の伝播を考える上で興味深い問題を提起するに至った。

奈良時代に入ると、遺構密度は急激に増加する傾向がみられる。雑餉隈遺跡をはじめ、広範囲におよぶ遺跡群の中で集落が営まれる。しかし、これらの集落は 8 世紀代に忽然と登場し、およそ 1 世紀で消滅していく。その後は、中世の遺構が僅かに点在する程度である。こうした特異とも映る歴史的背景には、律令体制の整備がなされていく過程での、大陸との対外的諸問題や西海道九国二島の九州統轄における緊張といった、内憂外患の影響も多分にしてあったものと考えられる。こうした重要な役割を担わされたのが大宰府であり、外交、防衛、九州経営と、まさに「遠の朝廷」と呼ばれる機能を果たしていた。こうした大宰府と当該遺跡は、近い位置関係にあることからも、何らかの関連性があったことは想像し難くはないはずである。



Fig.1 雜耕製遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)

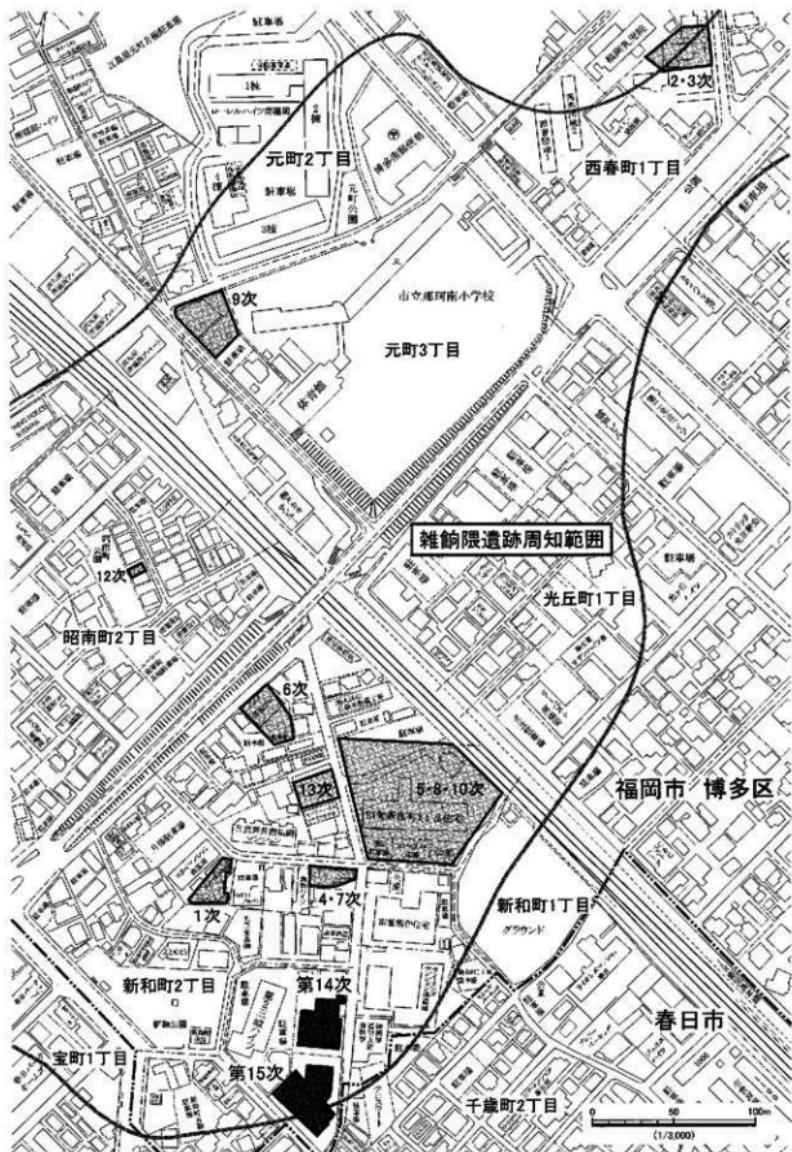


Fig.2 調査区位置図 -1-

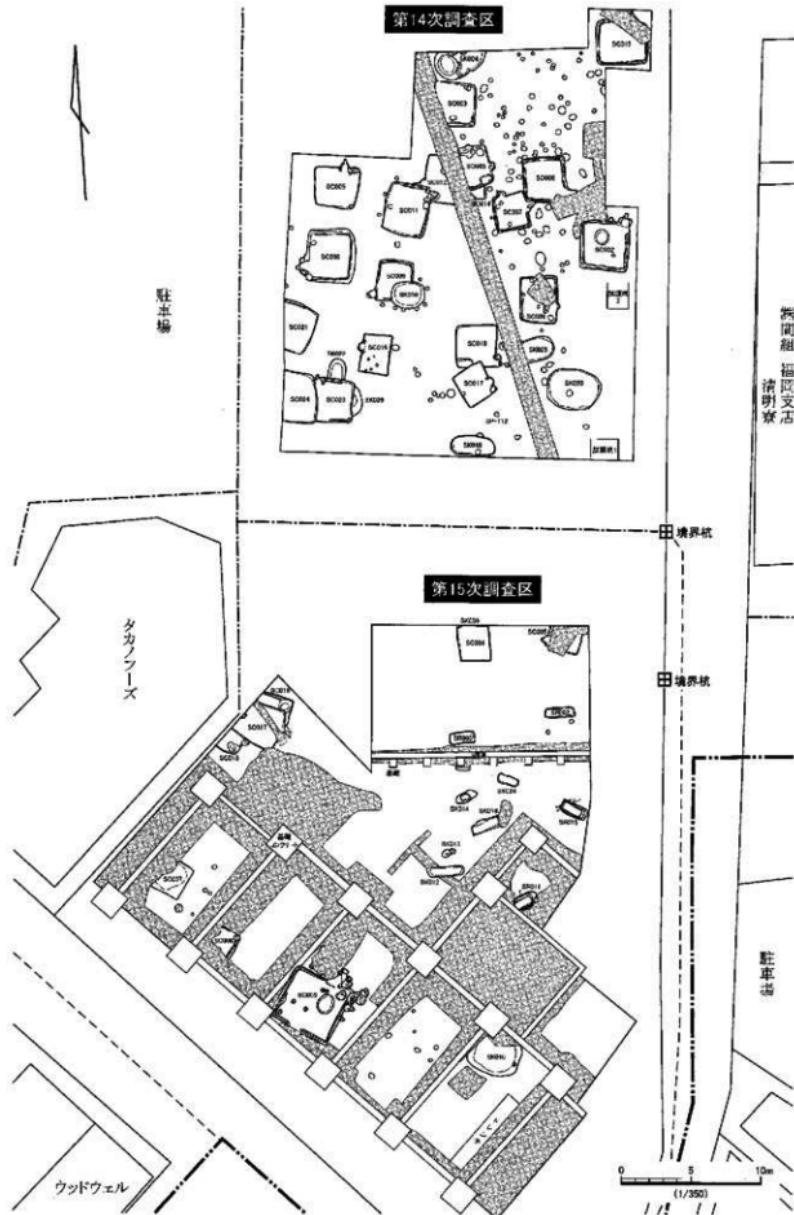
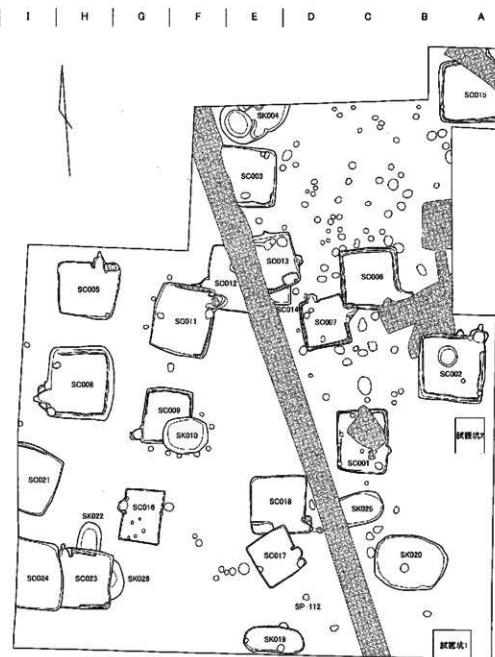
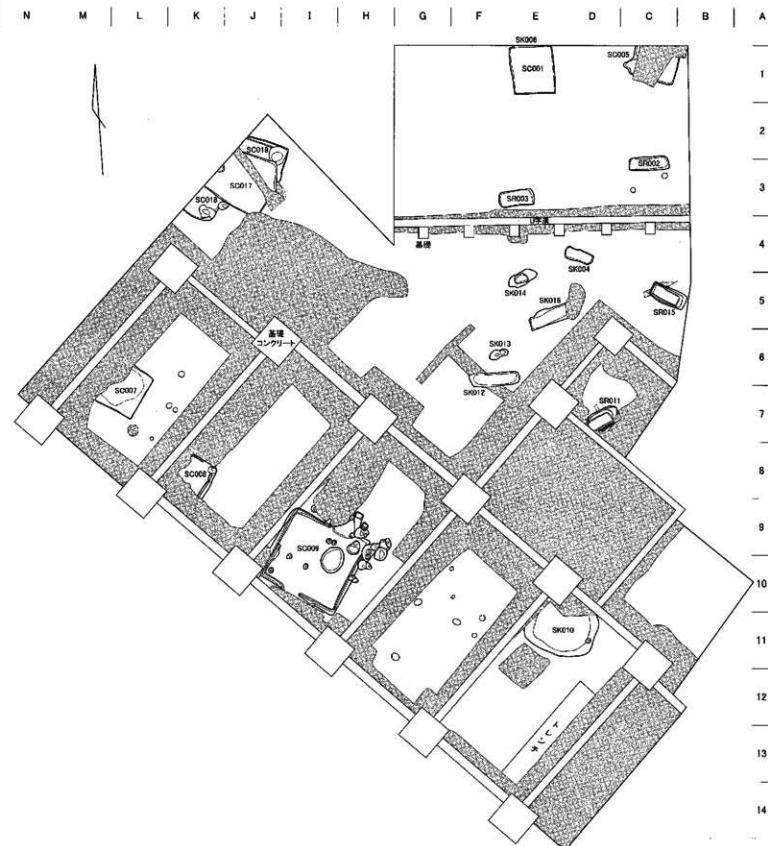


Fig.3 調査区位置図-2



【第14次調査】

掘乱



【第15次調査】

Fig.4 第14・15次調査構配図
0 5 10m
(1/200)

雜餉隈遺跡 第14次調査



The 14th Excavation Report of Zasshonokuma Site

II. 第14次調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成14年8月19日に、㈱理研ハウスの代表取締役社長・新井英淳氏より、福岡市博多区新和町二丁目24番地1号（総面積1,358.97m²）について、集合住宅建設に係る埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会に提出された（事前審査番号14-2-329）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である雄鷹隈遺跡群に含まれており、申請地周辺においても埋蔵文化財発掘調査が多く行われてきた地点である。これを受けた福岡市教育委員会では、平成14年9月3日に試掘調査を行い、対象地内において遺構が存在することが明らかになった。このため事業者と福岡市教育委員会で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。

この結果、事業地内において地下に掘削がおよぶ範囲について、発掘調査を行う合意を得ることができた。しかし福岡市教育委員会が発掘調査に着手する時期と、事業者の工事日程に調整が困難な事態が生じた。そこで民間調査機関である岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が、㈱理研ハウスの調査委託を受けて発掘調査を受託することになり、㈱理研ハウス、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室、福岡市教育委員会の三者間で、適正な発掘調査を実施するための協定書が取り交わされた。また、福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成14年11月1日から開始し、平成15年1月24日終了することができた。整理作業および報告書作成は調査終了後に開始し、平成16年3月31日に第15次調査と合本し刊行するに至った。

なお、現地で調査を行うにあたり、ご理解と多大な協力をして頂いた㈱理研ハウスをはじめとする事業者関連各位、および指導を賜った福岡市教育委員会の諸氏には、ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）

池崎謙二・久住猛雄・小池史哲・田上勇一郎・濱本正志・田中壽大・常松幹雄・吉留秀敏

山口讓治・山崎純男・米倉秀紀

福岡市教育委員会埋蔵文化財課・福岡市埋蔵文化財センター・㈱理研ハウス・㈱友清商店

2. 調査体制

事業主体（調査委託）	㈱理研ハウス
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当（調査受託）	岡三リビック㈱ 埋蔵文化財調査室
調査員	堀苑孝志（埋蔵文化財調査室 室長） 入江俊行（埋蔵文化財調査室 研究員） 天野直子（埋蔵文化財調査室 研究員） 整理作業のみ
発掘作業	加治久佳・神前美起・菊澤将憲・城戸一郎・倉岡真記・黒木三千夫 柴田徳平・中下まり江・西村秀行・古川 滉
整理作業	佐田祐一・倉園貢記・中下まり江・平野由紀子・松尾祥子

III. 第14次発掘調査の記録

SC001 積穴式住居跡

【遺構】

擾乱により中央部が床面下まで大きく抉られる。また、全体的に削平がおよび、壁面の高さは0.15m前後と周囲の住居跡と比較しても浅い。

東壁には小さく突出する部分があり、これが窓の奥壁かと思われる。火熱作用を窺わせるものや、粘土などの構築部材は認められなかった。

【遺物】

出土遺物の量は少ないが、ある程度の時別を窺い知ることのできるものに、南東隅の小穴内から出土した环蓋(001)がある。断面三角形の口縁部を垂直に短く屈曲させる特徴から、8世紀代前半の所産と考えられる。

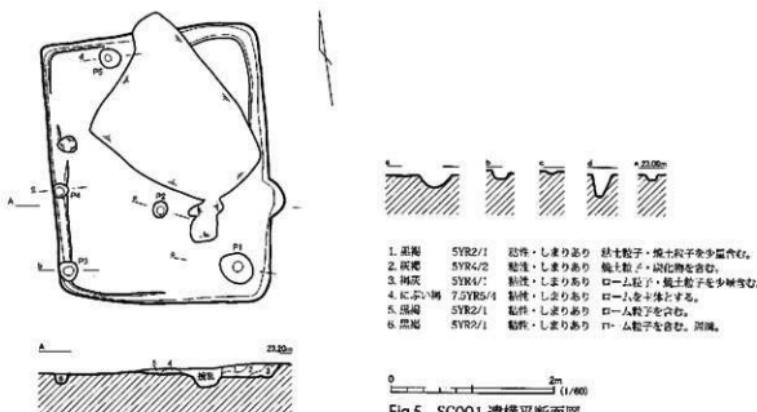


Fig.5 SC001 遺構平面図

全 体	平面形態	長方形
	主軸角度	N - 96° - E
	規模	南北 3.35 m × 東西 2.65 m (西辺は周溝外観を基準に計測した値) 西壁は搅乱により削平され残存しない 東壁も搅乱の影響はあるが、深さ 0.17 m を測る
	壁 構 成 部 分	ピット 窓 檻 床 底 部
	窓 檻 底 部	小穴5基 ほぼ全周する 全般的にロームが硬化する なし
	窓 檻 底 部	東壁の中央部側寄り 奥壁部分が、小さく突出する 0.25m 0.40m 搅乱のため削平され浅い 火熱を受けた形跡は認められず 認められず 認められず
Tab.1 SC001 遺構観察表		



Fig.6 SC001 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
001	須恵器 壺蓋	P1	(17.0)	—	2.3	灰褐色 7.5YR 7/1	口縁部は断面三角形で、ほぼ直角に短く屈曲する。内側に明瞭な棱がある。大井部は盤輪へつり取り調整。ツマミ頂部に板唇状の凹部あり。

Tab.2 SC001 出土遺物観察表

SC002 窒穴式住居跡

【遺構】

住居跡北西側を攢乱により削平される。崩壊および深さから判別すると、当該調査において大型の部類に属する。

床面は全体的に硬化しており、東側竪の手前側を除き周溝が全周する。また、中央からやや北側寄りには、浅鉢状の土坑が認められる。

さらに床面を掘り下げるとき、円凸の著しい掘方が認められ、貼床であったことが分かる。

竪は北壁に2箇所認ることができ、相互の新旧を明確にすることは可能である。旧竪はほぼ中央に構築され、小さく奥壁が突出する。周開からは竪の構築部材および炭化物等は認められず、火熱を受け赤褐色に硬化した面が、周溝により破壊されることから、こちらが当初に機能していたと判断した。そして、この竪の廃絶後に、新たな竪を東隅付近に構築する。

旧竪と比較すると、新竪の方が規模が大きい。また、両壁面上に棚状の段が浅く削られ、上面には粘土が薄く認められる。

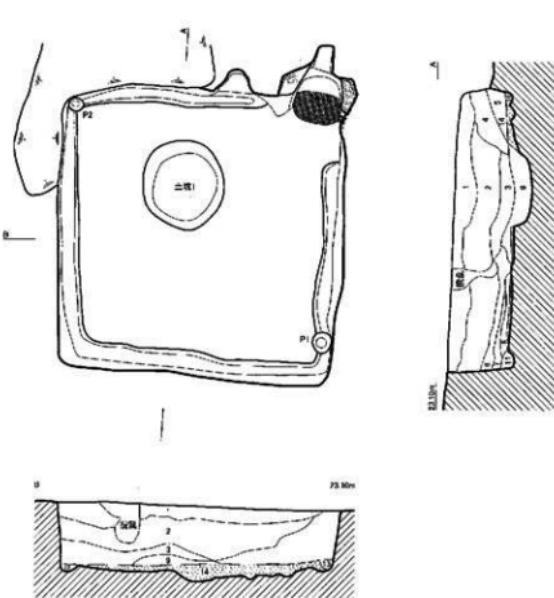
【遺物】

坪上から出土する遺物量は多く、下層に掘り進むに従い、完存もしくはそれに近い残存度の高い状態のものが増える傾向にある。

坪身（004～021）は、断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付く。いずれも体部が、直線的に外上方に立ち上がる。中には火ダスキが、底部から体部にかけて認められるもの（003）もある。

壺蓋はツマミのないもの（022）が認められる。全体的に内厚で、大井部はヘラで起こした際の痕が調整されずに残り、内面はハケ目が放射状に施される。口縁部は丸味を帯び、垂直に短く屈曲させる。ツマミがあるもの（023）は、口縁部が断面三角形で、垂直に短く屈曲させ、内側に明瞭な棱が残る。

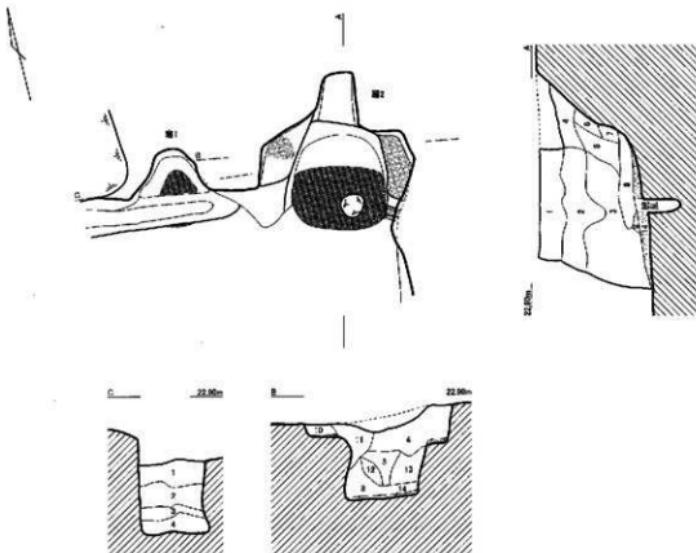
坪身の高台が貼り付けられる位置や壺蓋の口縁部の特徴から、8世紀代前半を主体とした遺物構成と考えられる。



- | | | | |
|--------|----------|------------|-------------------------------|
| 1. 塵 | 7.SYR3/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. 黒縄 | 7.SYR3/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子を少量含む。1よりやや明るい。 |
| 3. 灰 | 7.SYR2/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 4. 黑縄 | 7.SYR2/1 | 粘性弱・しまりあり | ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘土粒子を少量含む。 |
| 5. 黑縄 | 7.SYR5/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 6. 灰 | 7.SYR3/4 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・ロームブロック・粘土を少量含む。 |
| 7. 黑縄 | 7.SYR4/2 | 粘性弱・しまり弱 | ローム粒子・粘土・粘土を少許含む。 |
| 8. 黑縊 | 7.SYR5/1 | 粘性あり・固くしまる | ローム粒子を少量・粘土を多量に含む。 |
| 9. 黑縊 | 7.SYR3/1 | 粘性・しまりあり | ローム粒子・灰・粘土を少量含む。 |
| 10. 黑縊 | 7.SYR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少暈含む。固塊。 |
| 11. 黑縊 | 7.SYR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少暈含む。固塊。 |
| 12. 黑縊 | 7.SYR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少暈含む。固塊。 |
| 13. 黑縊 | 7.SYR3/2 | 粘性・しまりあり | ローム粒子を少暈含む。固塊。 |
| 14. 黑縊 | 7.SYR5/1 | 粘性・しまりあり | ロームを多量含み、固くしまる。堅方。 |

0 2m (1/80)

Fig.7 SC002 還構半断面図



電 1 C		
1. 植生	10YRG/1	粘性・しまりあり
2. 植生	10YR5/1	粘性・しまりあり
3. 植生	7.5YR4/1	粘性・しまりなし
4. 明透	7.5YR5/6	粘性・しまりなし

電 1 C		
1. 植生	7.5YR2/1	粘性弱・しまりあり
2. 植生	7.5YR3/1	粘性弱・しまりあり
3. 茶透	7.5YR3/1	粘性弱・しまりあり
4. にぶい黄透	10Y3/4/3	粘性強・しまりあり
5. にぶい黄透	10Y3/5/1	粘性弱・しまりあり
6. 黄透	7.5YR3/2	粘性弱・しまり弱
7. にぶい黄透	10Y4/3	粘性弱・しまりあり
8. にぶい黄	7.5YR5/4	粘性弱・しまり弱
9. にぶい黄	7.5YR5/4	粘性・しまりあり
10. 植生	7.5YR4/1	粘性弱・しまりあり
11. 植生	7.5Y3/4/1	粘性弱・しまりあり
12. にぶい植	7.5YR7/4	粘性・しまりあり
13. 黄透樹	10YR4/4	粘性・しまりあり
14. 植生	5YR4/1	粘性あり・しまり弱

電 2 A B		
1. 黒	7.5YR2/1	粘性弱・しまりあり
2. 黑褐	7.5YR3/1	粘性弱・しまりあり
3. 黑透	7.5YR3/1	粘性弱・しまりあり
4. にぶい黄透	10Y3/4/3	粘性強・しまりあり
5. にぶい黄透	10Y3/5/1	粘性弱・しまりあり
6. 黄透	7.5YR3/2	粘性弱・しまり弱
7. にぶい黄透	10Y4/3	粘性弱・しまりあり
8. にぶい黄	7.5YR5/4	粘性弱・しまり弱
9. にぶい黄	7.5YR5/4	粘性・しまりあり
10. 植生	7.5YR4/1	粘性弱・しまりあり
11. 植生	7.5Y3/4/1	粘性弱・しまりあり
12. にぶい植	7.5YR7/4	粘性・しまりあり
13. 黄透樹	10YR4/4	粘性・しまりあり
14. 植生	5YR4/1	粘性あり・しまり弱

Fig.8 SC002 墓1・2 平断面図

全 体	平底形態	方形
	主軸角度	竈 1(旧)・竈 2(新) N=5°E
	規 模	南北 3.50 m × 東西 3.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.76 m を測る
	ピット	床面中央から、やや北側寄りに直徑約 1.00 m × 1.10 m、深さ 0.25 m の円形を呈する土坑あり
	溝	西側の竈 1(旧)を切りばばり開窓する
	床 面	全体的に粘土が固められ硬化する
	裏 形	床面下は全般的に凹凸の著しい塊状が認められる
竈	位 置	新旧の 2 基が北壁に並んで立れる 西側が竈 1(旧)で、東側寄りが竈 2(新)とする
	形 状	竈 1(旧)：奥壁部分のみが小さく突出する
	半径半長	竈 2(新)：奥壁部分が斜長く突出する 西側壁上は櫛状の段が削りだされ、粘土が一帯に認められる
	燃焼口幅	竈 1(旧) : 0.30m 竈 2(新) : 0.65m
	火 床	竈 1(旧) : 0.45m 竈 1(新) : 0.55m
	床 部	竈 1(旧)・竈 2(新)の 2 基とも火熱を受けた面は認められず 竈 1(旧)は灰清によって部分的に破壊される 竈 2(新)は火熱を受けた部分が赤褐色化し薄く堆積する 竈 1(旧)については柱部は認められない 竈 2(新)は左袖がロームを削りだしして構築される

Tab.3 SC002 遺構調査表

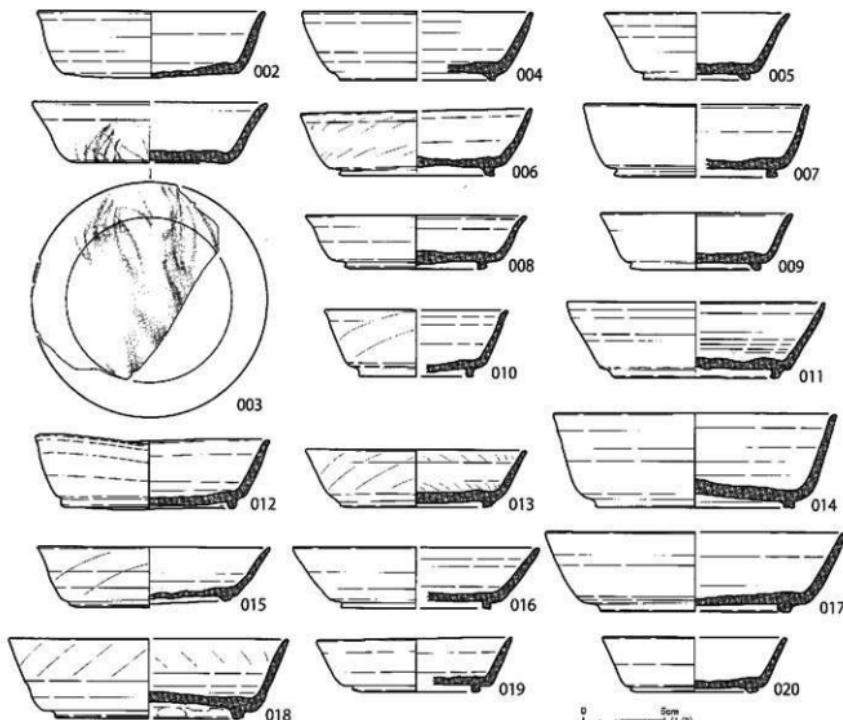


Fig.9 SC002 出土遺物実測図-1

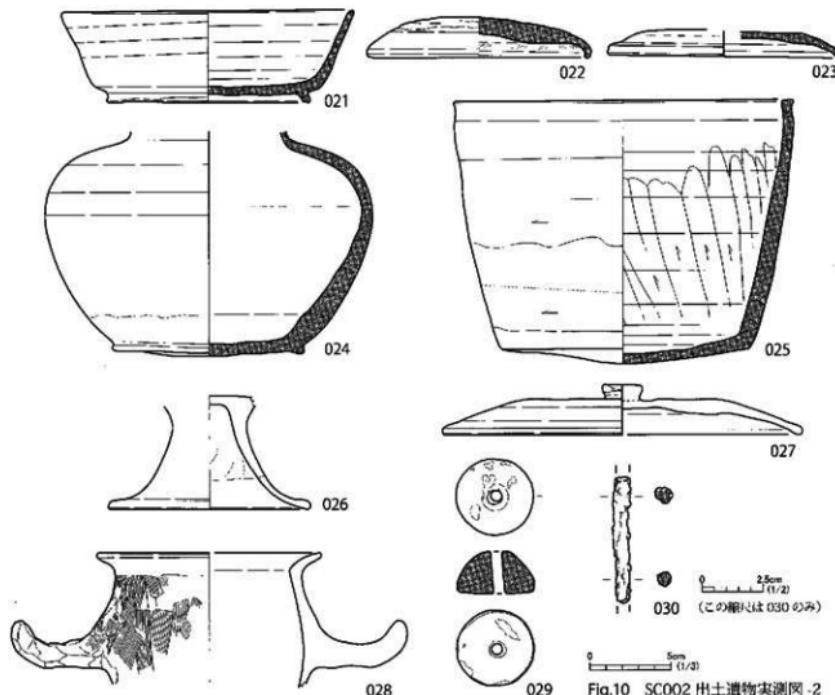


Fig.10 SC002 土壌遺物実測図 -2

遺物番号	名稱	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
002	須恵器 环	床面上	14.0	10.8	4.1	灰白 7.5YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。
003	須恵器 环身	床面上	(14.5)	10.2	3.8	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部が外反する。外縁は底部から全体にかけてと、内側に僅かに火ダスクが認められる。
004	須恵器 环身	床面上	(14.2)	(9.6)	4.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部はわずかに内輪気味となる。断面四角の凸台が、底端部付近に貼り付けられる。
005	須恵器 环身	埴土上層	(11.4)	(6.0)	4.1	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。
006	須恵器 环身	床面上	(14.2)	9.6	4.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部はわずかに内輪気味で、外面には下部から1周に向け、段りあがった崩れが斜め方時に残る。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。
007	須恵器 环身	床面上	(13.9)	(10.0)	4.5	明褐色 7.5YR 7/1	体部はわずかに内輪気味となる。断面四角の凸台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
008	須恵器 环身	埴土上層	13.6	8.7	3.4	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の凸台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。

Tab.4 SC002 土壌遺物観察表 -1

(: 内の数値は推定の法量を表す)

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			上様	底様	高さ		
009	須恵器 环身	埋土上層 掘方	11.8	8.0	3.5	灰白 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が開き気味に、底面部より内側に貼り付けられる。
010	須恵器 环身	埋土下層	(11.2)	(7.0)	4.1 ~ 4.4	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が開き気味に、底面部より内側に貼り付けられる。底部外縁には下位から上位にかけて、貼りあわせ部が斜め方向に現れる。
011	須恵器 环身	埋土下層	(15.9)	10.3	4.7	褐褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底面部より内側に貼り付けられる。底部外縁の中央に「×」印の痕跡あり。
012	須恵器 环身	埋土上層	14.4 ~ 15.5	10.8	3.9 ~ 4.7	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底面部より内側に貼り付けられる。底部は斜面へたり切る際に、周縁を底面へラフに削る。
013	須恵器 环身	埋土上層	13.8	9.3	3.9	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が、底面部より内側に貼り付けられる。底部は斜面へたり切る際に、周縁を底面へラフに削る。
014	須恵器 环身	埋土上層・埋土下層 窓内	17.4	12.2	5.8	灰灰褐色 5YR 5/3	体部は直線的に外方に立ち上がる。底面部には下位から上位にかけて、贴りあわせ部が斜め方向に現れる。断面四角の高台が、底面部より内側に貼り付けられる。底部は斜面へたり切る後に、ナデ痕跡。表面に凹みが生じる。
015	須恵器 环身	埋土下層	14.3	9.9	3.9	褐灰 7.5YR 5/3	体部は直線的に外方に立ち上がる。底面部には下位から上位にかけて、贴りあわせ部が斜め方向に現れる。断面四角の高台が、底面部より内側に貼り付けられる。底部は斜面へたり切る後に、ナデ痕跡。表面に凹みが生じる。
016	須恵器 环身	埋土下層	(15.2)	(9.2)	3.75	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が、底面部より内側に貼り付けられる。底部は斜面へたり切る後に、凹みが生じる。
017	須恵器 环身	埋土下層	(18.4)	11.6	4.9	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底面部より内側に貼り付けられる。
018	須恵器 环身	埋土上層 埋土下層	(17.2)	(11.6)	4.9	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。底面部には下位から上位にかけて、贴りあわせ部が斜め方向に現れる。断面四角の高台が底面部より内側に外方に跳ね上げるように貼り付けられる。
019	須恵器 环身	埋土下層 P1	12.0	7.9	3.4	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が、底面部より内側に貼り付けられる。
020	須恵器 环身	P1	(11.3)	7.9	3.4	灰白 7.5YR 8/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。底面部は斜面へたり切る後に、斜面下部に丁寧なテクスチャがある。底面部より内側に貼り付けられる。
021	須恵器 环身	埋土下層	18.0	12.5	5.7	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底面部より内側に貼り付けられる。
022	須恵器 盖	床面上	13.8	-	2.6	褐灰 7.5YR 6/1	全体的に丸味で、天井部外縁は天井形のため、さらに厚みを増す輪郭をつくりである。内面を真上からみると、断面形状にハケ目が認められる。
023	須恵器 环蓋	埋土上層 埋土下層	14.3	-	1.6	明褐色 7.5YR 7/1	U断面は断面三角形で、直垂に斜めに削る。天井部外縁は斜面へラフに削る。
024	須恵器 切妻邊	埋土下層	小柄	11.8	不明	灰白 7.5YR 8/1	斜面から上部が欠損するが、切妻邊である。体部の上位が最も斜面の張りが強く、この下位では底面部方向に漸減してヘラが認められる。底面部に凹み、底面に開き気味に貼り付けられる。
025	須恵器 鉢	埋土下層	20.8	15.2	16.2	明褐色 7.5YR 7/1	体部外下部は斜面へ削した後に、横カゲが行われる。体部内面は上部に向かって、直垂に張りあわせ部が逆さに認める。底面部は丸みを帯び、斜面へラフ削りが認められる。
026	土師器 盖	窗上2	不明	(12.5)	不明	黄橙 7.5YR 7/8	底面は欠損。断面両面には、贴りあわせ部が斜め方向に現れる。
027	土師器 片盤	埋土上層	22.2	-	3.1	橙 5YR 7/6	口縁部は僅かに揃み山字型突起で、端部を肉厚にする。大井井外縁は斜面へラフに削る。ハケ目を施す。
028	土師器 盤	埋土上層	(13.9)	小柄	不明	橙 5YR 6/6	外縁にはハケ目が、内面にはヘラ削りが密に施される。
029	十輪足 筋輪車	埋土上層	1.6~4.8	2.6	0.7	-	裁切凹凸の筋状溝、光沢有。
030	表裏足 鉢	埋土下層	現存長 5.2		-	6.0	鉢部の上下端部および皿部は欠損する。新井方。

Tab.5 SC002 出土遺物観察表-2

() 内の数值は推定の仮量を表す

SC003 穫穴式住居跡

【遺構】

調査区を南北に縦断する擾乱溝に、西側が破壊され形状を留めない。しかし、北西の隅がかろうじて残存していることで、およそその規模を知ることは可能である。

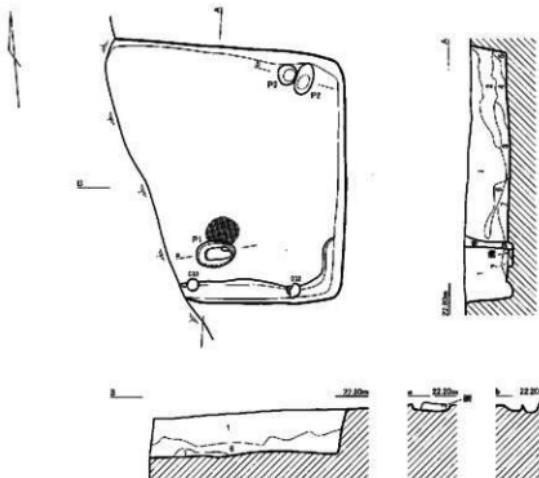
床面はロームが全体的に、硬化した状態で認められる。南側中央付近には浅い小穴があり、平滑な面を上にした状態で、礫が確認される。さらにこの小穴の北側に接した範囲は、強い火熱作用を受けた結果、赤褐色に硬化した部分が認められる。

窓らしきものを現況で認めるることはできなかったが、おそらく擾乱を受けて痕跡を全く留めない西壁に構築されていたと推測される。

【遺物】

遺物は当遺構を搅乱する溝からも認められ、破壊時に掘り返され混入したと推測される。明確に当遺構に伴うものは、南壁周溝部分で高环(032)と环蓋(033)がある。高环は脚が短かく、口縁部を直立に屈曲させる。

环蓋は口縁部を下方に僅かに摘み出す程度のもので、その際の指先による崖みが、沈線となって外周にみられる。この様な特徴は、8世紀代前半の所産と考えられる。



1. 地灰 SYR4/1 黏性・しまりあり ロームブロック・積上ブロックを多量含む。
2. 地灰 SYR3/1 黏性・しまりあり ロームブロックを少量含む。
3. 地面 SYR2/1 黏性・しまりあり ロームブロックを少量含む。
4. 地灰 SYR6/1 黏性・しまりあり ロームブロックを多量含む。
5. 地面 SYR3/1 黏性・しまりあり ローム粘土を少量含む。
6. 地面 SYR3/1 黏性・しまりあり ローム粘土を多量含む。
7. 地灰 SYR4/1 黏性・しまりあり ロームブロックを多量含む。

Fig.11 SC003 遺構半断面図

全 体	平山形態	方形
	主軸角度	難が未確認のため不明
	規 模	南北 3.19 m × 東西 3.00 m (推定)
	壁	西壁は擾乱により削平され残存しないが、これ以外はほぼ垂直に削離され、深さ 0.50 m を測る
	ビット	南側中央の小穴に平坦面を上にする礫が 1 基あり、風化が火熱を受け硬化する。他に小穴 2 基
	戻 清	南壁から南東隅にかけ認められる 西壁は擾乱のため不明
	床 面	全体的にロームが硬化する
	掘 形	なし
壁	位 置	西壁に構築されていたと推測されるが、擾乱のため消失した可能性あり
	形 状	不明
	半心船長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	袖 部	不明

Tab.6 SC003 遺構観察表

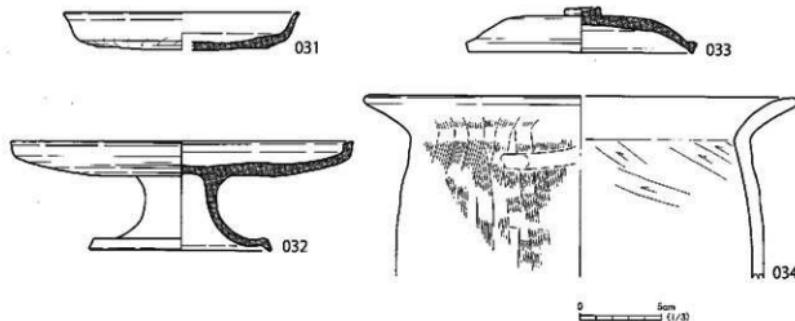


Fig.12 SC003 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
031	須恵器 盤	埋土下層	14.5	(10.5)	2.4	明褐色 7.5YR 7/1	口縁部は外反する。体部下位は縦縞へつ割り。体部表面には卜位から 口縁に向り、絞り上げた痕が倒捻方向に残る。
	須恵器 高評		21.1	11.2	6.8	明褐色 7.5YR 7/2	縦縞は浅く、口縁部を強く直立させる
033	須恵器 杯盤	埋土下層	13.8	—	2.8	褐色 7.5YR 6/1	口縁部は、体部の縦縞を彫み出した円錐の断面へ角形で内折する。天 井部は円柱へラ朝り溝。
	土師器 盤		(26.7)	—	不明	淡褐 5YR 8/4	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。

Tab.7 SC003 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SK004 土坑

【遺構】

平面形態は橢円形を量するものと推測されるが、北側の約1/3が調査区外にあり、未確認である。推定では $1.4 \times 4m$ の規模で深さは0.4mを測る。底面は凹凸が著しい不整面である。しかしこの土層において、壁面沿いの一部が僅かながら硬化しており、床面と認識できなくもなく、円形の住居跡の可能性が指摘できる。すると底面の凹凸は、掘方として理解できる。

但し、ここではあえて積極的に住居跡とはせず、土坑として留めることにした。それは今後の類例を待ち、再検討していかなければならない遺構と判断したからに他ならない。

【遺物】

出土する遺物の量は少なく、小破片が主体である。环身(035・036)は、底端部より内側に低い高台が貼り付けられる特徴から、8世紀代前半の所産と考えられる。

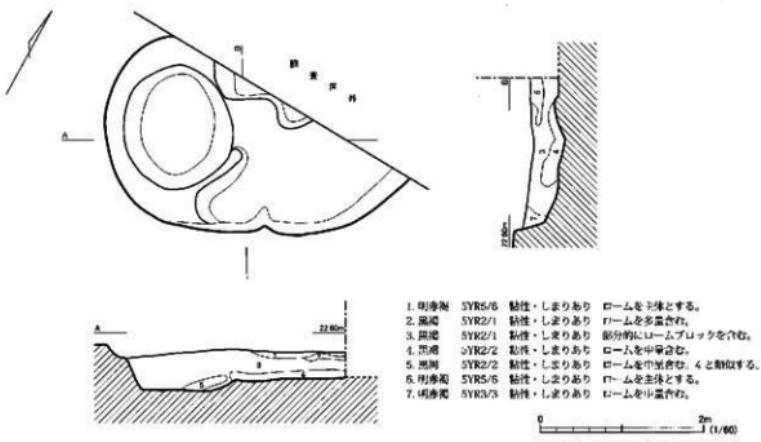


Fig.13 SK004 遺構断面図



Fig.14 SK004 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
035	須恵器	埠上	(11.7)	(8.4)	3.55	褐灰 7.5YR 5/1	体部はわずかに内凹気味に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に跳ね上がるよう貼り付けられる。
	环身						
036	須恵器	埠上	(12.4)	(7.4)	4.9	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が内傾し、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						

Tab.8 SK004 出土遺物観察表

()内の数値は標準の法量を表す

SC005 穹穴式住居跡

【遺構】

良好な残存状態で確認できた部類である。床面はロームが全体的に硬化した状態で認められる。南東隅には浅い小穴が掘られ、完存の土器がまとまって出土する。ここは竈の脇といふこともあり、収納の場とした機能的なものか、祭祀的行為に起因したものといえる。

竈は北壁の東側寄りに構築される。竈の袖部分は、向かって左側が粘土で作られるのに対し、右側はローム面を削り出した低い高まりを成す。そしてこの削り出した袖脇に、先ほどの小穴は位置する。

【遺物】

坏身（038～040）は断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付く。いずれも体部が、直線的に外上方に立ち上がる。

坏环（041）は、短い口縁を直立させた浅い坏部を持つものがあり、短い脚部には絞り上げた痕が薄く認められる。

坏蓋には口縁部を彎曲させるもの（042・043）と、そうでないもの（044）がある。前者は今回の調査において多勢を占めるが、後者は専少である。

川土状況において注目しておくべきものに、竈袖脇の小穴から川土した高坏（041）・坏身（040）・坏（046）がある。これら3種の器種が、祭祀を行う上での意識的なセットとして埋納されたと考えるならば、興味ある事例である。しかし位置的に収納の場も考慮でき、慎重に検討していくべき課題である。

遺物の特徴から8世紀代前半の所産と考えられるが、さらに高坏や口縁部を消失した坏蓋から、前半巾葉以降の様相を反映した構成とも捉えられる。

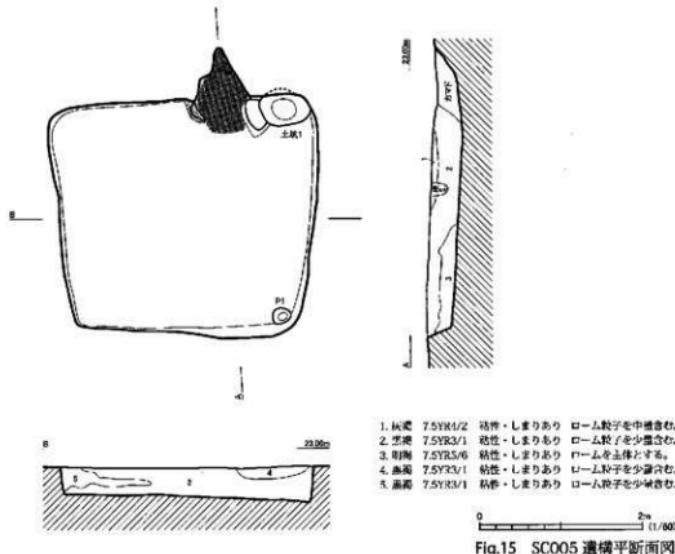


Fig.15 SC005 遺構平面図

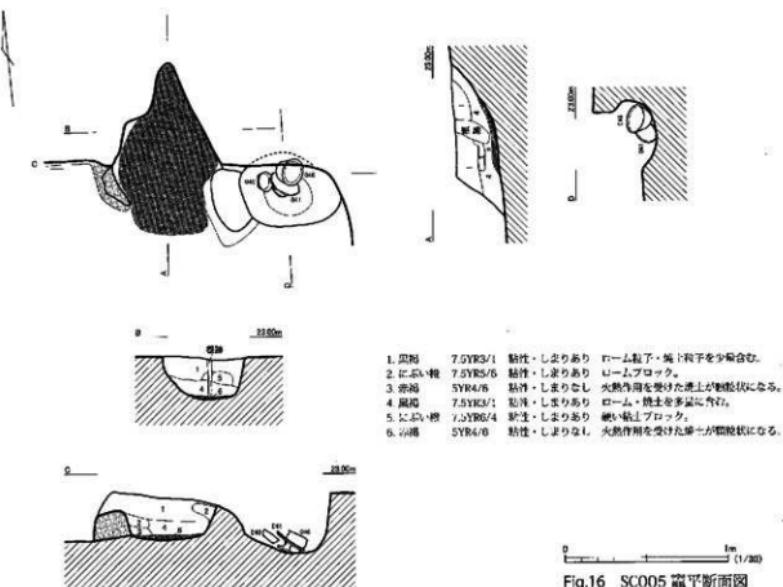
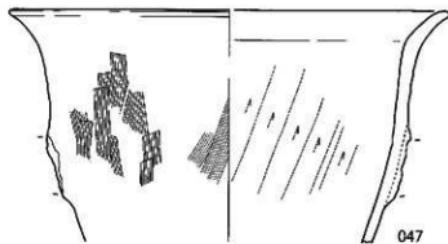
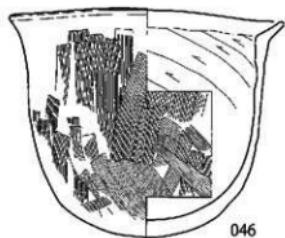
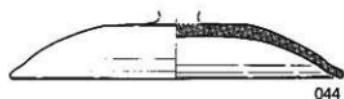
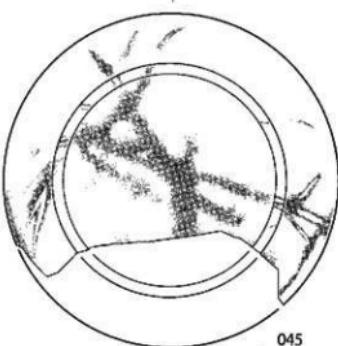
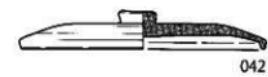
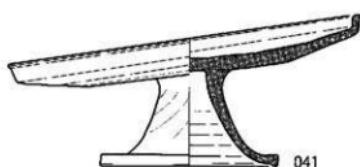
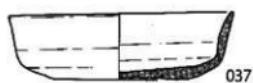


Fig.16 SC005 蟹平断面図

全 体	平西形態	方形
	主軸角度	N - 6 - E
	傾 檻	南北2.85 m × 東西3.10 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ0.4 mを有る
	ピット	北東側に0.45 × 0.60 m、深さ0.15 mの土坑があり、完形の土器が出土
	周 清	南東側に小穴1基
蟹	床 面	なし
	底 深	全体的に硬化する
	位 置	北壁の東側寄り
	形 式	煙道部が突出する
	中心軸長	0.60m
	逆傾斜	0.45m
火 床	壁	全般的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
	火 底	火熱作用を受けた土が詰められる
	部	西側の土は粘土で構成されるのに対し、東側は火床を割りだし小高い高まりとする

Tab.9 SC005 連構観察表



0 Scale
(1/30)
Fig.17 SC005 出土遺物尖端図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
037	須恵器 环	床面上	13.8	8.3	4.2	褐色 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。
038	須恵器 环身	床面上	(13.6)	(9.8)	3.85	褐色 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。表面に凹みが生じる。
039	須恵器 环身	屋土上層・屋土下層 竈火灰上	(15.1)	10.2	3.7	褐色 7.5YR 6/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。
040	須恵器 环身	P1	12.8	8.5	3.8	灰白 2.5Y 8/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。触感不ぞぞや。
041	須恵器 环	P1	21.9	11.0	9.4	利根褐色 7.5YR 7/1	体部は深く、外縁は凹凸へら削り。口縁部を強く直立させる。脚部は深く、外縁は掠りあげた痕が斜め方向に残る。
042	須恵器 环蓋	竈火灰上	(14.9)	—	2.4	褐色 7.5YR 6/1	口縁部は断面直角形で、垂直に短く開曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は削鉗へら削り跡。
043	須恵器 环蓋	床面上	16.1	—	1.6	褐色 7.5YR 4/1	口縁部は断面直角形で、垂直に短く開曲し、内側に明瞭な稜が残る。天井部は体部よりも下に陥没し、無威勢の凹みが残る。
044	須恵器 环蓋	床面上	20.5	—	不明	褐色 7.5YR 6/1	口縁は斜めさせない。天井部が高く、削鉗へら削り調整。口沿が丸味を帯び、内側には不明確。
045	須恵器 盤	床面上	20.6	14.4	2.7	褐色 7.5YR 5/1	外縁部はから体部にかけ大ダスキーが認められる。底端部は削鉗へら削り後に、削鉗へら削り調整。断面四角の凸台が、底端部より内側に貼り付けられる。
046	土師器 甕	P1	16.9	—	14.1	にぶい褐 5YR 7/1	底部は丸底である。体部の表は深く、口縁は大きく外縁に開く。断面外側はハケ目、内側はへら削りが施される。口縁は破損。
047	土師器 甕	床面上 竈上	(27.1)	—	不明	褐 5YR 7/6	把手は欠損。側部外縁はハケ目、内側はへら削りが施される。

Tab.10 SC005 山土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

SC006 窒穴式住居跡

【遺構】

南東隅が搅乱され消失する。遺構の平面形態には影響しないが、北西側にも埋土を大きく抉り取る搅乱がみられた。南西隅にはSC007 窒穴式住居跡の竈が約1/2ほど重複する。この両遺構の時期的相互関係は、火熱作用を受け硬化した竈の内壁が、SC006 窒穴式住居跡内に残存することから、SC006 窒穴式住居跡の廃絶後に、SC007 窒穴式住居跡が構築されたと判断した。

床面はロームが全体的に硬化した状態で認められた。この床面上に柱穴を確認することはできなかったが、北東隅と北西隅の住居跡壁外に小穴がある。同様のものは南東隅と南西隅にも存在したと考えられるが、搅乱とSC007 窒穴式住居跡により不明である。

また、床面の南西隅では、环身(051)と皿(052)が、伏せ並べられた状態で出土しており、住居廃絶時の祭祀行為も窺われる。

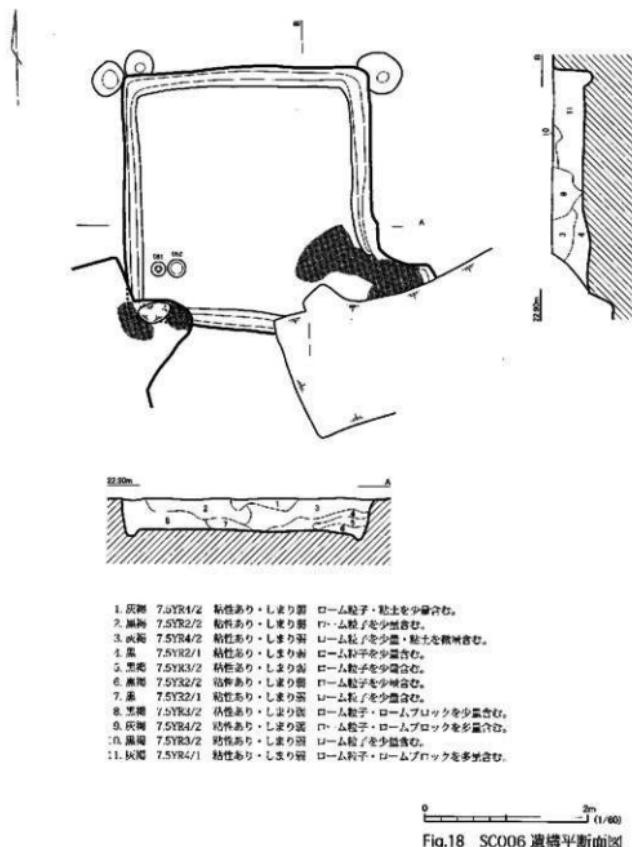
竈は東壁の南側に構築されているが、搅乱のため約1/2を消失する。火熱作用を受け、赤褐色に硬化した面が突壁から、手前の焚口まで広範囲に認められる。

【遺物】

环身(049～051)は断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付く。いずれも体部が、直線的に外方に立ち上がる。中には火ダスキーが、底部から体部にかけ認められるものもある。

环蓋(054・055)は口縁部が断面三角形で、垂直に短く開曲し、内側に明瞭な稜が残る。

环身の高台が貼り付けられる位置や环蓋の口縁部の特徴から、8世紀代前半でも前葉を主体とした遺物構成と考えられる。



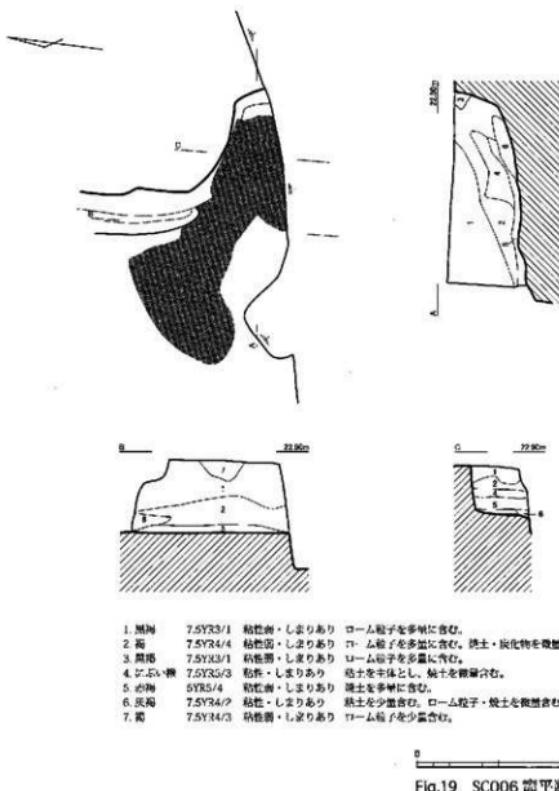


Fig.19 SC006 電平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 90 - E
	周 横	南北 2.25 m × 東西 3.05 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.40 m を測る
	ビット	なし
	用 準	ほぼ全周する
	床 面	全体的に礫化する
電	地 形	なし
	位 置	東壁の右側寄り
	形 態	通路部が突出するが、南側半分が擾乱のため消失
	中心部位	0.65m (推定)
	燃焼口部	0.70m (推定)
	壁	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に変化する
	火 床	火熱作用を受けた面が認められる
被 壓	被 壓	認められず

Tab.11 SC006 運構観察表

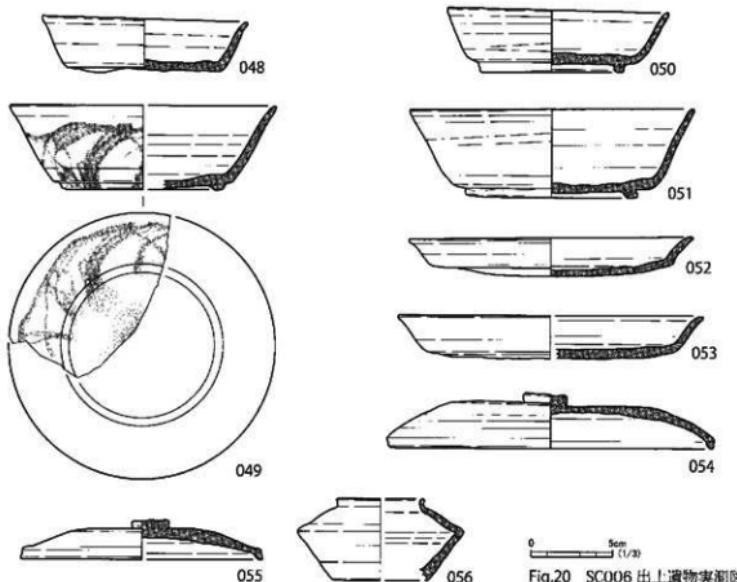


Fig.20 SC006 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特　　徴
			口径	底径	器高		
048	須恵器 环	埋土下層	12.6	9.4	3.5	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。
			(16.4)	(10.0)	5.2	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の台形が切欠き気味に、底盤部より内側に貼り付けられる。底盤部はヘラ削り調査。底部から体部にかけ火ダメスカが認められる。
049	須恵器 环身	床面上	13.6	8.8	4.0	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。底部下端は環みを有する。断面四角の台形が切欠き気味に、底盤部より内側に貼り付けられる。底部から体部にかけ火ダメスカが認められる。
			(18.8)	(15.2)	2.7	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で外反する。底盤部は火ダメスカが認められる。
051	須恵器 环身	床面上	17.5	10.6	5.5	明褐色 7.5YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の台形が切欠き気味に、底盤部より内側に貼り付けられる。底部は火ダメスカで削り後に、ナデ調査。
			(17.5)	15.1	2.5	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部で外反する。底盤部は火ダメスカが認められる。
052	須恵器 皿	床面上	20.1	—	3.4	褐灰 7.5YR 5/1	口縁部は断面二角形で、ほぼ直線に堪く底出しし、内側に明瞭な棱が現る。天井部は斜面へ剥り落す。
			(14.9)	—	2.45	にぶい褐 7.5YR 7/1	口縁部は断面二角形で、ほぼ直線に堪く底出しし、内側に明瞭な棱が現る。天井部は斜面へ剥り落すに、ナデ調査。
054	須恵器 环盤	埋土	(5.4)	(5.6)	(5.1)	褐灰 7.5YR 6/1	体部中央を屈曲させ輪郭を決める。丸い口縁が直角に凹曲する。

Tab.12 SC006 出土遺物類表

()内の数値は規定の法量を表す

SC007 窪穴式住居跡

【遺構】

竈とSC006 窪穴式住居跡の重複関係は前述したとおりで、当遺構が時期的に新しい。床面はロームが、全体的に硬化した状態で認められる。

竈は北壁の両側寄りと、東壁中央付近の2箇所に存在する。相互の時期関係については、東壁の竈付近に粘土や焼土が見当たらないのに対し、北壁の竈に集中することが認められる。こうした状況から、北壁の竈が住居廃絶時まで機能していたと判断し、東壁から北壁へと竈は造り替えられたと考えた。

【遺物】

坏身(057～059)は、底端部より内側に高台が貼り付く傾向から、8世紀代前半と位置づけられる。但し环蓋(061・062)については、口縁部を軽く摘み出された程度で、内側の稜は認められるものの、消化化していく傾向がみ出せる点から、前半中葉以降と考えてもよいのではないだろうか。

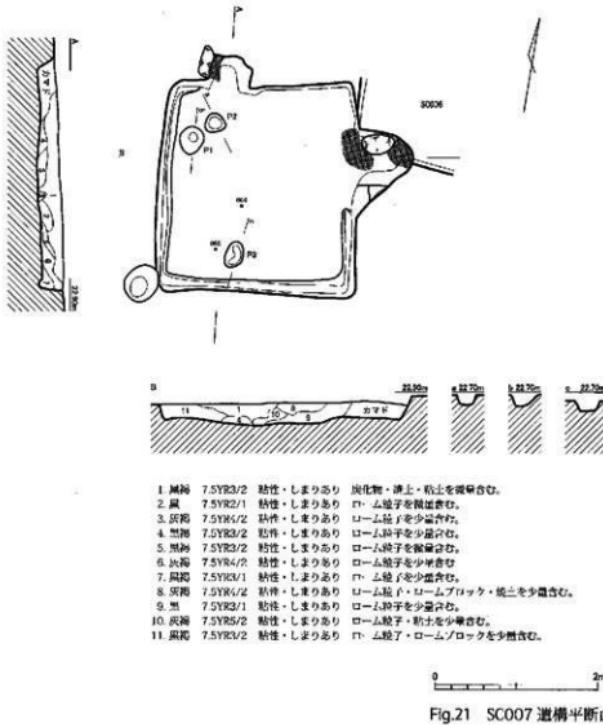
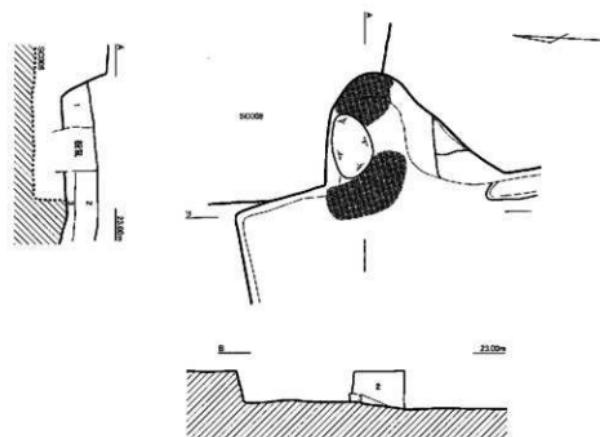


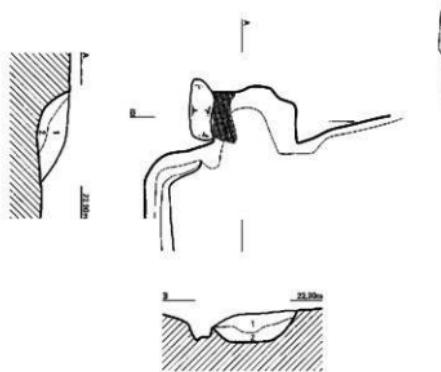
Fig.21 SC007 遺構断面図



1. 黒鉄 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
2. 黒鉄 7.5YR3/2 粘性・しまりあり ローム粒子を微細含む。
3. 灰鉄 7.5YR4/2 粘性弱・しまりあり ローム粒子を少量含む。

0 1m (1/30)

Fig.22 SC007 窪1 平断面図



1. 灰鉄 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ロームブロック・焼土・炭化物を中量含む。
2. 霧灰 7.5YR4/1 粘性・しまりあり 烧土・炭化物を少量含む。

0 1m (1/30)

Fig.23 SC007 窪2 平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竈 1(旧) N-81-E 竈 2(新) W-11-N
	規模	南北 2.50 m × 東西 2.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.25 m を測る
	ビット	小穴 3 基
	周 清	北壁側から西壁、南壁を経て東壁の邊縁まで認められる
壁	床 面	全体的に硬化する
	窓 形	なし
	位 置	東壁の中央を竈 1(旧)、北壁の内側寄りを竈 2(新)とする 2 基が認められる
	形 状	竈 1(旧) : SC006 に重複し構築されることから、火熱面でおおよその形状を類推 竈 2(新) : 一部に飴形がおおよぶが、形状は認識でき、煙部が突出する
	中心離長	竈 1(旧) : 0.70m
	燃焼口幅	竈 2(新) : 0.30m 竈 1(旧) : 0.60m 竈 2(新) : 0.35m
煙	煙	竈 1(旧)・竈 2(新)とも火熱作用を受けた面が部分的に認められる
	火 床	竈 1(旧)・竈 2(新)とも火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	竈 1(旧)・竈 2(新)とも認められず

Tab.13 SC007 遺構観察表

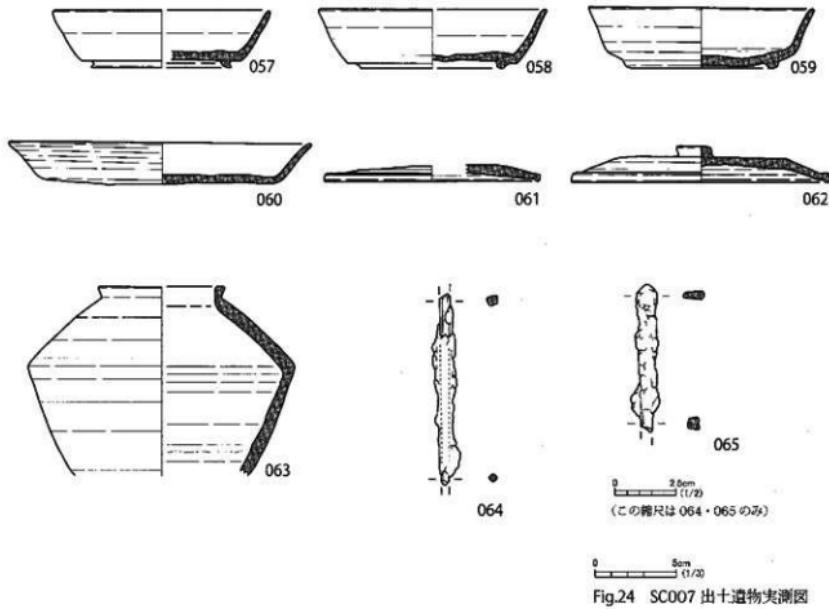


Fig.24 SC007 出土遺物実測図

遺物番号	断面	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			凸高	底径	縦高		
057	須恵器 环身	埋土下層	(13.4)	(8.6)	3.5	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。高内はハの字状に、腰きを側に底盤部より内側に貼り付けられる。
058	須恵器 环身	埋土上層 埋土下層	(14.0)	(8.8)	3.65	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面西角の高台が内側気味に、底盤部より内側に貼り付けられる。.
059	須恵器 环身	埋土上層	13.8	9.4	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	体部はやや外反しつつ立ち上がる。断面西角の高台が腰き気味に、底盤部より内側に貼り付けられる。底部は回転ヘラ切り後に、ナード調。
060	須恵器 环身	埋土下層 床面上・攪乱	18.6	14.5	2.7	にぶい黄緑 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は小柄へラ切り後に、ナード調。陶灰不良で軟質。
061	須恵器 环蓋	埋土上層・挖土下層 室内・攪乱	13.2	—	不明	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部内側には稜が認められるものの、底部は抜み出した程度の丸かなものである。天井部は豆船へラ削り調節。
062	須恵器 环蓋	埋土上層 埋土下層	18.0	—	2.3	褐灰 7.5YR 7/1	口縁部内側には稜が認められるものの、底部は抜み出した程度の丸かものである。天井部は豆船へラ削り調節。
063	須恵器 短縫曲	床面上	(7.8)	小弱	小弱	灰白 7.5YR 8/2	体部は算盤玉状を呈し、口縁がほぼ垂直に屈曲する。底部下位は4軒へラ削り。
064	鉄製品 釘	床面上	重存長 7.8	最大幅 —	厚さ —	重さ(g) —	幹部の上下端部および底部は欠損する。正面方形。
065	鉄製品 釘	床面上	6.1	0.9	0.5	7.9	尖鋸式。基部が達心から尖鋸する。

Tab.14 SC007 出土遺物観察表

()内の数値は確定の法則を表す

SC008 喫穴式住居跡

【造構】

床面は全体的に硬化しており、東側のみは貼床が施される。南西隅では小穴が認められ、この辺りからは遺物（070・071・084・085・090）が、折り重なるようにして出土した。残存状態は欠損するものが多く、住居廃絶時に投棄したものと推測される。

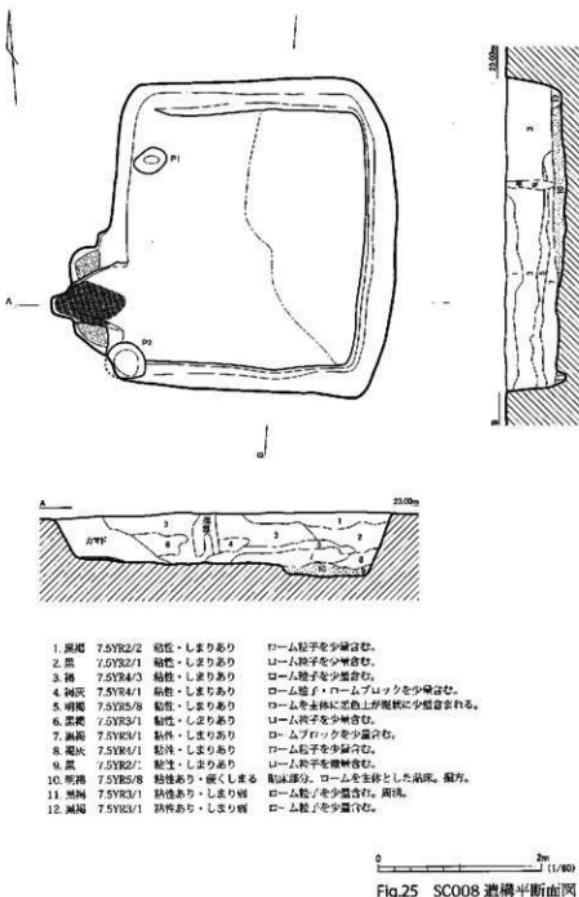
竈は西壁の南側寄りに構築される。両袖の基部はロームを削り出して造られる。奥壁両脇は浅い段が削り込まれ、この上面に粘土が薄く認められる。

【遺物】

环身は高台が底盤部より内側に貼り付くタイプ（066・069～077）と、底盤部際もしくは近くに貼り付くタイプ（067・068）に分けられる。

环蓋は断面三角形に短く屈曲させたタイプ（081・082）と、口縁部を軽く抜み出した程度で僅かなもの（079・080）に分けられる。当然ながら後者は、前者に比べ口縁部内側の稜は不明瞭となりがちである。

环身と环蓋をみると限りでは、8世紀代前半の所産といえるが、2つの特徴が混在している点から、或いは前半中葉以降の様相を示すものかと思われる。



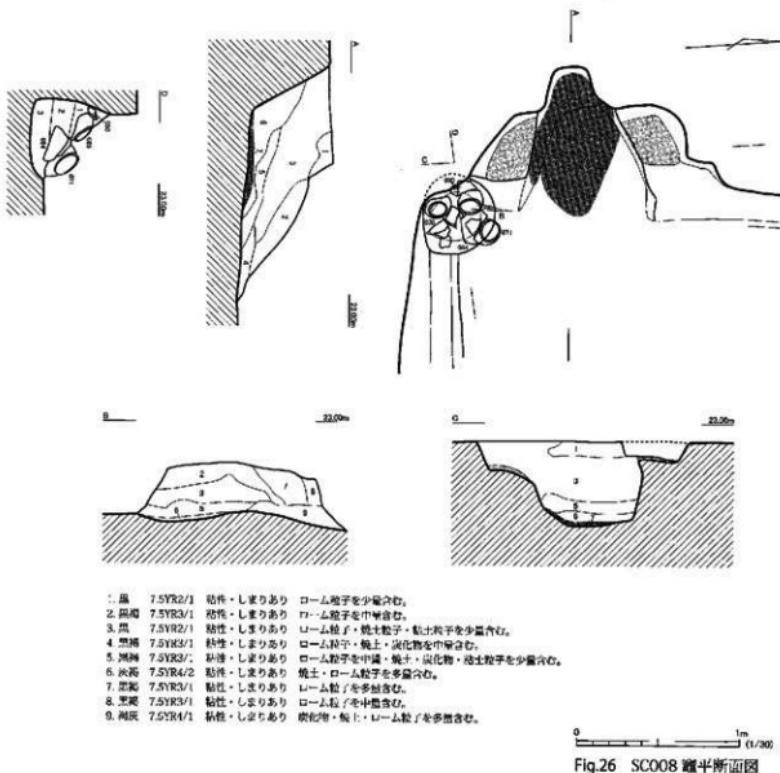


Fig.26 SC008 離半断面図

全 体	平整形態	長方形
	主軸角度	W 84° - N
	縦 横	南北 3.80 m × 東西 3.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.60 m を割る
	ビット	竈の前面に径が約 0.50 m、深さ 0.10 m の穴があり、光沢の土器がまとまって中土。西壁近く北側に小穴 1 個
	窓 溝	円盤以外にコの字状に認められる
	床 面	全体的に硬化する
	側 形	直脚半分に側方が認められる
竈	左 右	両壁の寄側寄り
	形 状	奥壁部分が極端に突出する 両側壁上は構造の段が割りだされ、粘土が一層に認められる
	中心輪盤	7.50m
	燃焼口幅	9.00m
	壁	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
	火 床	火熱作用を受けた層が認められる
	柱 部	認められず

Tab.15 SC008 遺構観察表

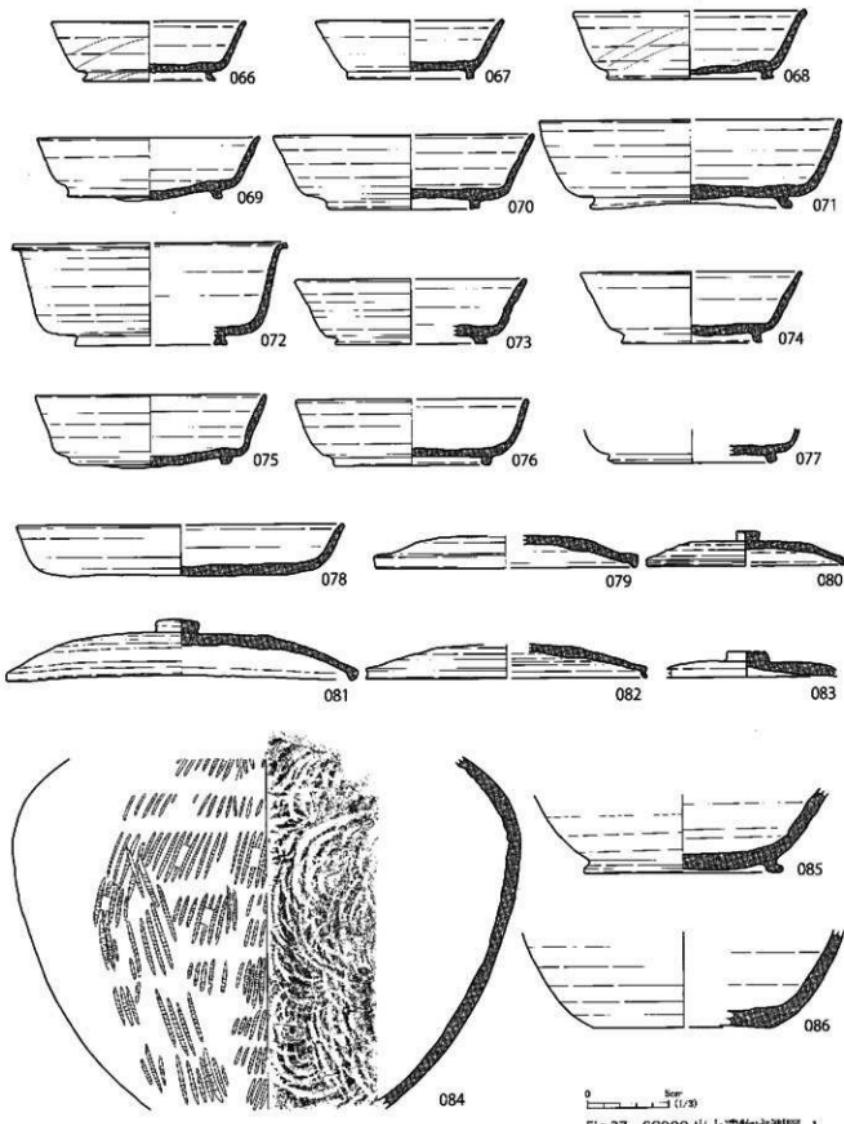


Fig.27 SC008 出上遺物実測図 -1

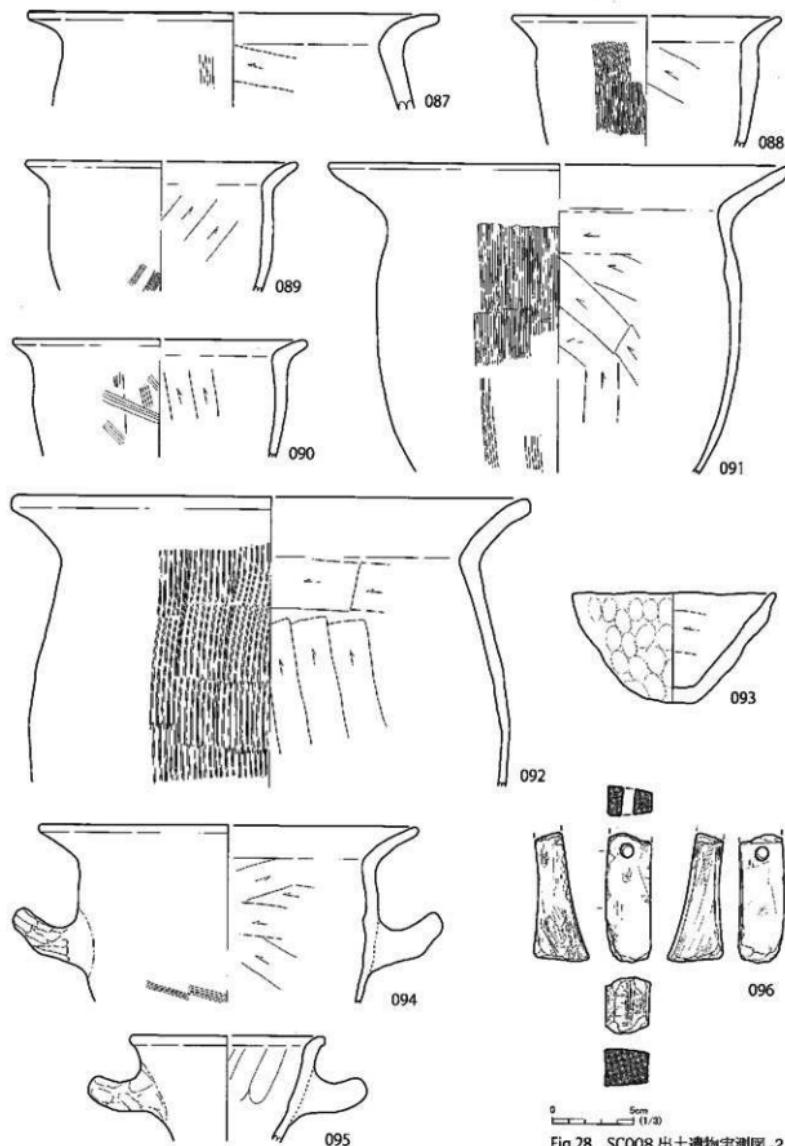


Fig.28 SC008 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法寸(cm)			色調	特徴
			口縁	底径	高さ		
066	須恵器 环身	調方	(12.0)	(8.2)	3.75	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体形外側には下部から口縁にかけて、残りあがきが剥め方向に残る。高台は底端部より内側に貼り付けられる。
067	須恵器 环身	床面上	(11.6)	7.8	3.6	羽根灰 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。
068	須恵器 环身	埴土下層	(14.3)	10.1	4.2	明褐色 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体形外側には下部から口縁にかけて、残りあがきが剥め方向に残る。底端部より内側に貼り付けられる。
069	須恵器 环身	埴土下層 床面上	13.7	9.5	3.9	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底端部は底面へラ切り後の剥離を残さない。
070	須恵器 环身	P2	(15.9)	9.4	4.6	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
071	須恵器 环身	P2	(18.0)	12.4	5.4	灰黄褐 10YR 6/2	体部は内側気泡に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
072	須恵器 环身	埴土上層 床面上	(17.0)	(9.4)	6.3	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外方に立ち上がり、円錐部を直角に屈曲させ端面を半丸にする。体部下部は回転へラ削り。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
073	須恵器 环身	埴土上層 床面上	(14.3)	(9.4)	4.0	にぶい黃褐 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
074	須恵器 环身	埴土下層	(13.6)	8.6	4.4	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
075	須恵器 环身	埴土上層 床面上	14.2	10.0	4.5	にぶい黄褐 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
076	須恵器 环身	埴土上層 埴土下層	(14.3)	9.7	4.1	にぶい黄褐 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転へラ削りの剥離を残さない。施成不良で軟質。
077	須恵器 环身	埴土上層 埴土下層	不明	(10.4)	不明	にぶい黄褐 10YR 7/2	断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転へラ削りの剥離を残さない。施成不良で軟質。
078	須恵器 皿	埴土上層・埴土下層 調方	(20.2)	14.1	3.2	灰白 10YR 8/2	底部は回転へラ削り後に、円錐部をナチ調整。
079	須恵器 环唇	埴土下層 床面上	(16.0)	—	不明	褐灰 10YR 5/1	円錐部は断面三角形で、ほぼ直角に近く屈曲する。天井部は回転へラ削り調整。
080	須恵器 环唇	埴土上層	(12.2)	—	2.15	褐灰 10YR 5/1	口縁部にはねが留められるものの、端部は抜み出た程度の僅かなものである。天井部は直角へラ削り調整。
081	須恵器 环唇	床面上	21.6	—	3.8	灰白 10YR 8/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ直角に近く屈曲する。天井部は回転へラ削り調整。施成不良で軟質。
082	須恵器 环唇	室内	(17.2)	—	不明	褐 5YR 6/6	口縁部は断面三角形で、ほぼ直角に近く屈曲する。天井部は回転へラ削り調整。施成不良で軟質。
083	須恵器 环唇	埴土上層	不明	—	不明	浅黄褐 10YR 8/3	天井部は回転へラ削り後に、ナチ調整。施成不良で軟質。
084	須恵器 皿	P2	不明	不明	不明	にぶい黄褐 10YR 7/2	体部外側は平行タキ瓶、内側には青銅波文の当判蓋が認められる。
085	須恵器 包被型	P2	不明	12.2	不明	褐灰 10YR 5/1	体部下部は回転へラ削りが施される。断面四角の高台が、両き無味に貼り付く。
086	須恵器 鉢	埴土下層	不明	(11.0)	不明	褐灰 10YR 6/1	底部は回転へラ削り後に、肩縁部のみを回転へラ削りする。体部下部は回転へラ削りが施される
087	土師器 甕	室内 床面上	(25.4)	不明	不明	褐 7.5YR 7/6	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナチ。

Tab.16 SC008 出土遺物観察表-1

()内の数値は概定の法量を示す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			性質	特徴
			口径	底径	器高		
088	土器 甕	室内 床面上	(16.6)	不明	不明	に深い槽 7.5YR 7/4	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
089	土器 甕	埋土上層	(16.6)	不判	不明	複 5YR 6/6	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。L脚部は横ナデ。
090	土器 甕	P2	(18.2)	不判	不明	浅黄褐 7.5YR 8/3	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
091	土器 甕	埋土下層	(28.4)	不研	不明	浅黄褐 7.5YR 8/4	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。L脚部は横ナデ。
092	土器 甕	埋土下層	(32.0)	不明	不明	複 5YR 6/6	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
093	土器 甕	埋土上層 埋土下層	12.5	2.0	6.85	複 5YR 5/6	尖尖の底部から逐段的に体部が外上方に立ち上がり、口縁を導くする。外壁は指痕面が所々認められる。内面はヘラ削り。
094	土器 甕	床面上	(23.4)	不明	不明	浅黄褐 7.5YR 6/4	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。L脚部は横ナデ。
095	土器 甕	床面上	(12.0)	不明	不明	複 5YR 6/6	内面を指面でなであげる。
096	石製品 石	埋土下層	残存長 7.9	最大幅 2.8	最大厚 3.4	重さ(g) 78.7	使用頻度の高い面が、磨り継ぎ大きく湾曲する。他の面にも使用時の擦痕が認められる。刃部あり。砂岩質。

Tab.17 SC008 出土遺物観察表-2

()内の数値は推定の法量を表す

SC009 穹穴式住居跡

【遺構】

南東隅はSK010 土坑に破壊され消失する。

床面はロームが全体的に硬化した状態で認められる。

竈は西壁の南側寄りに構築される。奥壁先端に搅乱があるものの、平面の形態を認識するには、さほど影響をおよぼすことはない。竈内は全体的に著しい火熱作用を受け、壁面は赤褐色に硬化し、火床も良好な状態で確認できた。袖部分については、向かって左側奥壁の延長に、住居の南壁があることから、構造的に構築してきたかは疑問である。右側の袖は確認するには至らなかった。

【遺物】

山土遺物は小破片が大部分を占めた。また、他の住居跡と比較しても点数は寡少といえ、時期等を窺い知ることのできる良好なものが乏しかった。

そうした中で竈の火床から、土器の壊身(097)が1点出土している。残存する部分は底部から高台にかけての部位で、底径が12.3cmを測る大振りの器種となる。断面四角の太く低い高台が、底端部際に貼り付く。体部はやや内湾気味となるが、上位が残存しないので具体的にし得ない。器表面は脆弱化が進み、調整等の有無を確認するのは困難である。

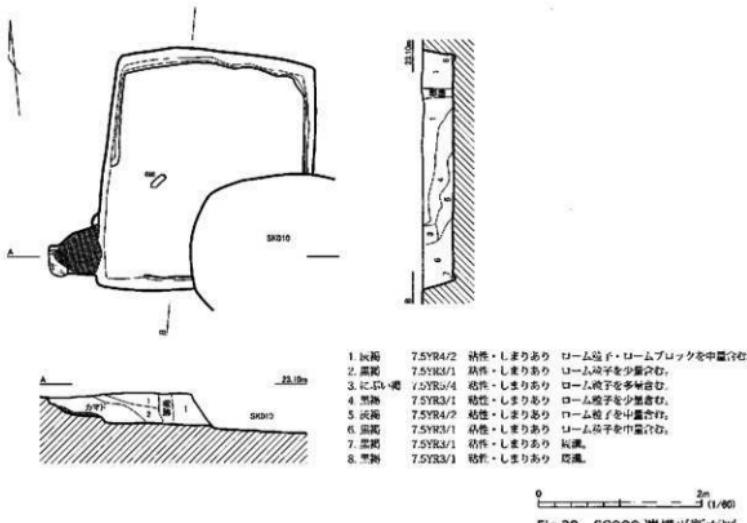


Fig.29 SC009 道構半断面図

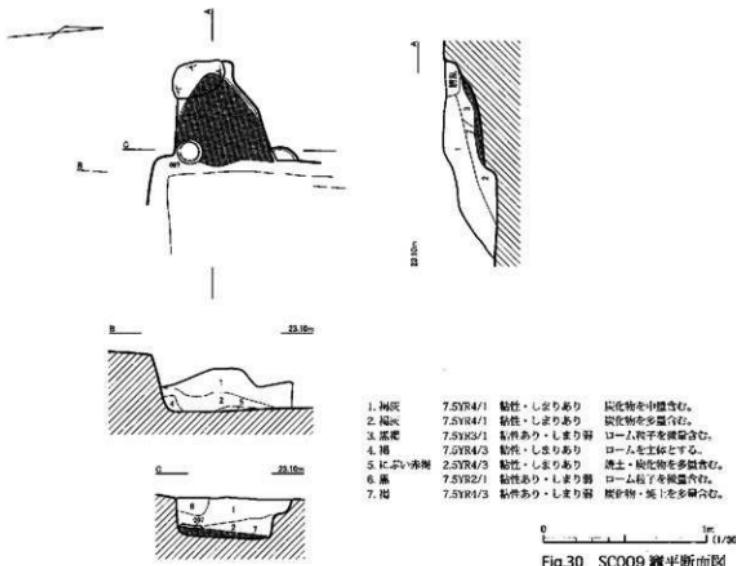


Fig.30 SC009 繩半断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	W=80° N
	規 程	南北: 2.05 m × 東西: 2.55 m
	壁 面	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.40 m を測る
	ビット	なし
	周 農	端およびこの周辺部以外を掘る
窓	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	位 置	西壁の南側寄り
窓	形 状	突壁部分が紙長い突出する 片側壁面上に小さな段が認められる
	中 心 離 長	0.60m
	燃焼口幅	0.55m
	壁	全体的に火熱作用を受け、赤褐色に硬化する
	火 床	火熱作用を受けた面が認められる
	袖 部	認められず

Tab.18 SC009 遺構観察表

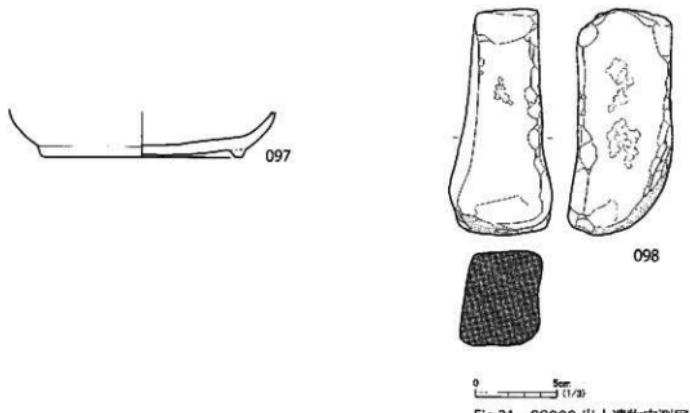


Fig.31 SC009 出土遺物実測図

遺物番号	名 称	出土地点	法 量 (cm)			色 調	特 性
			口 径	底 径	厚 高		
097	上部器 环身	竈内 火床上	小網	12.3	不明	浅黄褐 7.5YR 8/6	底部のみが残存する。底部間に良い凸凹、取り付けられる。
098	石製品 砾石	床面上	最大長	最大幅	厚さ	重さ (g)	鉄岩塊。
			13.9	6.3	6.4	775.0	

Tab.19 SC009 出土遺物観察表

SK010 上坑

【遺構】

SC009 穫穴式住居跡を破壊し構築される。平面の形態はやや押し潰された円形で、規模は $1.8 \times 2.4\text{m}$ を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さは 0.5m を測る。当遺構の性格は具体的にし得ないが、周縁を小穴が用ることより、何らかの関連性が考えられる。同様の状況は、SC009 穫穴式住居跡と重複する部分でもあり得ただろうが、住居跡の埋上中に、こうした小穴を確認するのは容易ではなく、未確認である。

【遺物】

出土遺物は少ないが、体部が直線的外方に立ち上がり、低い高台が底端部より内側に貼り付く环身(099)から、8世紀代前半の所産と考えられる。

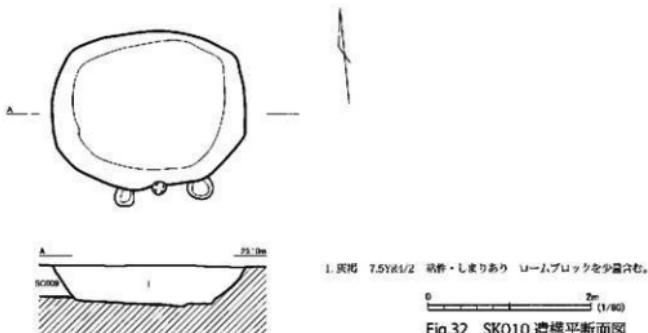


Fig.33 SK010 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地點	法量(cm)			色調	特徴
			口幅	底径	脚高		
099	須恵器 环身	埴土下層	(13.4)	(9.2)	4.35	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
100	須恵器 環	埴土上層 埴土下層	(13.4)	(10.4)	2.1	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。

Tab.20 SK010 出土遺物観察表

() 内の数値は概算の法量を示す

SC011 積穴式住居跡

【遺構】

SC012 積穴式住居跡の竈と南西隅を破壊して構築されることから、両遺構の相互関係は当遺構の方が新しいと判断できる。床面はロームが全体的に硬化した状態で認められる。

竈は西壁の北側に構築される。火床の中央はかき出された跡なのか、深く窪み、その周囲が火熱を受け赤褐色に硬化している。奥壁から先を SC012 積穴式住居跡の埋土内に求めるのは困難であったが、およよその形態を把握することは可能である。

【遺物】

坏身（102～106）は四角の低い高台が底端部より内側に貼り付き、体部は直線的に外上方に立ち上がる。

坏蓋はL字縁部を軽く擠み出した程度で僅かなもの（108）と、断面三角形に短く屈曲させたもの（109）に分けられる。

こうした特徴から 8 世紀前半を主体とした遺物構成とみなせる。さらに蓋の口縁部が消失化していく点や、坏部が浅く、短い口縁をほぼ垂直に屈曲させた高坏（107）から、前半中葉以降の様相を反映しているものと考える。

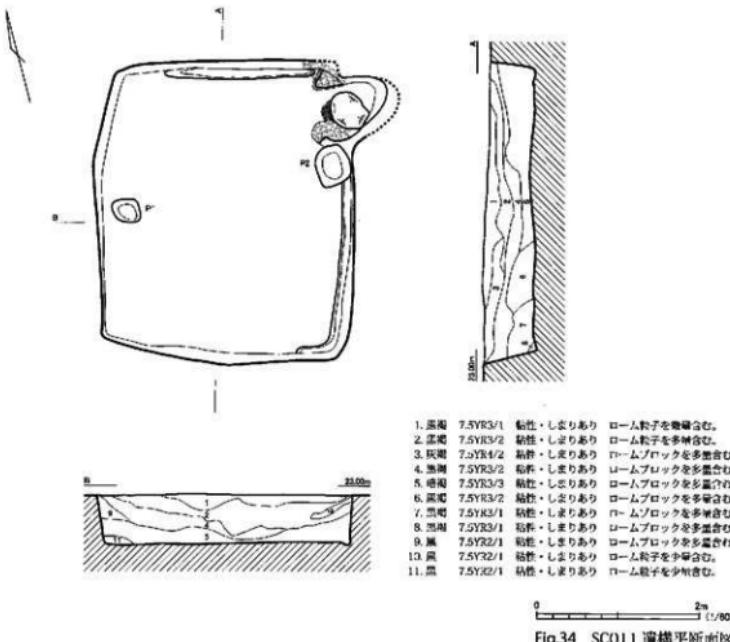


Fig.34 SC011 遺構平面図

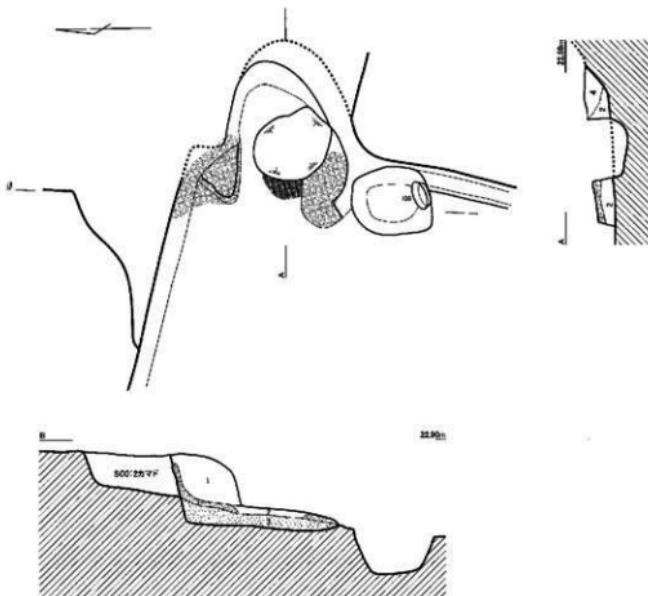


Fig.35 SC011 墓平面図

全 体	平面形態	長方形
	主軸角度	N - 96 - E
	層 横	南北 3.70 m × 東西 3.10 m
	壁	ほぼ完全に泥割された壁面で、深さ 0.60 m を測る
	ビット	施の南牆に 0.42 × 0.48 m、深さ 0.25 m の小穴 1 基 西壁近くに 1 基
	窓 溝	北壁と窓をはさみ、東壁から南東隅にかけ認められる
壁	底 面	全体的に扁平化する
	輪 形	なし
	段 階	西壁の北側寄り
	形 状	煙道部が、SC012 に重複し崩壊される
	中心軸長	1.00m
	燃焼口幅	0.40m
火 床	壁	火熱作用を受けた面が目立たない程度認められる
	火 床	部分的に火熱を受けた面が認められるものの、かき出された結果か中央部が深く抉り取られる
	被 部	両袖とも粘土で構成される

Tab.21 SC011 遺構観察表

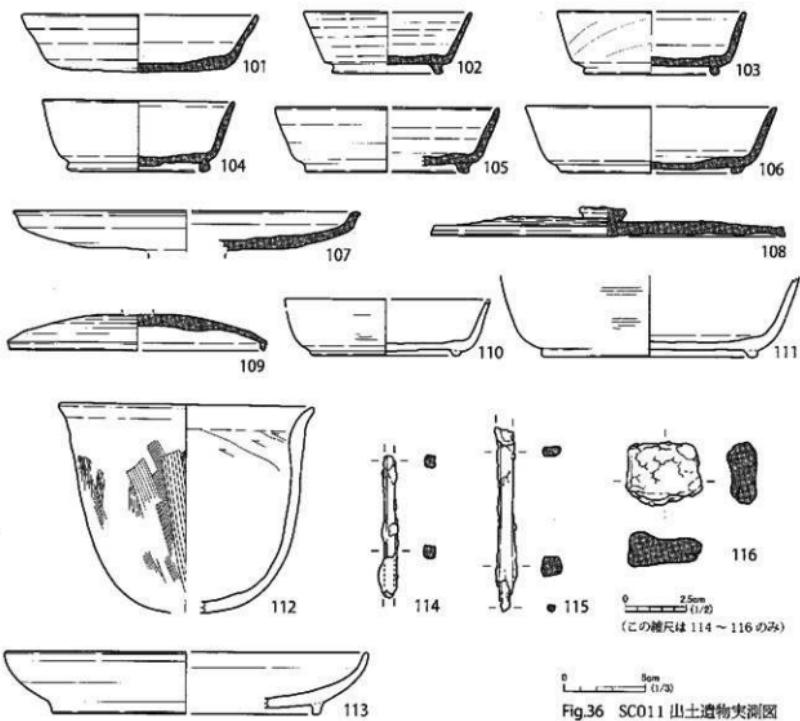


Fig.36 SC011 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
101	須恵器 环	埋土下層	(14.6)	10.8	3.5	にぶい黄褐色 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は斜面へつ切り後に、ナデ状。
102	須恵器 环身	埋土下層	(10.4)	6.8	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下部は斜面へつ切り。断面四角の高台が開き茎端に、板状部より内側に貼り付けられる。
103	須恵器 环身	埋土下層 床面	(11.6)	8.4	3.9	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、下位から口縁に向け絞りあげた痕が留め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。縫合に歯みが生じる。
104	須恵器 环身	埋土上層・埋土下層 SC014 埋土下層	11.8	8.8	4.4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下部は斜面へつ切り。断面四角の高台が、底端部より内側に贴り付けるように貼り付けられる。
105	須恵器 环身	埋土上層	(13.8)	(10.0)	4.0	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下部は丸みを帯び、断面四角の高台が留め作法道に貼り付けられる。
106	須恵器 环身	埋土下層	(15.4)	11.2	4.1	浅黄褐色 10YR 8/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。表面不真で板状。

Tab.22 SC011 出土遺物観察表-1

()内の数値は指定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口徑	底径	高さ		
107	須恵器 壺	埋土上層 埋土下層	(21.2)	不明	不明	にぶい相 7.5YR 7/4	体部は長く、口縁部は丸みを帯び、底面気味に立ち上がる。縦溝向外側に摘み出される。环部外側は内輪へラブリ割離。
108	須恵器 壺	埋土上層 埋土下層	21.8	—	1.8	褐灰 7.5YR 5/1	口縁部内側には軽く縫合跡が認められるものの、環部は摘み出された程度の僅かなものである。大井形は長く、扁平である。大井形外側は内輪へラブリ割離。
109	須恵器 壺	埋土下層 床面 -	15.7	—	不明	浅黄相 10YR 8/4	口縁部は断面V角形で、ほぼ直角に凹曲し、内側に明顯な縫合跡がある。天井部は斜く、水平である。大井形外側は内輪へラブリ割離。
110	土師器 壺	埋土下層 床面 -	(12.6)	9.2	(3.5)	浅黄相 10YR 8/4	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
111	土師器 壺	P1	不明	13.3	不明	浅黄相 10YR 8/3	体部は直線的に外方に立ち上がる。体部下部は丸みを帯び、断面四角の高台が底端部附近に貼り付けられる。
112	土師器 壺	埋土上層 埋土下層	15.8		(12.9)	にぶい相 2.5YR 6/4	体部外側はハケ目、内面はヘラ割りが施される。口縁部は継ナヂ。底端部は丸底となる。
113	土師器 壺	埋土下層	(22.4)	(16.4)	3.8	相 5YR 6/6	体部外側下部をヘラ割り。
114	鉄製品 釘	埋土上層	現行長 5.8	幅 0.5	厚さ —	重さ(g) 4.4	头部の上下端部および底部は欠損する。断面方形。
115	鉄製品 釘	埋土上層	7.6	0.7	0.4	7.5	尖頭式。根・底部の先端部を欠損する。
116	鉄製品 釘	埋土上層	—	—	—	23.0	断面不規則鉄の頭。劣化が著しい。

Tab.23 SCO11 出上遺物観察表 2

()内の数値は概定の法量を表す

SCO12 積穴式住居跡

【造構】

東側の約1/2を搅乱の溝に、窓から南西隅にかけてをSCO11 積穴式住居跡により消失する。搅乱の溝内からは多数の遺物が採取できたが、当造構のものも混入していると思われる。また、この搅乱を挟んだ東側には、SCO13とSCO14 積穴式住居跡が存在する。これらとの相互関係については、重複する部分が皆無で不明といえる。

床面はロームが全体的に硬化し、中央部では粘土塊が山盛りの状態で確認されるが、性格等は不明である。

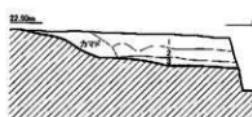
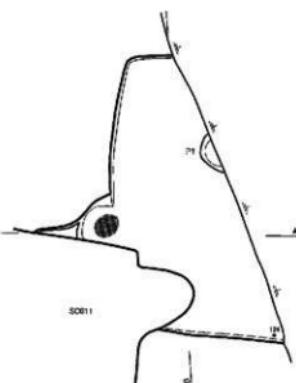
窓は東壁の南側寄りに構築されるが、SCO11 積穴式住居跡の北壁に約1/2が消失する。これにより造構相互の時期差は理解できる。

【遺物】

坏身(117~119)は体部が外方に直線的に立ち上がり、断面四角の低い高台が底端部よりやや内側に貼り付く。

坏蓋は口縁部を軽く摘み出した程度で僅かなもの(122)と、断面三角形に短く屈曲させたタイプ(123)がある。

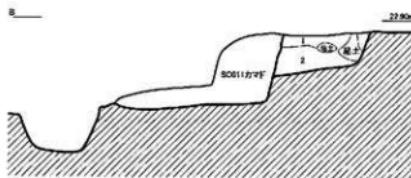
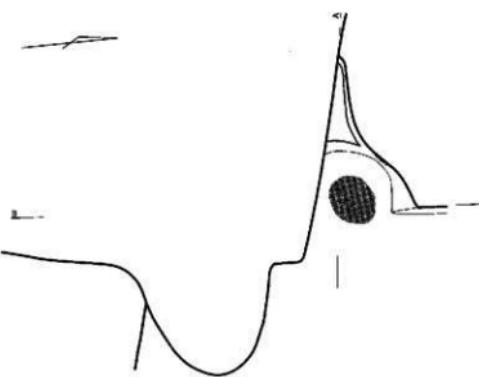
こうした特徴から8世紀代前半を主体とした遺物構成とみなせるが、坏蓋の口縁部が消失していく点から、前半中葉以降として捉えてもよいのではないだろうか。



1. 黒 7.5YR2/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を少量含む。
2. 黒 7.5YR2/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を巾帶含む。
3. 黒 7.5YR2/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を少量含む。
4. 黑褐色 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を少量含む。
5. 黑 7.5YR2/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を少量含む。
6. 黑 7.5YR2/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を巾帶含む。
7. 黑 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 塗土・ローム粒子を少量含む。

0 2m (1/40)

Fig.37 SC012 遺構平面断面図



1. にじみ・黄褐色 10YR5/4 粘性・しまりあり 塗土を少量含む。
2. 明赤褐色 5YR5/6 粘性・しまりあり 塗土を少量含む。

0 1m (1/30)

Fig.38 SC012 電平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	W-82-N
	規 模	南北3.40m×東西は東側が掘溝により消失しているため不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ0.40mを測る
	ビット	中央北よりに直径0.50、深さ0.13mの浅い小穴1基
壁	窓 構	なし
	床 面	全体的に緩やかする
	捲 形	なし
	位 置	西壁の床脚寄り
煙	形 状	煙道部が、SC011の北壁によって接続される
	中心軸長	1.00m(推定)
	焼缺口幅	0.60m(推定)
	壁	煙道部から煙り出しの部分で、深さが変化する
火 床	火 床	火熱作用を受けた面が認められる
	地 面	認められず
	地 面	認められず

Tab.24 SC012 遺構観察表

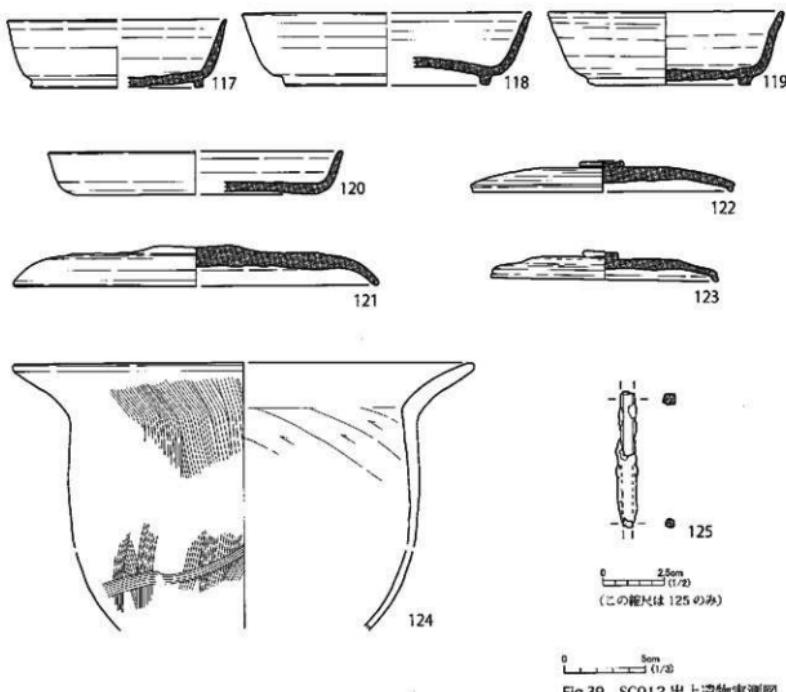


Fig.39 SC012 出上遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法寸(cm)			色調	特徴
			上径	底径	高さ		
117	須恵器 环身	床面	(13.4)	(10.0)	4.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
118	須恵器 环身	床面上	(17.8)	(12.4)	4.55	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は歪みを生じ、盛り上がる。
119	須恵器 环身	埋土下層	14.5	9.9	4.5	褐灰 7.5YR 6/2	体部は直線的に上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
120	須恵器 口	埋土上層 埋土下層	(18.2)	(14.8)	2.65	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に上方に立ち上がる。底部は細ねへら削り調型。
121	須恵器 盤	埋土上層 埋土下層	(22.4)	—	2.5	褐灰 7.5YR 6/1	天井部は失調點。
122	須恵器 牙蓋	埋土下層	(16.0)	—	1.9	褐灰 7.5YR 6/1	山根部内側には縦が認められるものの、端部はつまみ出した程度の縦かきものである。天井部は細ねへら削り調型。
123	須恵器 片蓋	埋土下層	14.0	—	1.9	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、短く鈍曲する。大井筒は細ねへら削り調型。底部に歪みが生じる。
124	土師器 甕	埋土下層	28.4	不明	不明	にぶい黄褐色 10YR 7/3	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。
125	鉄製品 釘	床面上	現存長 5.6	幅 —	厚さ —	重さ(g) 5.1	幹部の...下端部および底部は欠損する。断面方形。

Tab.25 SC012 出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

SC013 窒穴式住居跡

【遺構】

西側の約1/3を搅乱の溝により消失する。SC012 窒穴式住居跡と同様に、搅乱時に掘り返された遺物が溝内に含まれる。南側はSC014 窒穴式住居跡と重複し、当遺構の方が時期的には新しい。

竈は北壁の中央付近と東壁の南側寄りの2箇所に認めることができる。北壁の竈は奥壁が小さく突き出す程度で、火熱面が部分的に残る。火床であった付近には浅い凹みと火熱面があり、かき出した跡と考えられる。

東壁の竈も奥壁と、向かって左側の袖が残存する。この袖は砂岩を部材として用い、さらに粘土で覆い構築される。竈の手前には同様の砂岩が2石転がっていたが、これらも部材として用いられたと推測できる。こうした状況から、当初の竈は北壁にあり、次に東壁に造り替えられ、住居廃絶時まで存続していたと考えられる。

当遺構の北東隅と南東隅には浅い小穴が認められるが、いずれも竈の脇脚という位置を占める点では、収納の場としての従属性の関係にあるものと考えられる。

【遺物】

环身(126)は体部が直線的に上方に立ち上がり、その角度も大きく開かない。高台は底端部の内側に貼り付き、8世紀前半の特徴と捉えられる。

刀子(129)、鎌(130~132)といった鉄製品が出土する。

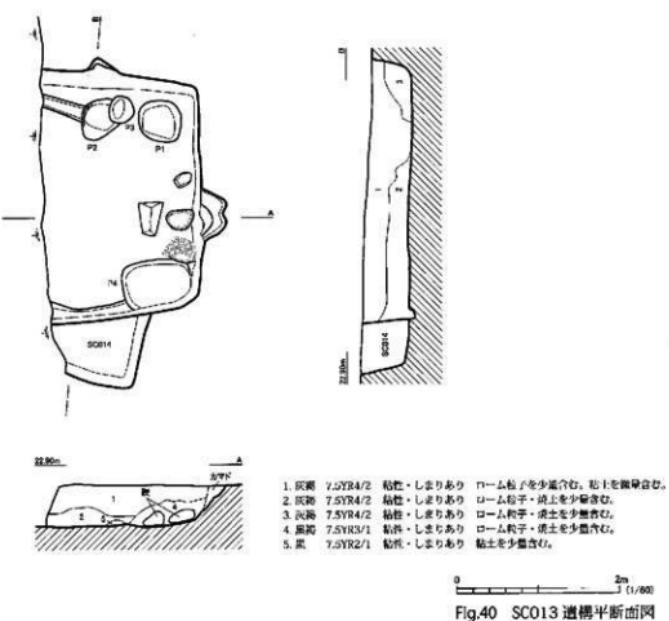


Fig.40 SC013 進捗半断面図

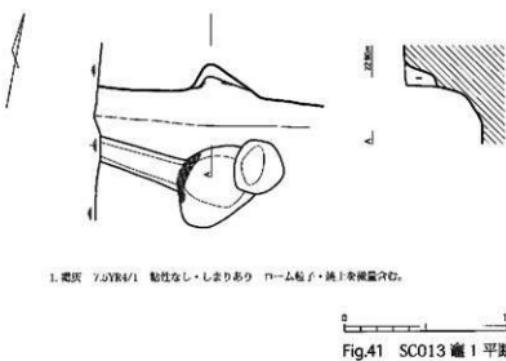


Fig.41 SC013 壴 I 半断面図

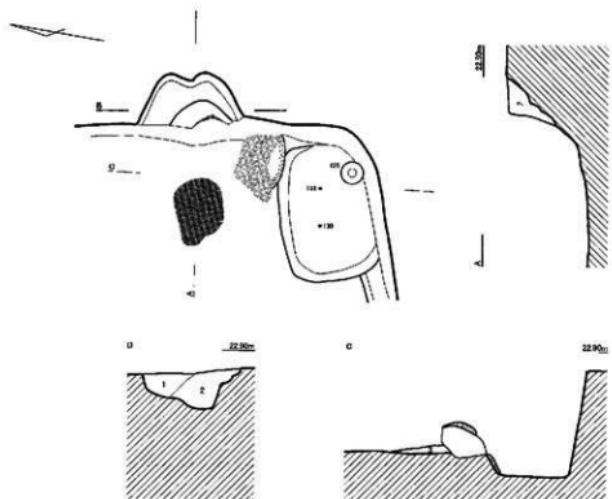


Fig.42 SC013 駐2 平断面図

全 体	平面形状	方形
	主軸角度	竪 1(旧) W-8-N 竪 2(新) N-80-R
	戸 横	南北 3.10m×東西は西側が壊乱により消失しているため不明
	壁	ほぼ垂直に削削された壁面で、深さ 0.55 m を測る
	ビット	竪 2(新) の南壁に 0.55 × 0.85 m、深さ 0.13 m の上枕 1 基 竪 1(旧) 西壁に 3 基あり、1 基は竪のかき出し跡か？
	周 溝	南壁に認められる 西壁は壊乱のため消失しており不明
	床 山	全体的に壊化する
	施 形	なし
竪	侵食状	北壁の中央を竪 1(旧)、東壁の南寄りを竪 2(新) とする 2 基が認められる
	形	竪 1(旧)：実壁部分が小さく突出する
	中心軸長	竪 2(新)：実壁部分が小さく突出する 烟突口付近に僅があり窓を構築していた部材と考えられる
	燃焼口幅	竪 1(旧) 0.15m 竪 2(新) 0.30m
	壁	竪 1(旧) 0.40m 竪 2(新) 0.60m
	火 床	竪 1(旧)-竪 2(新)において僅に火熱を受けた面を認める
	被 部	竪 1(旧)：燃焼口付近にかき出した浅い溝があり、その内側の一部に火熱を受けた面を認める 竪 2(新)：燃焼口付近が火熱作用を受けたいた 竪 1(旧)：認められず 竪 2(新)：南側池が残存しており、大きめの礫を芯材に、これを粘土で覆い構築

Tab.26 SC013 造構観察表

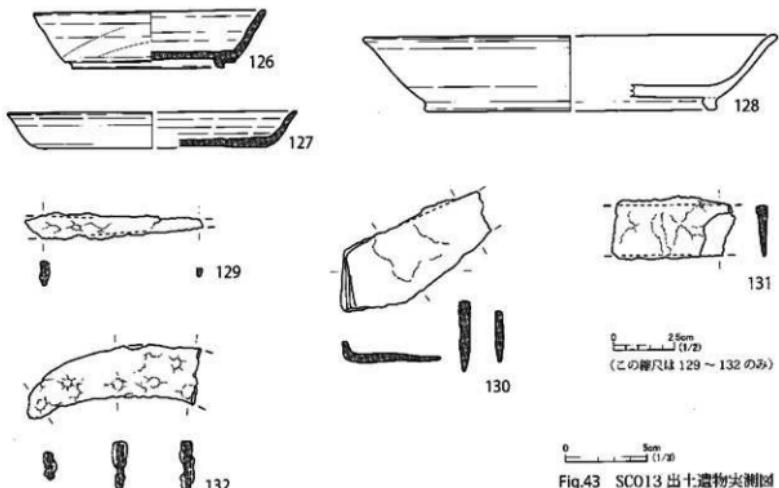


Fig.43 SC013 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)			色調	特徴
			口径	底径	厚さ		
126	漆油器 壺身	P4	14.3	9.4	3.6	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部下位は回転へク割り。表面には下位から口縁に向け、旋りあげた痕が斜め方向に残る。断面凹角の高台が、底端部より内側に盛り付けられる。
127	漆油器 蓋	床面上	(17.8)	(14.0)	2.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下位は回転へク割り。
128	上漆器 盤	埋土下層	(25.5)	(18.0)	4.6	に赤い黄緑 10YR 6/4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、上側面で外反する。体部下位は回転へク割り。断面凹角の高台が、直線的に開き気味に盛り付けられる。
129	鉄製品 刀子	埋土下層	現行長 7.2	最大幅 0.9	厚さ 0.1-0.2	重さ (g) 6.1	先端部と茎部が途中から欠損する。
130	鉄製品 盤	埋土上層	7.1	3.0	0.1-0.2	17.9	先端部と折り曲げの一端が欠損する。
131	鉄製品 盤	P4	5.0	2.1	0.1-0.3	16.4	内縫跡が残る。
132	鉄製品 盤	P4	7.1	2.1	0.1-0.3	14.5	先端部が残存し、以下は途中から欠損する。

Tab.27 SC013 出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

SC014 穫穴式住居跡

【遺構・遺物】

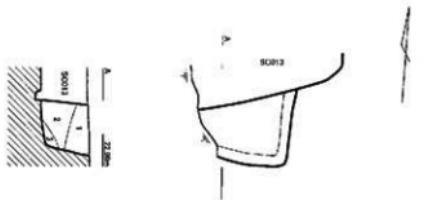
北側がSC013 穫穴式住居跡と重複し、西側は擾乱の溝により消失しているため、南東隅の僅かな部分しか残存していない。床面はロームが硬化した状態で認められる。

窓についても、住居跡の大部分が消失していたため、位置は不明である。

遺物は擾乱の溝内から採取した中に、かなりの量が混入している思われるが、“”遺構に確實に伴い出土したものはない。

この辺りは竪穴式住居が接近し、重複するものが多いのであるが、SC011～SC014 穫穴式住居跡の4軒についての相互関係を、まとめて再確認しておきたい。

まず、SC011とSC012 穫穴式住居跡、SC013とSC014 穫穴式住居跡は、直接に重複する部分がみられたので、その相互関係を明らかにすることは可能であった。しかし調査区を南北に縱断する溝を挟む格好にある、前者のグループと後者のグループでは、遺構から時刻差を具体的にすることは困難であった。



1. 灰褐色 7.5YR4/2 黏性・しまりあり ローム粘土を少混合。粘土を微含む。
2. 灰褐色 7.5YR4/2 黏性・しまりあり ローム粘土・稍」を少混合。
3. 明褐色 5YR5/6 黏性・しまりあり 粘土・ローム粘土・粘土を微含む。

Fig.44 SC014 遺構平面断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	窓が未確認のため不明
	窓 横	SC013と搅乱に人部分が後退され、南東隅しか残存せず不明
	壁	ほぼ直立に削りされた壁面で、深さ0.55mを測る
窓	ビット	確認した範囲においては認められず
	窓 構	確認した範囲においては認められず
	床 面	確認した範囲においては認められず
	埋 形	確認した範囲においてはなし
窓	位 置	確認した範囲においては認められず
	形 式	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
火 庫	壁	不明
	火 庫	不明
	部	不明

Tab.28 SC014 遺構観察表

SC015 穫穴式住居跡

【遺構】

住居跡の北東側および竈は、現代のゴミ穴による擾乱が大きく挿する。また、この周囲も広い範囲で埋土が掘削され、残存していたのは南側半分であったが、遺物の出土量は多い方である。

竈は北壁の東側寄りに構築され、奥壁から煙道を残すのみである。この竈を挟み、左右の住居跡壁面が、食い違うようである。

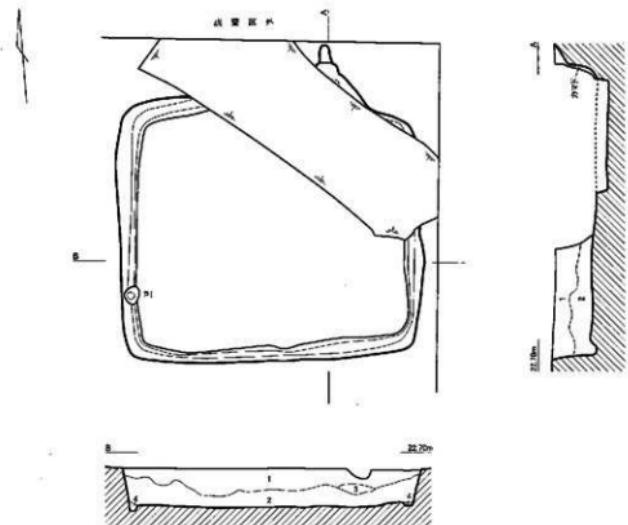
【遺物】

坏身（134～144）は断面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付き、体部が直線的に外上方に立ち上がる。

坏蓋は口縁部を断面三角形に短く屈曲させたタイプ（151・154～156）、摘み出す程度のタイプ（158・159）、口縁部が消失したタイプ（152）が認められる。

高坏（148・149）は坏部が浅く、短い口縁が、開き気味に屈曲する。この両者は脚部の長さが異なる。

坏身や坏蓋の特徴から8世紀代前半を主体とした遺物構成とみなせるが、一部の坏蓋において口縁部が退化していく傾向や、高坏の形態から類推すると、前半中葉以降の様相を反映しているものと考えられる。



1. 黒土 7.5YRS/1 粘性・しまりあり 混土・炭化物を少収容。
2. 黄土 7.5YRS/1 粘性・しまりあり 混土・炭化物を中等含む。
3. 別れ土 2.5YRS/6 粘性なし・しまり弱 流土。
4. 黑土 7.5YRS/1 粘性・しまりあり ローム粘土を微含む。腐泥。

Fig.45 SC015 遺構平面断面図

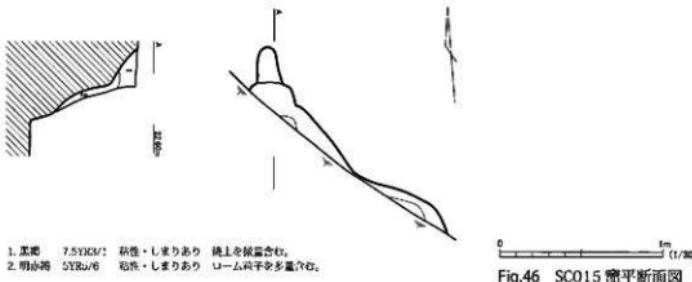


Fig.46 SC015 窓平面図

全 体	平面形態	方形
	回転角度	N-2-2
	規 格	南北3.30 m×東西3.60 m
	壁 面	ほぼ垂直に掘削された箇所で、深さ0.50 mを測る
	ビット	確認できた範囲においては認められず
窓	両 清	北壁と東壁の一部が埋土により消失するが、窓を挟みほぼ全周するものと考えられる
	床 面	全体的に硬化する
	周 形	なし
	位 置	北壁の東側寄り
竪	形 状	機械により大部分が消失しているが、窓は長くのびる
	火 熱 長	0.80 m (推定)
	燃焼口幅	0.60 m (推定)
	壁	確認できた範囲においては火熱を受けた面は認められず
火 床	火 床	機械により小片
	油 部	機械により不明

Tab.29 SC015 遺構観察表

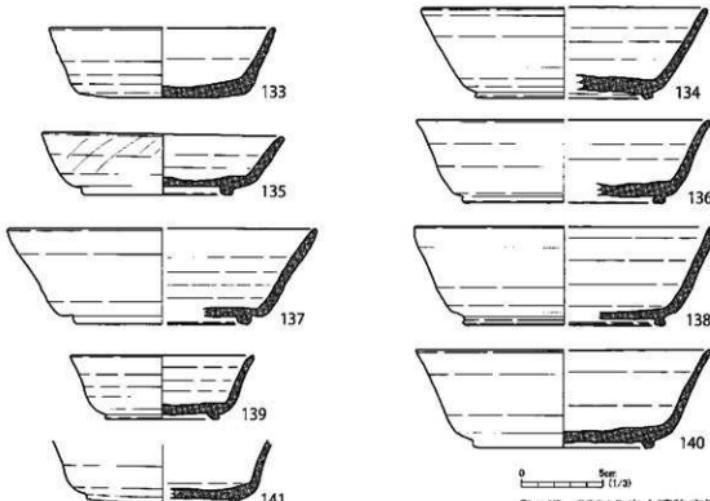


Fig.47 SC015 出土遺物実測図 -1

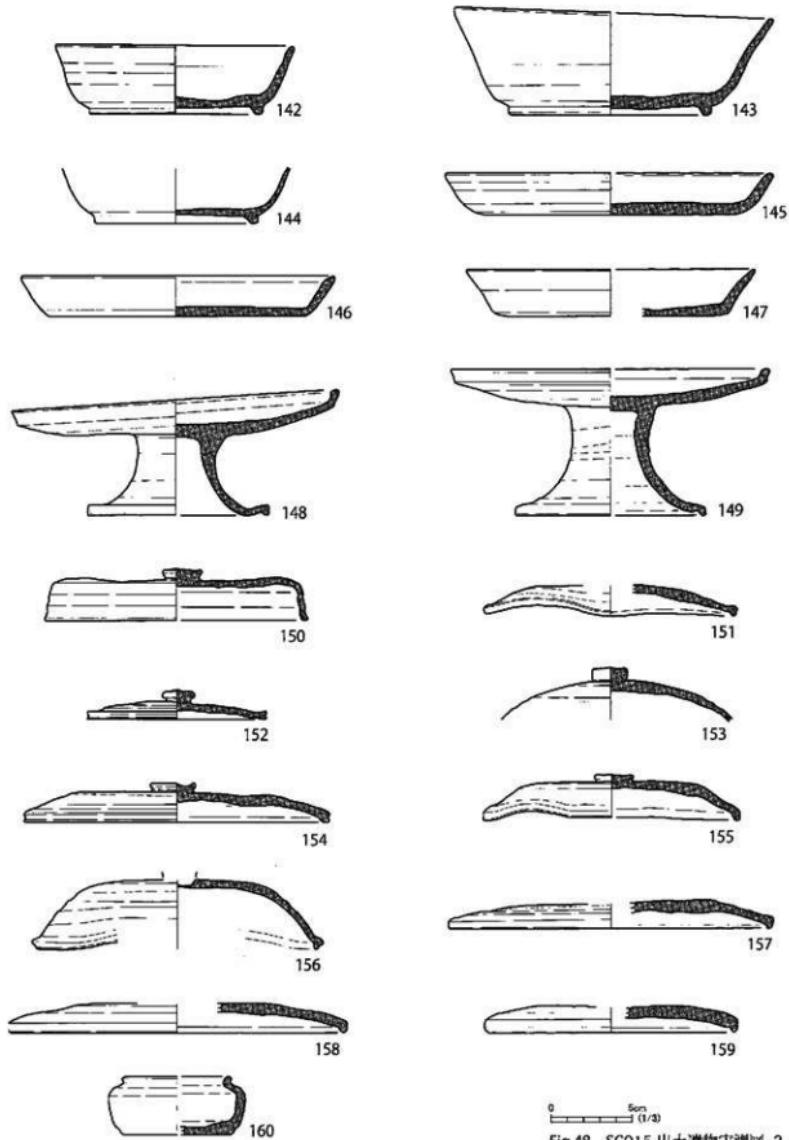


Fig.48 SC015 川土遺物実測図 -2

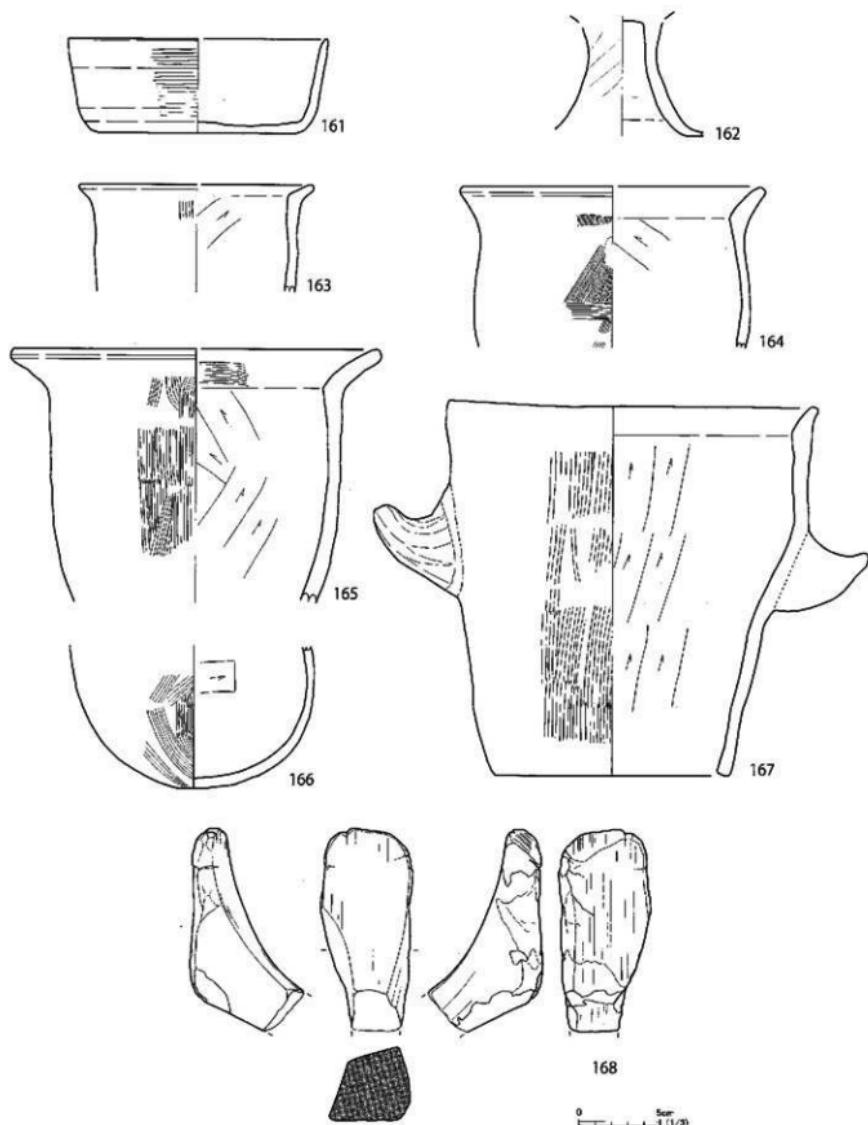


Fig.49 SC015 出土遺物実測図・3

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
133	須恵器 环	搅乱	(13.9)	10.1	4.3	にぶい黄褐 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底端部周縁は手打ちへラ削りによる痕跡。
134	須恵器 环身	埋土下層	(17.8)	(11.0)	5.5	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。
135	須恵器 环身	埋土下層	14.9	9.2	3.9	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面には下段から1/3に渡り、持ちあげた形が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
136	須恵器 环身	埋土下層	(18.1)	(12.4)	5.1	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面には下段から1/3に渡り、持ちあげた形が斜め方向に残る。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
137	須恵器 环身	埋土下層	(19.0)	(10.6)	5.9	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
138	須恵器 环身	埋土上層・埋土下層 床面上	(18.4)	(12.5)	6.1	にぶい黄褐 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
139	須恵器 环身	搅乱	11.4	7.1	3.9	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
140	須恵器 环身	埋土下層	(18.3)	11.2	6.0	にぶい褐 2.5YR 6/6	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部より内側に貼り付けられる。底部は回転へラ削り削り歪曲。
141	須恵器 环身	灰面上	不明	9.4	小明	昭褐灰 7.5YR 7/1	断面四角の高台が内側に向いて貼り付けられる。
142	須恵器 环身	灰面上	(14.8)	—	4.4	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部外側に貼り付けられる。底部不良で缺損。
143	須恵器 环身	埋土下層	(19.7)	12.3	6.7	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部外側に貼り付けられる。底部不良で缺損。
144	須恵器 环身	埋土下層	不明	3.4	9.8	浅黄褐 10YR 8/3	仮縫は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気味に、底端部に貼り付けられる。底部不良で缺損。
145	須恵器 口	埋土下層	(20.2)	15.3	2.6	灰白 10YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は回転へラ削り削曲。
146	須恵器 口	埋土下層	(19.3)	15.7	2.5	灰白 10YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部不良で缺損。
147	須恵器 口	床面上	(17.8)	(14.3)	2.9	にぶい黄褐 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部不良で缺損。
148	須恵器 口环	埋土上層 埋土下層	20.1	11.1	6.45 ~ 7.7	褐灰 7.5YR 6/1	环部は浅く、外向は回転へラ削り削曲。口縁部を強く外傾気味に立てる。
149	須恵器 高环	埋土下層	(19.6)	11.7	9.0	褐灰 7.5YR 6/1	环部は浅く、外向は回転へラ削り削曲。口縁部を強く外傾気味に立てる。
150	須恵器 盖	埋土下層	(16.2)	—	3.25	褐灰 7.5YR 5/1	天井部は回転へラ削り削曲。
151	須恵器 环带	埋土下層	15.5	—	不明	褐灰 7.5YR 6/1	天井部は断面三角形で、強く屈曲する。天井部は回転へラ削り削曲。
152	須恵器 透	埋土下層	11.0	—	1.8	褐灰 7.5YR 6/1	天井部を僅かに揃み出し尖厚にする程度で、複雑は判然としない。天井部は回転へラ削り削曲。
153	須恵器 环盖	床面上	不対	—	不明	褐灰 7.5YR 6/1	天井部は回転へラ削り削曲。
154	須恵器 环盖	埋土上層 埋土下層	18.8	—	2.4	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部内側に縫隙が認められるものの、縫隙は詰め出された程度の細かなものである。天井部は回転へラ削り削曲。

Tab.30 SC015 出土遺物観察表-1

()内の数値は測定の法量を表す

遺物番号	種類	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	厚さ		
155	須恵器 环蓋	埋土下層	15.8	—	2.8	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、短く外傾して弧曲する。天井部は四軒へラ削り調節。周縁に落みが生じる。
156	須恵器 环蓋	埋土下層	(18.0)	—	不明	褐灰 10YR 4/1	口縁部は断面二角形で、短く内傾して弧曲する。天井部は四軒へラ削り調節。落形に落みが生じる。
157	須恵器 环蓋	埋土下層	20.0	—	不明	灰白 10YR 8/1	口縁部内側には縦が認められるものの、底部は抜み出した程度の疊かなものである。大升形は四軒へラ削り調節。
158	須恵器 环蓋	埴土下層	(20.9)	—	不明	灰Ⅰ 10YR 8/1	口縁部内側には縦が認められるものの、底部は抜み出した程度の疊かなものである。大升形は四軒へラ削り調節。
159	須恵器 环蓋	埋土上層	(15.5)	—	不明	褐灰 7.5YR 7/1	口縁部内側には縦が認められるものの、底部は抜み出した程度の疊かなものである。大升形は四軒へラ削り調節。
160	須恵器 短腹壺	埋土下層	(6.8)	(6.6)	3.6	褐灰 7.5YR 6/1	体部下位は四軒へラ削り。口縁部を短く直立させる。底部は手打ちへラ削り。
161	土師器 壺	床面上	(16.2)	12.6	5.8	淡黄灰 7.5YR 8/4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、外面にはハケ目。底部は自転ヘラ削り後に、ナチ窯業。
162	土師器 壺	床面上	不明	不明	不明	淡黄灰 10YR 8/3	底部は欠損。脚部外側には、抜りあげた痕が斜め方向に残る。
163	土師器 壺	埋土下層	(14.4)	不明	不明	褐 5YR 6/6	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は模ナヂ。
164	土師器 壺	埋土下層	(18.8)	不明	不明	にぶい褐 5YR 6/4	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は模ナヂ。
165	土師器 壺	埋土上層	(22.8)	不明	不明	にぶい褐 7.5YR 6/3	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は模ナヂ。
166	土師器 壺	床面上	不明	—	不明	にぶい褐 5YR 7/4	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。底部は丸底となる。
167	土師器 壺	埴土下層	(22.8)	14.4	22.7 ~23.1	褐 5YR 7/6	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は模ナヂ。
168	石製品 瓦石	床面上	長人尺 最大幅 最大厚	最大幅 高さ(?)	340.0	使用頻度の高い面が、焼けたり大きく汚染する。他の面にも使用時の跡跡が認められる。	

Tab.31 SC015 出土遺物観察表-2

()内の数値は推定の法量を示す

SC016 窓穴式住居跡

【遺構】

平面形態が長方形を呈し、壁高も他の住居跡と比較すると浅い。床面はロームが全体的に硬化し、周溝は認められない。

竈は西壁の北側寄りに構築される。奥壁までが短く、燃焼口の幅が広い。

両袖は残存しており、粘土で構築される。

【遺物】

环身(170 ~ 173)は低い高台が、底端部より内側に貼り付き、体部が直線的に外上方に立ち上がる。

环蓋(176 ~ 177)は口縁部を僅かに摘み出し、内厚にした程度で、口縁部内側の稜は消失している。

こうした特徴から8世紀代前半を主体とした遺物構成とみなせるが、环蓋の口縁部の消失化を考慮すると、前半中葉以降のものとして捉えることも可能ではないだろうか。

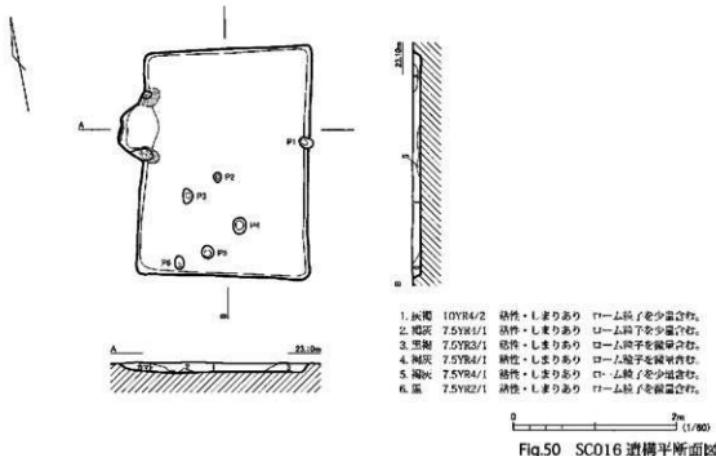


Fig.50 SC016 遺構半断面図

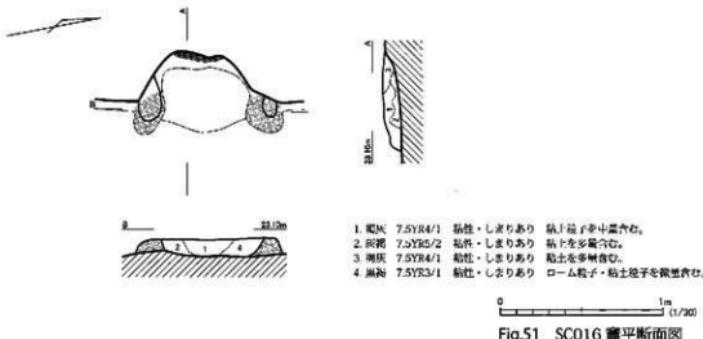


Fig.51 SC016 鑿平断面図

全 体	平面形態	長方形
	半軸角度	W - 78 - N
	縦 横	南北2.75 m × 東西2.05 m
	壁 壁	ほぼ垂直に削られた表面で、深さ0.10 mを測る
	ビット	不規則な配列で6基が認められる
窓	周 清	なし
	床 面	全体的に硬化する
	掘 形	なし
	壁 壁	西壁の北側寄り
	形 状	透視口が広く、奥壁までが深い
窓	中心軸長	0.40m (推定)
	透視口幅	0.50m (推定)
	壁	奥壁に火熱を受けた面を認める
	火 床	なし
	袖 部	両袖を蛇口により構築

Tab.32 SC016 遺構観察表

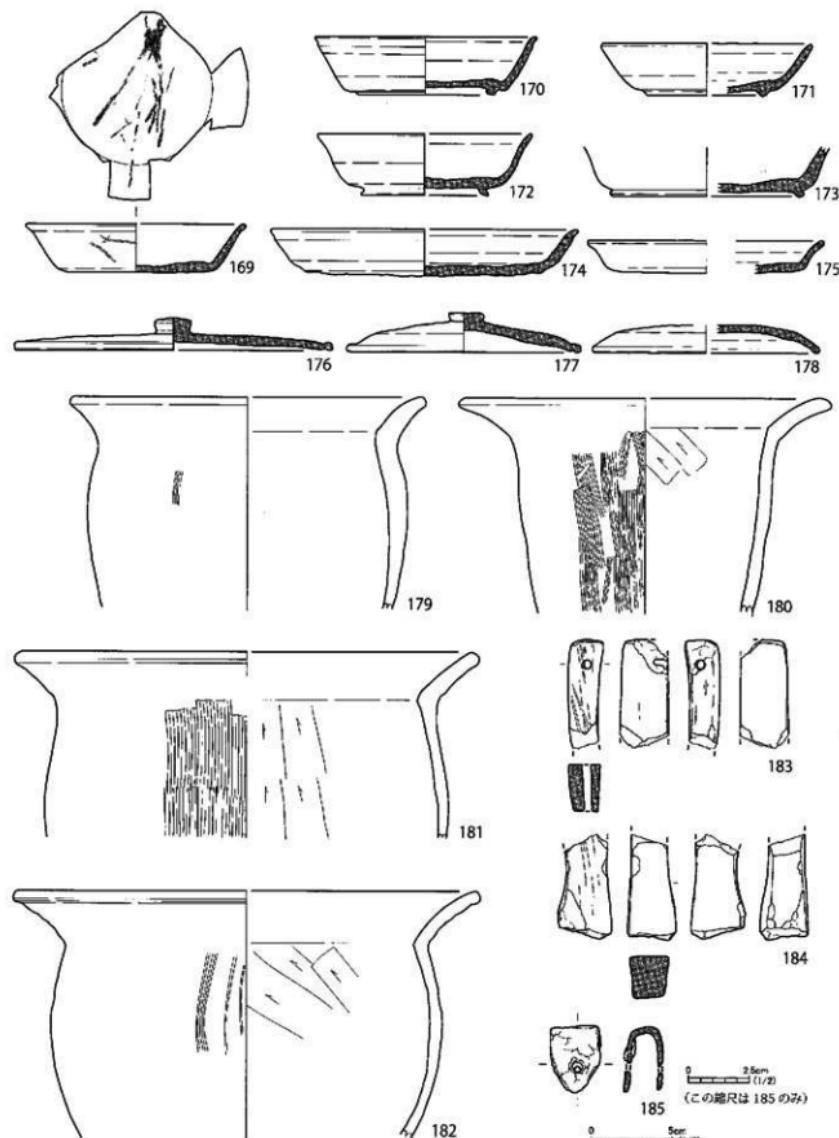


Fig.52 SC016 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口徑	底径	高さ		
169	須恵器 壺身	埋土	(13.6)	9.3	3.0	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。内面および体部外縁に火ダスクが認められる。底部は鉛板へラ切りした後の調整は認められない。
170	須恵器 壺身	床面上	13.6	8.4	3.6	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が内縁部附近に、底部より内側に貼り付けられる。
171	須恵器 壺身	床面上	(13.0)	(7.3)	3.2	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が裏面に、底部より内側に貼り付けられる。
172	須恵器 壺身	床面上	(13.2)	(7.8)	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が裏面に、底部より内側に貼り付けられる。
173	須恵器 壺身	埋土	不明	(11.9)	不明	灰白 10YR 8/2	断面四角の高台が大きく開き、底部に貼り付けられる。焼成不良で鉛板。
174	須恵器 壺	床面上	(18.9)	(14.5)	2.9	にぶい黄褐 10YK 7/2	体形は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は鉛板へラ切りした後の調整は認められない。
175	須恵器 壺	埋土	(14.6)	(12.2)	2.0	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。底部は鉛板へラ切りしたままの状態。
176	須恵器 壺蓋	火面上	(19.5)	-	2.0	灰黄褐 10YR 6/2	口辺は墨化し認められない。天井部は鉛板へラ切り調整。
177	須恵器 壺蓋	埋土	14.4	-	2.4	褐灰 10YR 5/1	口縁内側の鉛は外れ、底部は底からつまみ出された鉛部である。天井部外縁は鉛板へラ切り後に、手持ちヘラを用いて鉛を手離す。
178	須恵器 壺蓋	埋土	(14.0)	-	不明	にぶい黄褐 10YR 7/3	口辺は墨化し認められない。天井部は鉛板へラ切り後に、手持ちヘラを用いて鉛を手離す。
179	土師器 甕	埋土	(22.0)	不明	不明	にぶい黄褐 5YR 6/4	体部外縁はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナギ。肩上に鉛を多量に含む。
180	土師器 甕	埋土	(23.0)	不明	不明	にぶい黄褐 5YR 6/4	体部外縁はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナギ。内肩などに鉛を多量に含む。
181	土師器 甕	埋土	(28.6)	不明	不明	にぶい黄褐 5YR 5/4	体部外縁はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナギ。
182	土師器 甕	埋土	(28.8)	不明	不明	にぶい黄褐 5YR 6/3	体部外縁はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナギ。
183	石製品 砥石	埋土	最大長 6.7	最大幅 3.0	最大厚 2.0	重さ(g) 54.3	表面内凹。使用痕度の高い凹が、磨り減り済みする。側面に穿孔があり。砂岩製。
184	石製品 砥石	床面上	6.5	3.0	3.0	重さ(g) 76.4	使用痕度の高い凹が、磨り減り済みする。他の面にも使用時の痕跡が認められる。砂岩製。
185	銅製品 金具	埋土	長さ 2.8	最大幅 1.9	厚さ 2.6	重さ(g) 7.2	板状の金属を中央部でリテ状に折り曲げる。両端部に孔をもつ。

Tab.33 SC016 出土遺物観察表

() 内の数字は複数の社量を表す

SC017 穫穴式住居跡

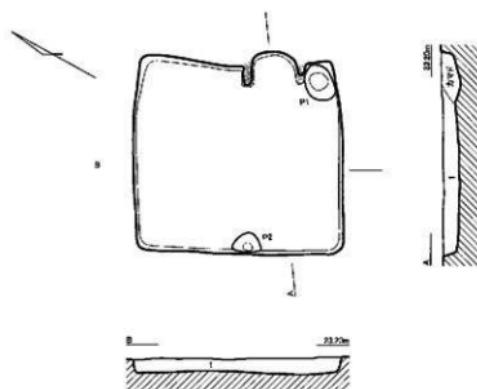
【遺構】

北東隅がSC018 穫穴式住居跡と重複しており、当遺構の床面が上位で認められることから、相互の時期については、こちらが新しいと判断した。

竈は東壁の南側寄りに構築される。形態は奥壁までが短く、燃焼口の幅が広い。竈に向かい右脇には浅い小穴が認められるが、まとまった遺物は認められない。

【遺物】

壺身(186)は体部を欠くが、高台が底端部より内側に貼り付くことから8世紀前半の所産と考えられる。壺蓋(187)もほぼ同時期のものではあるが、口縁部は摘み出す程度の短さで、消失化していく特徴が窺われ、前半中葉以降として捉えられなくもない。



1. 黒炭 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を微量含む。

Fig.53 SCO17 造構断面図

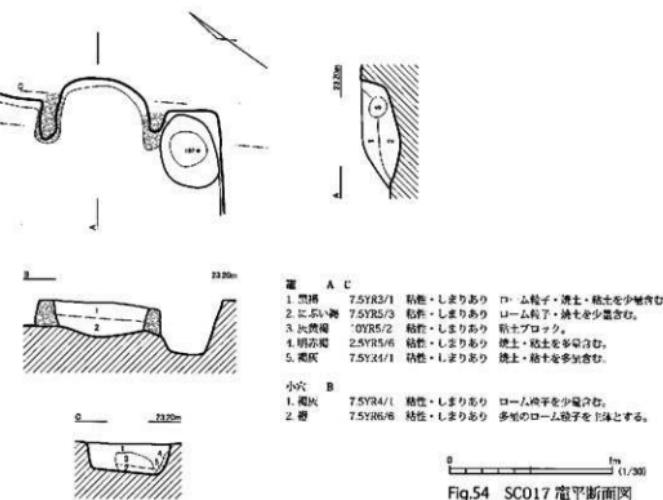


Fig.54 SCO17 売平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	N - 67 - F.
	規 模	南北 2.55 m × 東西 2.45 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.15 m を測る
	ビット	壁の南側に 0.33 × 0.45 m、深さ 0.10 の小穴 1 基
	屑 滅	内壁中央に小穴 1 基
竪	床 面	なし
	通 形	全体的に傾化する
	位 置	なし
	形 状	東壁の南側寄り
	中心離長	焼灼口が広く、実際までが短い
	焼灼口幅	0.50m
火 床	壁	3.50m
	火 床	火熱を受けた面は認められず
	抽 跡	なし
		両袖を粘土により構築

Tab.34 SC017 遺構観察表

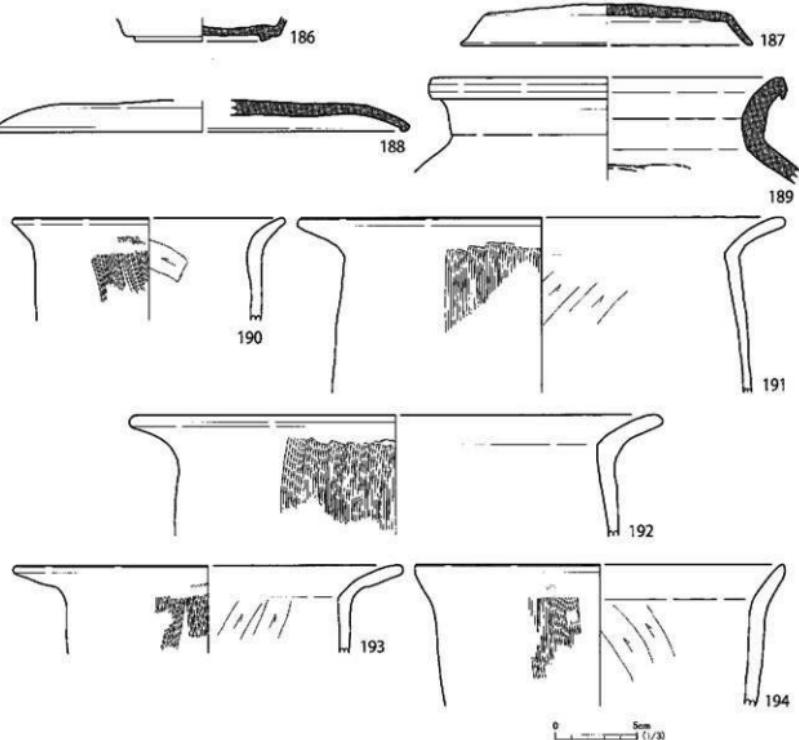


Fig.55 SC017 出土遺物実測図 -1

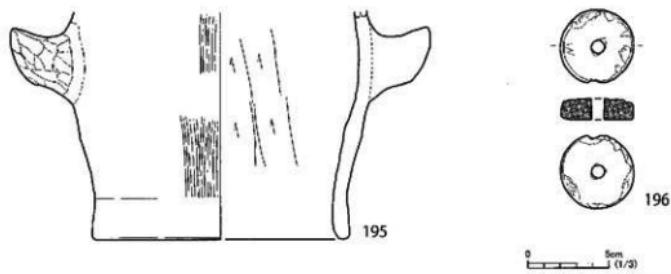


Fig.56 SC017 出土遺物実測図 -2

遺物番号	固形種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
186	須恵器 壺身	床面上	不明	8.4	不明	褐灰 10YR 6/1	断面四角の低い高台が底座部より内側に、外に跳ね上げるように貼付けられる。
187	須恵器 蓋	埋土	(18.0)	-	2.5	褐灰 10YR 6/1	口縁部をハの字形に折曲させる。穴付部はヘラ切り後は、ナチ糊脱。
188	須恵器 片盤	屋外	(25.6)	-	不明	褐灰 10YR 6/1	口縁部は底座を掘り出した程度の様なものである。片盤部は片板へナギ脱。
189	須恵器 蓋	屋外	(22.0)	小羽	不明	にぶい黄緑 10YR 6/1	口縁部を外側に押り曲げ、肥厚にする。内面には背面部を認められる。
190	土師器 壺	窯内	(16.8)	不明	不明	褐 5YR 6/6	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナヂ。
191	土師器 壺	屋外	(30.0)	不明	不明	褐 5YR 6/6	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナヂ。
192	土師器 壺	窯火床面上	(32.8)	不明	不明	褐 5YR 6/6	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナヂ。
193	土師器 壺	P1	(24.0)	不明	不明	褐 5YR 6/6	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナヂ。
194	L型器 壺	床面上	(22.8)	小羽	不明	褐 5YR 6/6	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナヂ。
195	土師器 壺	地面上	不明	(15.8)	不明	褐 5YR 7/6	体部外表面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナヂ。
196	石製品 研磨車	床面上	4.5	厚さ 孔径	重さ(g) 4.8	46.5	円板状の研磨部。滑石質。

Tab.35 SC017 出土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

SC018 窒穴式住居跡

【遺構】

南壁沿いにベッド状の段が認められ、その一部をSC017 窒穴式住居跡が破壊する。段は床面より10cm前後の高さで、ロームを削り出し構築される。平面形態は1.1m×0.5mの長方形を呈する。

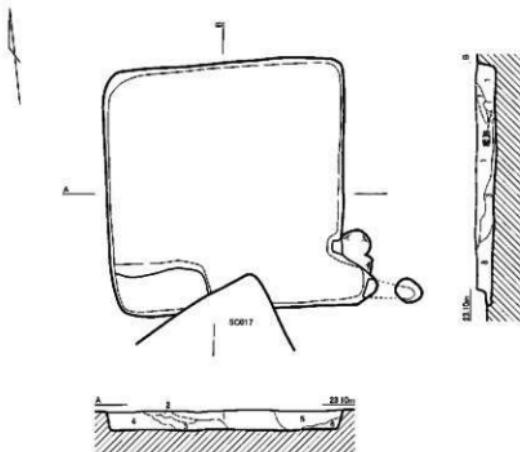
竈は東壁の南側に構築される。竈に向かい左側には、ロームを削り出した袖部が認められる。右側については、住居の南壁がそのまま延長して、竈の壁面となるため、袖部らしきものは認められない。奥壁には穴が穿たれ、煙道部がトンネルの状態で延びる。その先端には煙出しの小穴があり、土師器の表の破片が集中して出している。

【遺物】

环身（197～203）は体部下位が丸味を帯び、高台は底端部よりやや内側に貼り付く傾向が認められる。

环蓋（204・205）は口縁部を断面三角形にし、内傾気味に短く屈曲させる。内側には稜が明瞭に認められる。これらの特徴から8世紀前半の所産と考えられる。

この他には、体部上位に「大」とヘラ書きされた文字を持つ環（208）が認められる。



1. 売板 7.5YR3/1 黏性・しまりあり ローム板子・粘土を少量含む。
2. 在砂 7.5YR6/4 黏性・しまりあり ロームブロック・粘土を多量含む。
3. 地床 7.5YR6/1 黏性・しまりあり ロームブロック・粘土を中心含む。
4. 煙道 7.5YR4/1 黏性・しまりあり ロームブロック・粘土を少量化。
5. 煙道 7.5YR4/1 黏性・しまりあり ロームブロック・粘土を少量含む。
6. 煙道 10YR8/1 黏性・しまりあり 粘土を多量含む。之上・灰化物を微量含む。
7. 煙道 10YR8/1 黏性・しまりあり 粘土を多量含む。之上・灰化物を微量含む。
8. 环身 7.5YR3/1 黏性・しまりあり ローム粘子を微量含む。

Fig.57 SC018 遺構平面図

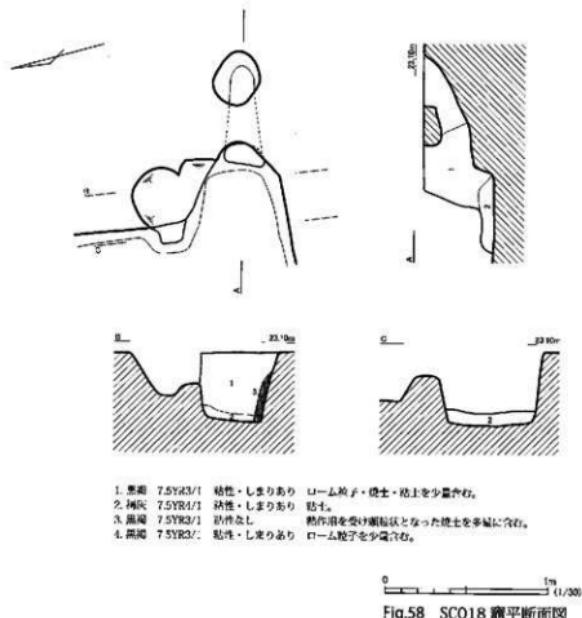


Fig.58 SC018 窓平面断面図

全 体	平面形態	方形
	傾斜角度	N 96°-E
	規模	南北 3.00 m × 東西 2.90 m
	壁	ほぼ地面上掘削された路面で、深さ 0.25 m を測る
	ビット	なし
窓	周溝	なし
	床面	全体的に硬い土 南壁両側にベッド状の段あり
	形状	なし
窓	位置	東壁の南側
	形状	煙道が長く延び、その先に煙出しの小穴がある
	中心軸長	1.05m
	燃焼室幅	0.45m
	壁	火熱を受けた面は認められず 住居の南壁が延長し、窓の壁をなす
火床部	火床	なし
	袖	北側にロームを削り出した窓の壁が認められる

Tab.36 SC018 遺構観察表

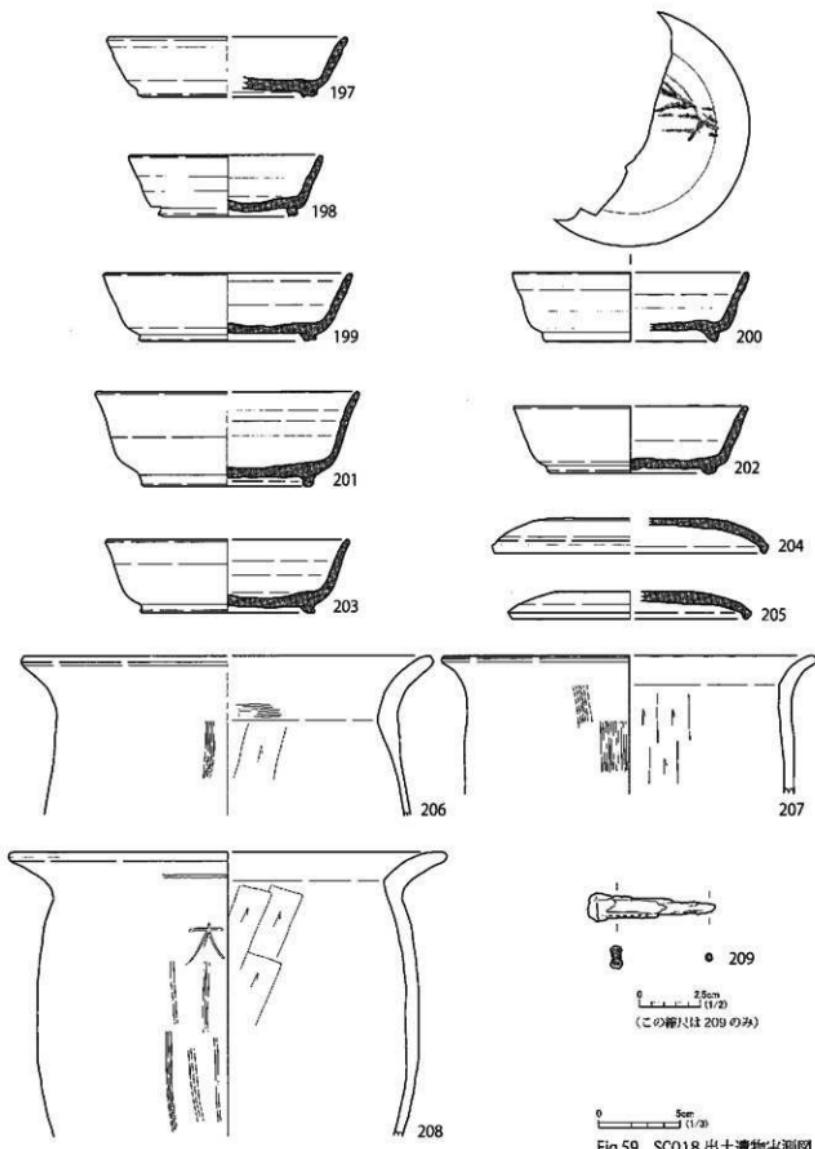


Fig.59 SC018 出土遺物尖削図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 約
			口径	底径	高さ		
197	須恵器 环身	埋土下層	(14.8)	(11.1)	3.7	褐灰 7.5YR 6/1	体深は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部に開き気泡に貼り付けられる。
198	須恵器 环身	埋土	12.0	8.5	3.8	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に開き気泡に貼り付けられる。
199	須恵器 环身	埋土	15.3	10.9	4.2	にぶい褐 7.5YR 7/4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気泡に、底端部附近に貼り付けられる。
200	須恵器 环身	埋土	(14.6)	(10.6)	4.3	褐灰 7.5YR 5/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面三尖の高台が、底端部付近に貼り付けられる。高台に火炎跡。
201	須恵器 环身	埋土上層 灰面上	(16.2)	(10.6)	5.8	褐灰 10YR 4/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面西角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。
202	須恵器 环身	埋土	(14.4)	10.4	4.15	灰土 7.5YR 7/4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面西角の高台が、底端部付近に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
203	須恵器 环身	埋土	(15.0)	(10.8)	4.5	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が開き気泡に、底端部附近に貼り付けられる。燒成不良で軟質。
204	須恵器 环身	埋土	(16.6)	—	2.15	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面三角形で、手ぬに扣く跡ある。天井部は粗軸輪へつり剥り跡。
205	須恵器 环身	埋土	(14.5)	—	1.75	にぶい褐 7.5YR 7/3	口縁部は断面V字形で、内側気泡に強く扭曲する。天井部は剥離へつり剥り跡。
206	土師器 甕	埋土	(25.4)	不明	不明	褐 5YR 7/6	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は被ナメ。
207	土師器 甕	埋土	(23.0)	不明	不明	褐 5YR 6/6	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は被ナメ。
208	土師器 甕	埋土上層 床面	(27.0)	不明	不明	灰白 7.5YR 8/1	体部外側はハケ目、内側はヘラ削りが施される。口縁部は被ナメ。床面上に「大」のヘラ書きが認められる。
209	鉄製品 刀子	埋土	4段長 5.2	最大幅 0.7	厚さ(g) 0.4	重さ(g) 4.4	刀子の革紐と見われる。刃身に木質の材が付着する。

Tab.37 SC018 出土遺物観察表

() 内の数値は指定の法算を表す

SK019 土坑

【造構】

平面の形態は小判状で、底面は浅鉢状を呈する。

【遺物】

壺蓋(210)は口縁部が断面三角形で、垂直に屈曲させ、内側には綫が明瞭に認められる。こうした特徴から、8世紀代前半の所産として捉えることができる。

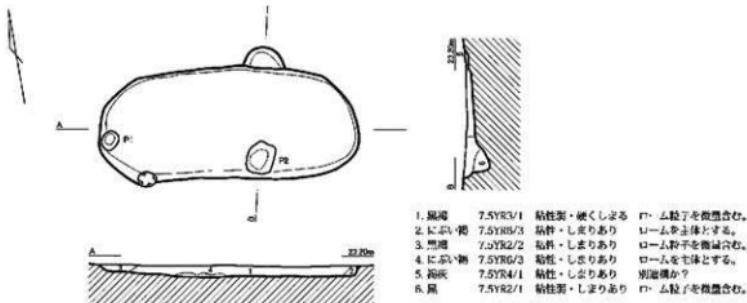


Fig.60 SK019 造構断面図



Fig.61 SK019 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 訴
			口徑	底径	高さ		
210	環状 環蓋	埋土	16.5		2.3	灰白 7.5YR 8/1	口縁部は断面一角部で、は延長する。内側に棱が明瞭に認められる。天井部は低く、ほぼ水平である。発成平山で軟質。

Tab.38 SK019 出土遺物観察表

SK020 土坑

【遺構】

平面の形態は梢円形を呈する。底面は浅鉢状で、ロームが全体的に硬化した状態で認められる。このような状況から、住居跡としての性格も検討できなくはないが、土坑として捉えることに留めた。今後の類例を持ち、再検討しなければならない遺構といえる。

【遺物】

环身は高台の貼り付く位置が、底端部より内側にあるもの(212・214・219)と、体部下位が湾曲し、底部との境が不明瞭で、そうした位置に高台が貼り付くもの(213・216～218)に大きく分けられる。

环蓋(221・222)は断面三角形の口縁部を、ほぼ直角に短く屈曲させ、内側には棱が明瞭にみられる。环身の高台の位置や环蓋の口縁部の特徴から、8世紀代前半を主体とした遺物構成と考えられる。

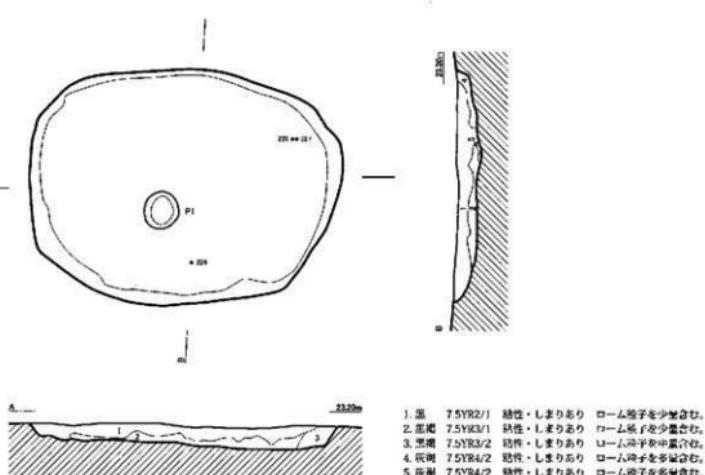


Fig.62 SK020 遺構断面図

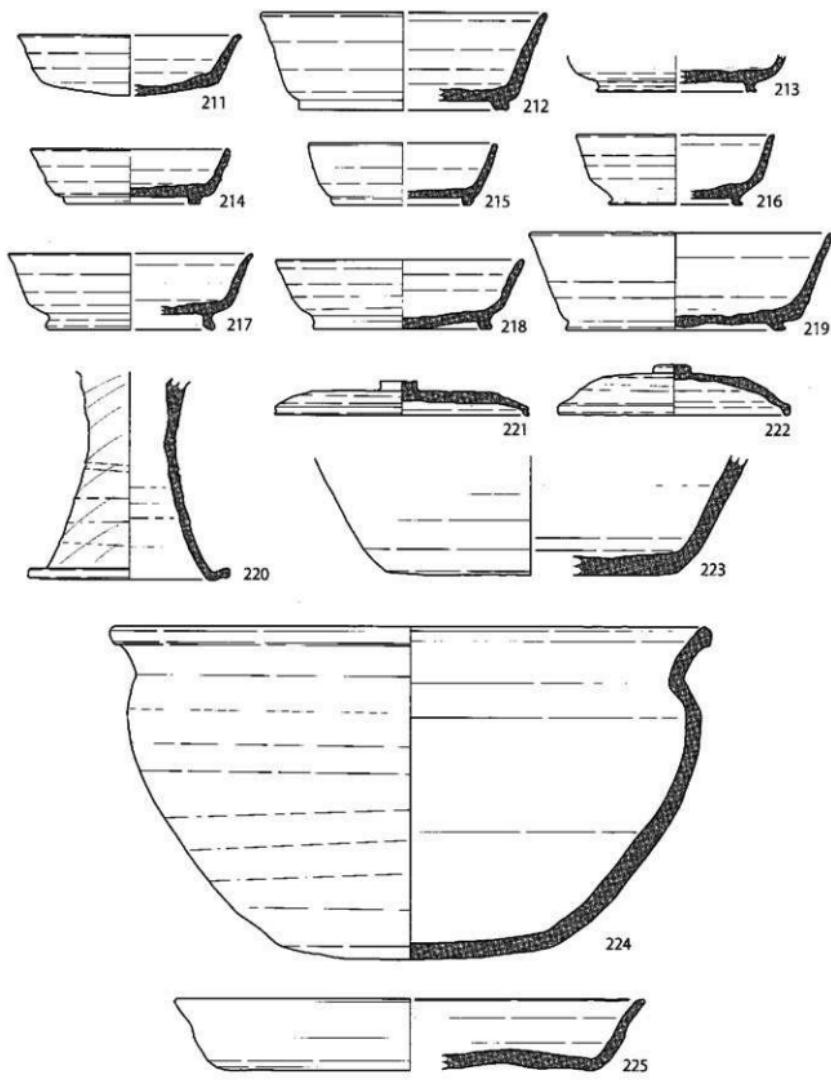


Fig.63 SK020 出土遺物実測図 -1

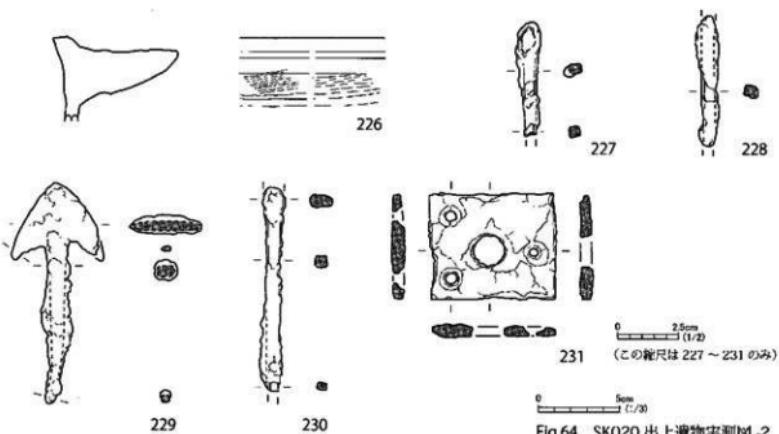


Fig.64 SK020 出土遺物実測図-2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
211	須恵器 坏	田表上	(13.8)	(10.8)	3.7	灰黄褐 7.5YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。
212	須恵器 环身	埋土	(17.6)	(12.8)	6.0	褐灰 7.5YR 6/1	体部は直線的に外二方に立ち上がる。断面内の高台が覆き茎時に、底端部附近に貼り付けられる。体部と底端の境が丸みを帯びる。
213	須恵器 环身	埋土	—	9.8	不明	褐灰 7.5YR 6/1	断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
214	須恵器 环身	埋土	12.2	8.2	3.4	褐灰 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
215	須恵器 环身	堆上	(11.6)	(8.4)	3.8	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部以下がへう形に調節。断面内の高台が、底端部に貼り付けられる。
216	須恵器 环身	床面上	(12.2)	(8.2)	4.3	褐灰 7.5YR 6/1	外表面形は底部から下位にかけて大きくなき、これより上位は角度を立ち上げ、直線的に口縁に至る。断面四角の高台が、底端部に貼り付けられる。
217	須恵器 环身	堆上	(15.0)	(10.4)	4.7	にぶい褐 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部と底端の境が丸みを帯びる。高い背が貼り付けられる。
218	須恵器 环身	埋土 田表上	15.2	10.9	4.3	灰褐 7.5YR 6/1	体部と底端の境が丸みを帯びる。体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が覆き茎時に、底端部附近に貼り付けられる。
219	須恵器 环身	埋土	18.7	13.5	6.0	浅黄褐 10YR 8/4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が覆き茎時に、底端部附近に貼り付けられる。形状不良で欠損。
220	須恵器 环坏	堆上	不明	12.4	不明	褐灰 10YR 4/1	高い脚部のみが復元し、外面には絞りあげた腹が斜め方向に現る。外側の中央附近に太い沈線が1条残る。
221	須恵器 盖	埋土	15.6	—	2.1	附褐色 7.5YR 7/2	II脚部は腹部を掘み出した程度の作かななものである。大井型は内輪へテテ削除。
222	須恵器 环身	埋土 床面上	14.3	—	3.1	明褐色 7.5YR 7/2	口縁部断面はおみを帯び、垂直に強く屈曲する。尖井型は底輪へテテ削除。鏡面不良で欠損。

Tab.39 SK020 出土遺物観察表-1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
223	須恵器 鉢	埴上	不明	(18.0)	不明	灰白 7.5YR 8/2	体部下位は口縁へ向う削り。焼成不良で軟質。
224	須恵器 鉢	埴土 II表土	37.0	16.7	20.5	灰'1 7.5YR 8/2	頭から口縁をつくり、そこから口縁を外反させる。口縁部は断面を外側に折り返し、肥厚にする。断面下は底面へ削りが施される。焼成不良で軟質。
225	須恵器 鉢	II表土	(20.0)	(23.6)	4.4	褐色 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。体部下は回転へと切り替る。
226	土器器 壺	埴土	不明	不明	不明	橙 5YR 6/6	陶器口の部分である。全周にハケ目の痕跡が施され、その後に焼成される。取り合われ部分には、割れ目(きずめ)がある。
227	鉄製品 釘	埴土	残存長 4.7	幅 —	厚さ —	黒さ(?) 5.7	鉄部の下端部を欠損する。断面方形。頭部は残存するが、頭のため形状は不明。
228	鉄製品 釘	埴土	5.4			6.1	幹部の上下端部および頭部は欠損する。断面方形。
229	鉄製品 鉗筆	埴土	9.1	3.8	0.4	21.2	平底式で頭は頭部をもつ。ほぼ方形品。
230	鉄製品 鉗筆	埴土	8.4	0.9	0.5	8.9	尖底式。頭・首部の先端部を欠損する。
231	鉄製品 金具	II表土	廢 4.4	根 5.2	厚さ 0.6	重さ(?) 38.6	中央に大きめの孔があり、この周囲に3つの小さな孔がある。小さい孔は、いずれも頭・の片面から削られた柱状の痕跡を呈する。

Tab.40 SK020 出土遺物観察表-2

()内の数値は指定の法量を表す

SC021 窒穴式住居跡

【遺構】

西側の約1/2が調査区外にあるため、全体を確認するには至らなかった。窓についても未調査部分の、北壁西側か西壁のいずれかに構築されていたと推測される。

壁面上端は直線的ではなく、中央がやや膨らむ。下端もこれにほぼ並行する傾向から、上端が崩れた結果ではないものと思われる。

【遺物】

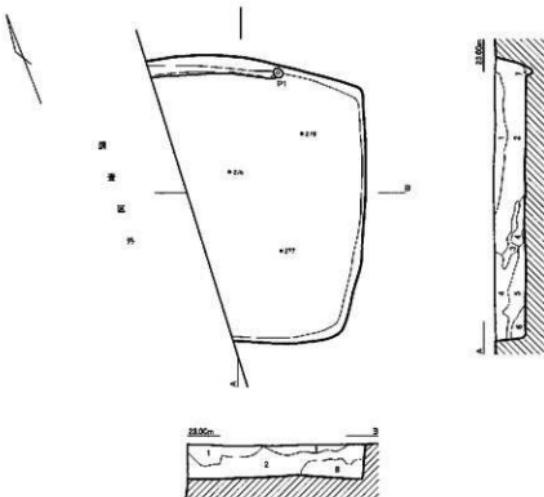
埴土から出土する遺物量は多く、下層に掘り進むに従い、完存もしくはそれに近い良好な残存状態のものが増える傾向にある。

环身(233～253)は、断面四角の低い高台が底端部より内側に貼り付き、体部下位から底部にかけて丸みを帯びるものが多い。

环蓋は宝珠形のツマミを貼り付け、口縁部を垂直に下方へと長く延ばしたタイプ(257)。口縁部を外に開き長く延ばしたタイプ(269)。断面三角形の口縁部を短く屈曲させるタイプ(258～261)。口縁部を僅かに掘り出す程度のもの(262・263)に大別できる。

長頸壺(265～267)は3点を出土するが、いずれも完存品ではなく、体部の上位を肩曲させ明瞭な棱をなす。類似するものは、大宰府の第II期政庁の地鎮具として用いられている。

こうした环身や环蓋の特徴から、遺物は8世紀代前半を主体とした構成であるが、一部においては中葉以降のものとして、捉えられなくもない环蓋もある。

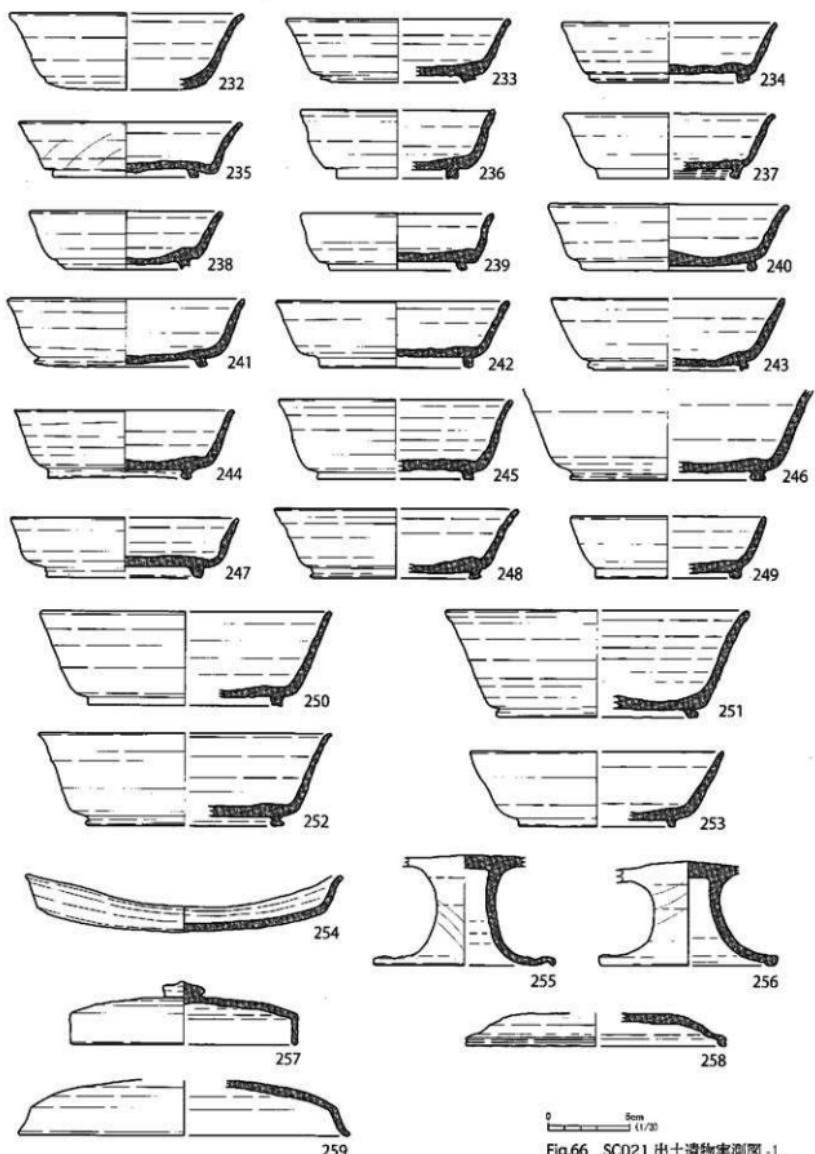


1. 黒泥 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 残土・炭化物・ローム粒子を少量含む。
2. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子・炭化物・溝土を少量含む。
3. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ロームブロックを多量に含む。
4. 黑泥 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 脱土・炭化物・ローム粒子を少量含む。
5. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。
6. 黑泥 7.5YR3/1 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。周囲。
7. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性・しまりあり ローム粒子を少量含む。
8. 灰褐色 7.5YR4/2 粘性・しまりあり 施工・炭化物・ローム粒子を少量含む。

Fig.65 SC021 遺構平断面図

全 体	平西円盤	方形
	上輪角度	難が穴確認のため不明
	板 構	東北3.40 m×東西は外堀が調査区外のため不明
	壁	ほぼ全面に掘削された表面で、深さ0.40 mを測る
	ビット	確認した範囲においては認められず
	周 清	東壁にはなく、北壁の一剖に認められる これ以外は調査区外のため不明
壁 形	床 面	今体的に硬化する
	壁 形	確認した範囲においては認められず
	位 置	確認した範囲においては認められず
	形 状	不明
	中心軸距	不明
	燃焼口幅	不明
壁	壁	不明
	火 床	不明
輪	輪 部	不明

Tab.41 SC021 遺構観察表



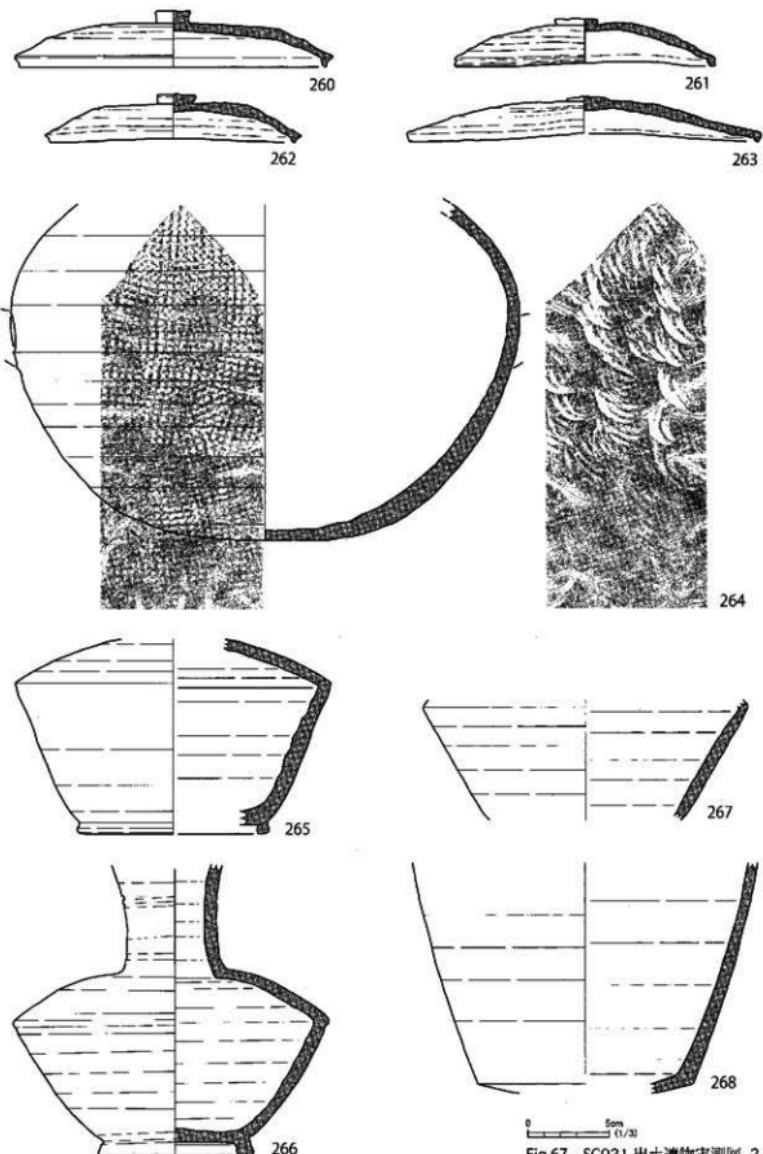


Fig.67 SC021 土遺物実測図 -2

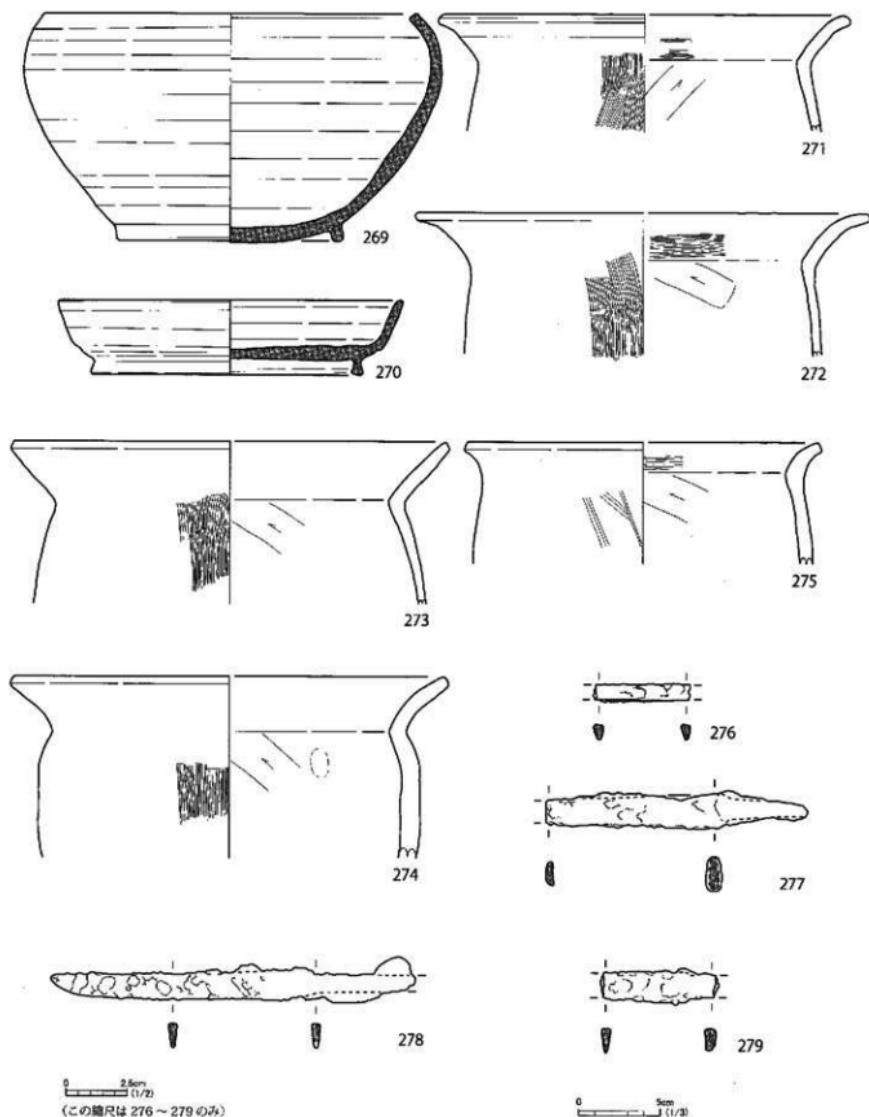


Fig.68 SC021 出土遺物尖削図-3

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
232	須恵器 环身	埴土下層	(14.4)	(9.8)	4.7	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が底端部付近に外に飛ね上げるようになり付けられる。
233	須恵器 环身	床面上	(13.8)	(9.5)	3.9	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に、外に飛ね上げるようになり付けられる。
234	須恵器 环身	埴土下層	(13.2)	(9.8)	3.7	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部下部は同色のうつり付箋。断面四角の高台が底端部付近に外に飛ね上げるようになり付けられる。
235	須恵器 环身	埴土下層	13.2	8.9	3.4	褐色 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部下部は同色のうつり付箋。断面四角の高台が底端部付近に外に飛ね上げるようになり付けられる。
236	須恵器 环身	埴土下層	(12.0)	(7.5)	4.2	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
237	須恵器 环身	床面上	(13.0)	(8.6)	4.0	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁で外反する。断面四角の高台が内側に張り付けられる。
238	須恵器 环身	埴土上層 埴土下層	11.8	8.1	3.6	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に、外に飛ね上げるようになり付けられる。
239	須恵器 环身	床面上	11.8	8.5	3.5	褐色 7.5YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁でやや外反する。体部下部は黒褐色のうつり付箋。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
240	須恵器 环身	埴土上層 床面上	14.8	10.8	4.1	褐色 7.5YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
241	須恵器 环身	埴土上層・埴土下層 床面上	14.6	10.6	4.2	褐灰 7.5YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
242	須恵器 环身	埴土上層	14.3	9.4	4.1	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
243	須恵器 环身	埴土下層	(14.4)	(9.8)	4.4	にぶい黄緑 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に外に飛ね上げるようになり付けられる。
244	須恵器 环身	床面上	13.5	8.8	4.2	明褐色 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
245	須恵器 环身	埴土上層	(14.3)	9.7	4.9	明褐色 7.5YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
246	須恵器 环身	埴土上層	不明	12.0	不明	にぶい黄緑 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
247	須恵器 环身	床面上	(14.0)	9.6	3.7	にぶい黄緑 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
248	須恵器 环身	埴土下層	(15.0)	(10.4)	4.3	灰黒褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
249	須恵器 环身	埴土下層	(12.0)	(9.0)	3.8	灰黒褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
250	須恵器 环身	埴土下層	(18.0)	(12.0)	5.8	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
251	須恵器 环身	床面上	(18.6)	(12.4)	6.6	にぶい黄緑 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
252	須恵器 环身	埴土上層 埴土下層	(18.0)	(12.2)	5.7	灰黒褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる。
253	須恵器 环身	埴土下層	(15.6)	(9.6)	4.6	にぶい黄緑 10YR 7/3	体部は直線的に外上方に立ち上がる。高台は底端部より内側に貼り付けられる。洗い不良で乾燥。
254	須恵器 Ⅲ	埴土下層 床面上	19.5	17.8	3.5	褐色 10YR 4/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底盤は圓盤へ少しきりたましの状態。縁部は墨が剥がれ、大きくなりがち。
255	須恵器 高坏	埴土下層	不明	(11.2)	不明	褐色 10YR 5/1	底盤は欠損。脚部外側には、剥りあがれた表が剥め方向に残る。脚端部は断面三角形で、底盤表面に凹凸させる。

Tab.42 SC021 出上遺物観察表-1

()内の数値は指定の法量を表す

遺物番号	器種	出土地点	法寸(cm)			色調	特徴
			口径	底径	厚さ		
256 須恵器 高环	埋土下層	不明	(11.0)	不明	褐色 10YR 5/1	环部は欠損。環部外面には、軋りあわせた形が斜め方向に残る。環部は丸みをもたらす。内面の縁が厚壁である。	
257 須恵器 高环	床面上	(14.0)	-	3.9	褐灰 10YR 6/1	大汗部は円弧へラ削り溝部。ツマミは飾宝珠。体部は生痕に良く留めする。	
258 須恵器 高环	床面上	(16.0)	-	不明	褐灰 10YR 6/1	口縁部は折面三角形で、ほぼ垂直に傾曲する。天井部は回転へラ削り溝部。	
259 須恵器 高环	埋土下層	(20.4)	-	不明	暗灰 N 3/0	大汗部はナギサ模様。内外表面部における大汗部は擦痕を付与させる。施紋不良で鉄質。	
260 須恵器 环形	埋土下層	19.6	-	3.5	灰褐色 7.5YR 5/2	山部は折面三角形で、内傾する。天井部は回転へラ削り溝部。	
261 須恵器 环形	床面上	16.0	-	3.0	に赤い黄褐 10YR 7/2	口縁部は折面三角形で、ほぼ垂直に傾曲する。天井部は回転へラ削り溝部で、内部を薄さない。	
262 須恵器 环形	床面上	15.7	-	3.0	褐灰 10YR 6/1	口縁部内側の破は不明確で、環部は剥み出した程度の作かなものが内側する。天井部は回転へラ削り溝部。	
263 須恵器 环形	床面上	(21.8)	-	2.7	灰白 10YR 8/2	口縁部は沿筋が僅かに延びるが、内面の幾枚帯繩に認められる。天井部は回転へラ削り溝部。	
264 須恵器 环形	床面上	不明	(5.8)	不明	灰白 10YR 8/1	外縁から剥離にかけ電子顕微鏡のタキ目。内面は分段成の笠て真筋が認められる。脚部は丸みを帯び、底部との境が凹凸不規則となる。内側部最も剥り出した位置には手すりがつかづか、欠損する。	
265 須恵器 長颈瓶	埋土下層 床面上	不明	(12.0)	不明	灰褐色 7.5YR 6/2	瓶頸の上部が剥離するが、長頸瓶である。後部の上部で開削する。肩部より下枝土柱部へと削り、底縁部に、低い台形が貼り付けられる。	
266 須恵器 長颈瓶	埋土上層 床面上	不明	9.5	不明	灰褐色 5YR 5/2	口縁部を欠損するが、長頸瓶である。体部の上部で削れ出す。肩部より下枝土柱部へと削り、底縁部に、低い台形が貼り付けられる。	
267 須恵器 長颈瓶	埋土下層	不明	不明	不明	灰褐色 10YR 6/2	長頸瓶の体部で、下半は回転へラ削りが認められる。	
268 須恵器 鋸	埋土上層 床面上	不明	(13.4)	不明	に赤い黄褐 10YR 7/2	体部下半は回転へラ削り。底部は丸みを帯びる。	
269 須恵器 鋸	埋土上層 埋土下層	23.0	13.8	14.0	灰白 10YR 8/1	体の外面は下部が弱冠へラ削り、口縁部を大きく内側させる。底部は丸みを帯び、低い台形を貼り付ける。施紋不良で鉄質。	
270 須恵器 鋸	埋土下層	21.2	16.7	4.6	灰褐色 10YR 6/2	体は直筒的で外上部に立ち上がる。所定円角の高台が、底縁部に貼り付けられる。	
271 土器	埋土下層	(25.4)	不明	不明	に赤い褐 5YR 7/4	体部外面は下部が弱冠へラ削り、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外縁を横ナギ、内面はハケ目を施した後に横ナギ。	
272 土器	床面上	(28.0)	不明	不明	に赤い褐 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外縁を横ナギ、内面はハケ目を施した後に横ナギ。	
273 土器	埋土下層 床面上	(27.0)	不明	不明	に赤い褐 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナギ。	
274 土器	埋土上層	(27.0)	不判	不明	に赤い褐 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナギ。	
275 土器	埋土下層	(22.0)	不明	小明	に赤い褐 5YR 7/4	体部外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外縁を横ナギ、内面はハケ目を施した後に横ナギ。	
276 鉄製品 刀子	埋土下層	表存長 4.0	最大幅 0.6	厚さ 0.2-0.4	重さ(g) 2.6	身部の両端および茎部が欠損する。	
277 鉄製品 刀子	埋土下層	10.7	1.4	0.2-0.3	18.3	身部の先端部が欠損する。	
278 鉄製品 刀子	埋土下層	15.0	1.2	0.1-0.4	18.2	基部が途中から欠損する。	
279 鉄製品 刀子	埋土上層	4.9	1.3	0.1-0.4	6.3	身部の両端および茎部が欠損する。	

Tab.43 SC021 出土遺物観察表-2

()内の数値は推定の社量を表す

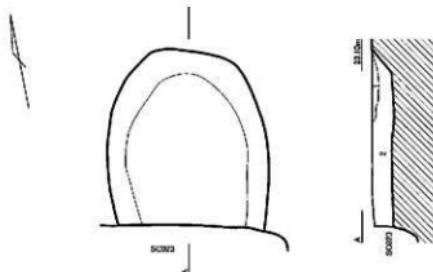
SK022 土坑

【遺構】

平面の形態は小判状を呈すると思われるが、南側を SC023 駿穴式住居跡により消失する。規模は 2.0 × 2.1m を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さは 0.3m を測る。遺構の性格は不明である。

【遺物】

环身（281～283）は体部が直線的に外方に立ち上がり、低い高台が底端部より内側に貼り付くことから、8世紀代前半の所産として捉えることができる。



1. 黒褐 7.5YR6/2 粘性・しまりあり ローム粒子・粘土粒子・炭化物・焼土を少含む。
2. 黒 7.5YR2/1 粘性・しまりあり ローム粒子・粘土粒子・炭化物・焼土を少含む。

Fig.69 SK022 遺構平断面図

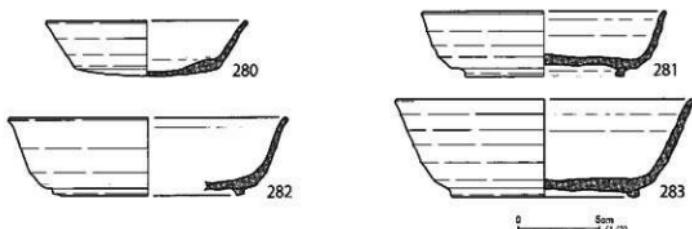


Fig.70 SK022 山土遺物尖削圖

遺物番号	器種	出土地点	法観(cm)			色調	特 訴
			口径	底径	器高		
280	須恵器	埋土	(12.4)	(8.8)	3.4	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は丸みを帯び、目地へラ切り後にナグ削難。
	环身						
281	須恵器	埋土	(15.0)	(9.8)	4.0	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
282	須恵器	埋土	(16.6)	(11.8)	4.8	褐灰 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
	环身						
283	須恵器	埋土	(18.4)	11.0	6.05	灰黄褐 10YR 5/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。底面四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部は目地へラ切り後の削難を落さない。
	环身						

Tab.44 SK022 出土遺物観察表

() 内の数値は推定の法量を表す

SC023 竪穴式住居跡

【遺構】

西壁および竪の袖部の一部をSC024 竪穴式住居跡により消失し、北壁はSK022 土坑、東壁はSK026 土坑を壊し構築されている。

床面はロームが全体的に硬化しており、中央には粘土が山盛りの状態で認められるが、性格等は不明である。

竪は住居跡の北壁の西側に構築される。西袖は残存しており、粘土で構築される。

【遺物】

傍身は体部が外方に直線的に立ち上がり、高台が底端部より内側に貼り付くタイプ(286・287)と、体部と底部の境が丸みを帯び、そこに高台を貼り付けるタイプ(284・285)に分けられる。

坏蓋(288～292)は口縁部を断面三角形にし、下方に短く屈曲させる。その内側には稜が明瞭にみられる。

こうした特徴から、8世紀代前半の所産として捉えることができる。

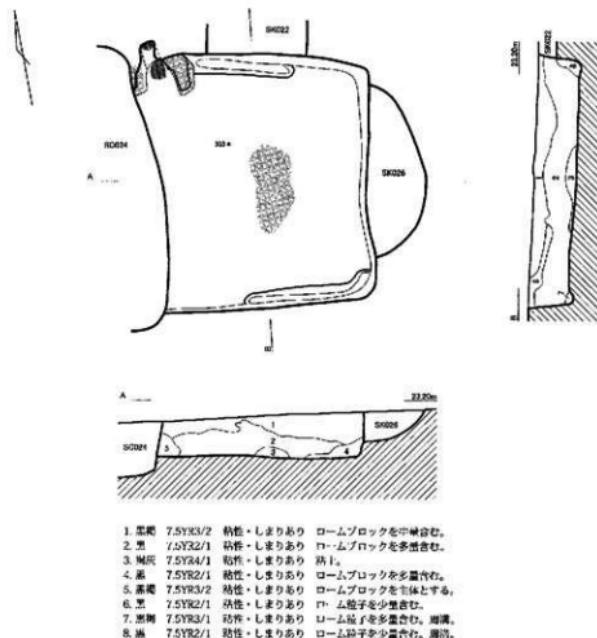
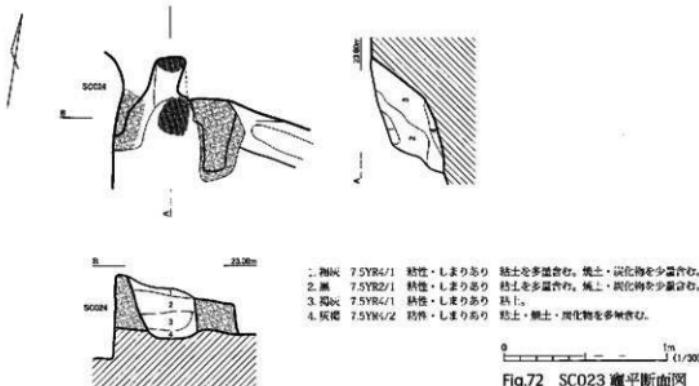
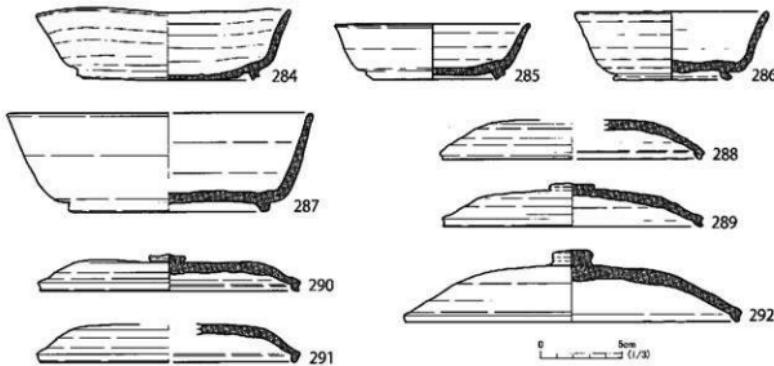


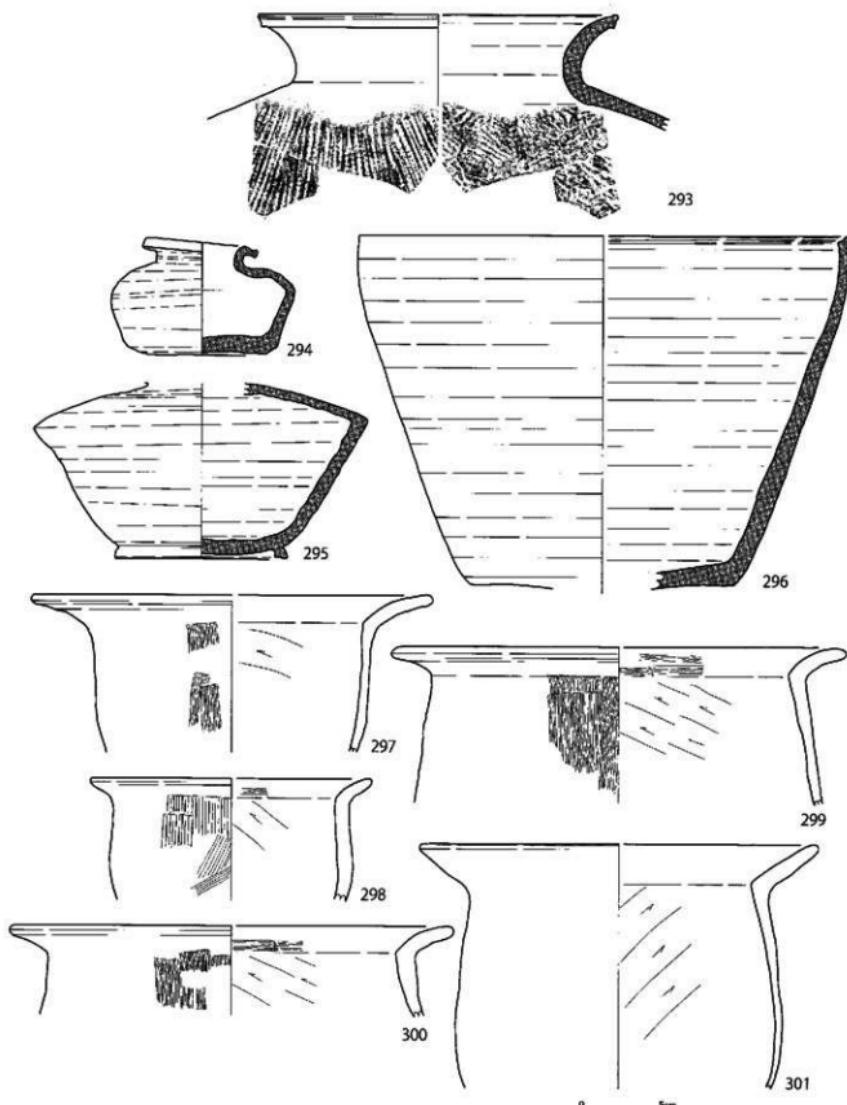
Fig.71 SC023 遺構断面図



全 体	平面形態	方形
	半軸角度	N 12° E
	規 模	南北3.10m×東西は西側がSC024により擾乱されるため不明 ほぼ直方に識別された壁面で、深さ0.55mを測る
	壁 形	なし
	ビット	南北から南東間にかけL字形に認められる
窓	周溝	全体的に硬化する
	床 面	なし
	盤 形	北側内側
	位 態	SC024に石油の一部が破壊されるが、煙道が斜く突出する
	形 状	1.05m 0.70m
火 焼	中心部長	表面に火熱を受けた面を認める
	燃焼層/幅	燃焼口付近が火熱作用を受けている
	火 床	石油を粘土により構築
油 部	油	
	油	
	油	

Tab.45 SC023 造構観察表





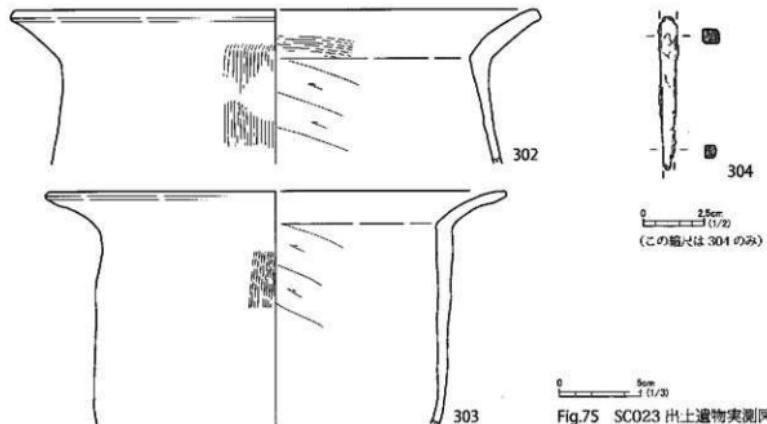


Fig.75 SC023 出土遺物実測図-3

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 肴
			口径	底径	四高		
284	須恵器 环身	埋土下層	15.7	11.2	4.1 ~ 4.5	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の凸台が底部より内側に外に斜め上昇するように貼り付けられる。底部は円板へラ切り後に、底縁をナット切る。
285	須恵器 环身	埋土下層	12.0	8.5	4.4	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の凸台が底部より内側に外に斜め上昇するように貼り付けられる。底部は円板へラ切り後の底縁をナット切る。
286	須恵器 环身	埋土上層 床面上	11.9	7.2	4.2	にぶい黄褐色 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。凸台は開き気味に、底部より内側に外に斜め上昇するように貼り付けられる。底部は円板へラ切り後の底縁をナット切る。
287	須恵器 环身	埋土下層 底面上	(18.7)	12.4	6.1	灰白 7.5YR 8/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面四角の凸台が、底部より内側に外に斜め上昇するように貼り付けられる。調整不足で底凹。
288	須恵器 环身	埋土下層	(16.2)	-	2.4	灰白 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に曲曲する。天井部は円板へラ切り調整。
289	須恵器 环身	埋土上層 埋土下層	16.0	-	2.3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に曲曲する。天井部は円板へラ切り後の底縁を施さない。
290	須恵器 环身	埋土上層	16.1	-	不明	にぶい黄褐色 5YR 7/3	口縁部は断面三角形で、ほぼ垂直に曲曲する。天井部は円板へラ切り調整。焼成不良。
291	須恵器 环身	埋土上層	(16.2)	-	2.8	にぶい黄褐色 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、内傾して屈曲する。天井部は円板へラ切り調整。焼成不良で底凹。
292	須恵器 环身	埋土下層 床面上	20.7	-	4.4	灰白 10YR 8/2	L字縁部は断面三角形で、垂直に強く屈曲する。焼成不良で底凹。
293	須恵器 環	埋土上層 床面上	(22.2)	不明	にぶい赤褐色 5YR 5/4	口縫部を施み出し、次第とする。底部外縁には複数方向に沈みを連続させた後に、ナット切る。底部外縁は平行タタキ底、内面には同心円文と鳥足文が認められる。	
294	須恵器 知頭器	床面上	7.2	7.8	6.5 ~ 7.3	褐灰 N 3/0	口縫部が裏面し、底部は短くU字を大きく外反させる。底部は円板へラ切り後は底縁を施さない。
295	須恵器 良頭器	埋土下層	-	10.6	10.8	褐灰 10YR 6/1	側縁から上が欠けするが、直筒器である。体部の七倍で細点する。底部より下部は円板へラ切り。底部に、凸台が貼り付けられる。

Tab.46 SC023 出土遺物観察表-1

()内の数値は推定の法量を表す

遺物番号	種類	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
296	須恵器 鉢	埴土下層 灰面上	(30.0)	(16.2)	(21.8)	褐灰 10YR 6/1	体部下位は断面へく削り。底部は丸みを帯びる。
297	土師器 甕	埴土下層	(24.6)	不明	小柄	にぶい緑 5YR 7/4	体部内面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
298	土師器 甕	埴土上層	(17.4)	不規	不明	にぶい緑 7.5YR 6/4	体部内面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
299	土師器 甕	窓内	(28.0)	不明	不明	緑 5YR 6/6	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
300	土師器 甕	窓内	(27.4)	不明	不明	緑 5YR 6/6	体部外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
301	土師器 甕	埴土下層	(24.6)	不規	不明	にぶい緑 7.5YR 7/4	岸部が壘しが、体部外側にはハケ目が僅かに認められる。内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
302	土師器 甕	埴土上層	(32.6)	不明	小柄	にぶい緑 7.5YR 7/4	体部内面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は外面を横ナデ、内面はハケ目を施した後に横ナデ。
303	土師器 甕	埴土下層 窓内	28.4	不明	不明	緑 7.5YR 7/6	体部内面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁部は横ナデ。
304	鉄製品 鉢	床面上	浅な盤 6.3	粗	厚さ(g) —	重さ(g) 5.7	鉢の上下端部および底部は欠損する。断面四角形。

Tab.47 SC023 出土遺物観察表-2

()内の数値は確定の法量を表す

SC024 積穴式住居跡

【造構】

東側はSC023 積穴式住居跡を破壊し構築される。西側は約1/2が調査区外にあるため、全体を確認するには至らなかった。

床面は硬化せず、しまりのない状態であった。さらに、この下を掘削すると、凹凸の著しい不整形の掘方方が認められる。

竈については確認できていが、未調査である住居跡の西側部分の、北壁か西壁のいずれかに構築されていたと推測される。

【遺物】

坏身(305・306)は体部が外方に直線的に立ち上がり、断面四角の低い高台が底端部より内側に貼り付く。

坏蓋(308・309)は口縁部が断面三角形で、ほぼ垂直に短く屈曲させる。この内側には稜が明瞭にみられる。

こうした特徴から8世紀代前半を主体とした所産と考えられる。

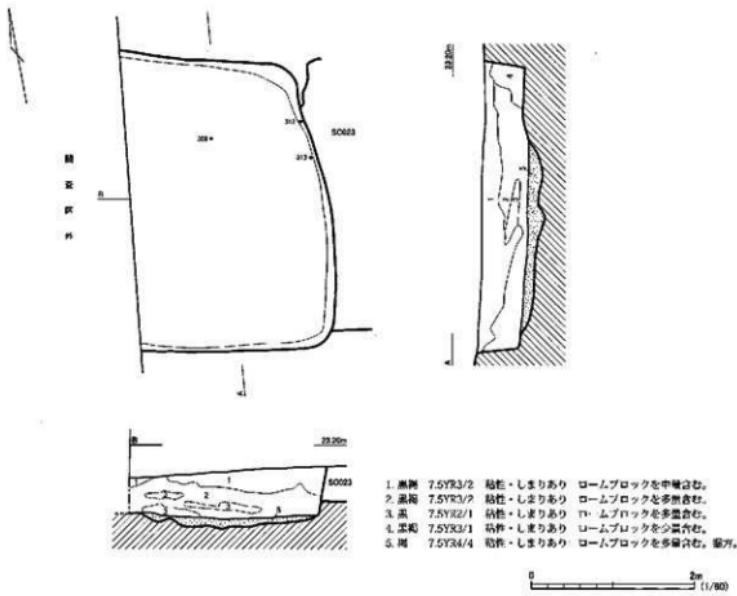
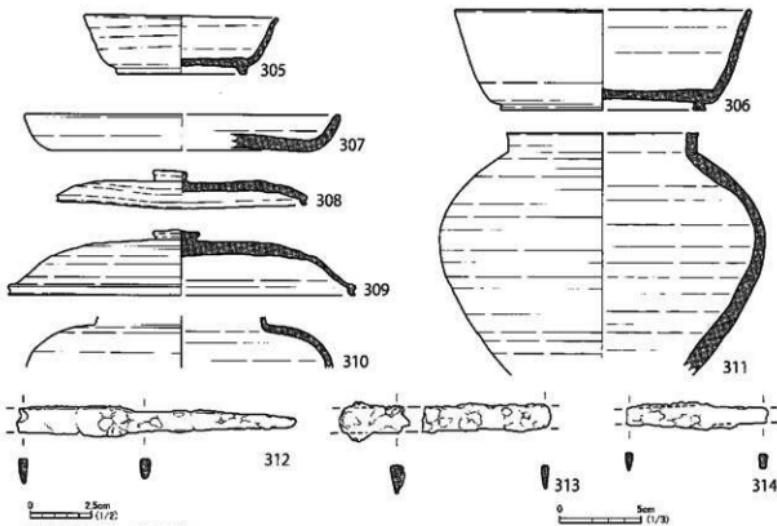


Fig.76 SC024 遺構断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竪が未確認のため不明
	幾 構	南北 3.60 m × 東西は辺境が調査区外のため不明
	型	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.60 m を測る
	ピット	確認した範囲においては認められず
	周 清	確認した範囲においては認められず
窓	床 面	しまりがなく、箇方と区別するのが困難である
	報 形	床面下は全体的に箇内の新しい張方が認められる
	位 層	確認した範囲においては認められず
	形 状	不明
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
火 床	壁	不明
	火 床	不明
袖 部	袖	不明
	部	不明

Tab.48 SC024 遺構観察表



(この縮尺は312～314のみ)

Fig.77 SC024 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			横	底径	基面		
305	須恵器 不全	埋土上層・埋土下層 床面上	11.9	8.0	3.5～ 3.7	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面西側の高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。底部は削除へテナリ後の凹部を残す。
306	須恵器 不全	埋土上層 埋土下層	(18.2)	(12.6)	6.2	にぶい黄褐 10YR 6/3	体部は直線的に外方に立ち上がる。断面西側の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。体部外壁は黑色施塗される。焼成不良で軟質。
307	須恵器 瓶	埋土上層	(19.4)	(16.2)	2.2	浅黄褐 10YR 8/4	底部が著しく踏む跡は不明。焼成不良で軟質。
308	須恵器 壺蓋	床面上	15.4		2.3	褐色 10YR 6/1	口縁部は断面V形で、ほぼ直面に近く屈曲する。天井部は焼成ヘタ現象。
309	須恵器 壺蓋	床面上	(21.4)	—	4.0	浅黄褐 10YR 8/4	口縁部は断面V形で、外反し屈曲する。天井部は焼成ヘタ現象。 焼成不良で軟質。
310	須恵器 短筒壺	埋土上層 埋土下層	不明	不明	不明	褐色 10YR 4/1	肩部が張り出すが、この上の部位は焼成しない。
311	須恵器 短筒壺	埋土上層 埋土下層	(11.8)	不明	不明	にぶい黄褐 7.5YR 7/2	口縁部は直立し、壺底は半らにする。最大径部附近以下は目録ヘタ現象。
312	鉄製品 刀子	埋土上層	現存長	幅	厚さ	重さ(g)	舟部の先端部が欠損する。
313	鉄製品 刀子	埋土上層	不明	1.1	0.1-0.4	7.6	舟部の背縫および茎部が欠損する。
314	鉄製品 刀子	埋土下層	5.8	1.1	0.1-0.3	6.0	舟部の先端部および茎部の一帯が欠損する。

Tab.49 SC024 出土遺物観察表

()内の数値は指定の法量を表す

SK025 土坑

【遺構】

平面の形態は小判状を呈すると思われるが、西側を擾乱する溝により消失する。規模は $1.7 \times 2.2m$ を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さは $0.3m$ を測る。遺構の性格は不明である。

【遺物】

出土遺物は小破片のみで、時期は判然とし得ない。

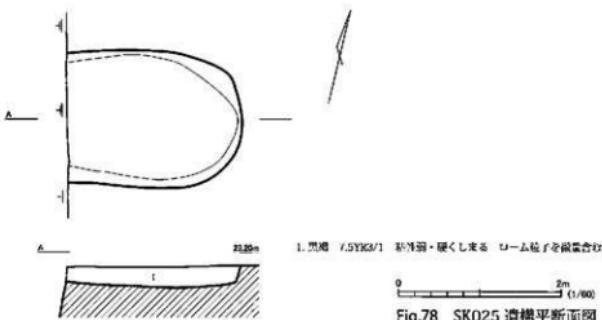


Fig.78 SK025 遺構平断面図

SK026 土坑

【遺構】

平面の形態は橢円形を呈すると思われるが、西側を SC023 竪穴式住居跡により消失する。規模は $0.7 \times 1.1m$ を測る。底面は浅鉢状を呈し、深さ $0.4m$ を測る。遺構の性格は不明である。

【遺物】

出土遺物は小破片のみで、時期は判然とし得ない。

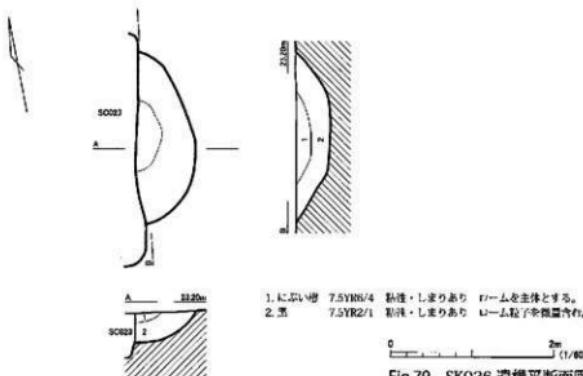


Fig.79 SK026 遺構平断面図

試掘坑1・2

【出土時の状況】

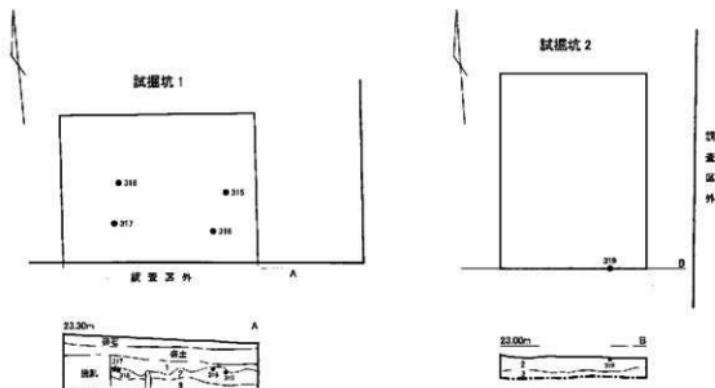
奈良時代の発掘調査を終えた後に、引き続いて旧石器時代を対象とした試掘坑を、2箇所設定したところ、双方から遺物が認められた。

まず試掘坑1とした $1.5 \times 2.0\text{ m}$ 四方の規模のものを、南壁側に設定し、奈良時代の遺構確認面でもあるロームを数cm掘り下げたところ、サヌカイト製の剥片を4点確認した。

次に北側に約10mほど離れた位置に、同規模の試掘坑2を設定した。ここでもローム面を僅かに掘り下げた地点で、サヌカイト製の三棱尖頭器を出土した。

遺物が出土する層は、いずれも新期ローム上面から僅かに掘り下げた地点である。

今回は日程の都合等で、残念ながら範囲を拡幅して調査が行えなかったが、密度および分布範囲は広がると推測される。



1. 黒陶 7.5YR3/1 粘性・しまりあり 奈良時代の遺物可能性。
2. 砂利 7.5YR5/6 粘性・しまりあり 新期ローム(ソフト)、3と比較し軟質。
3. 粘 7.5YR6/6 粘性・しまりあり 残れ物・ム(ハード)。

Fig.80 試掘坑1・2 平断面図

旧石器

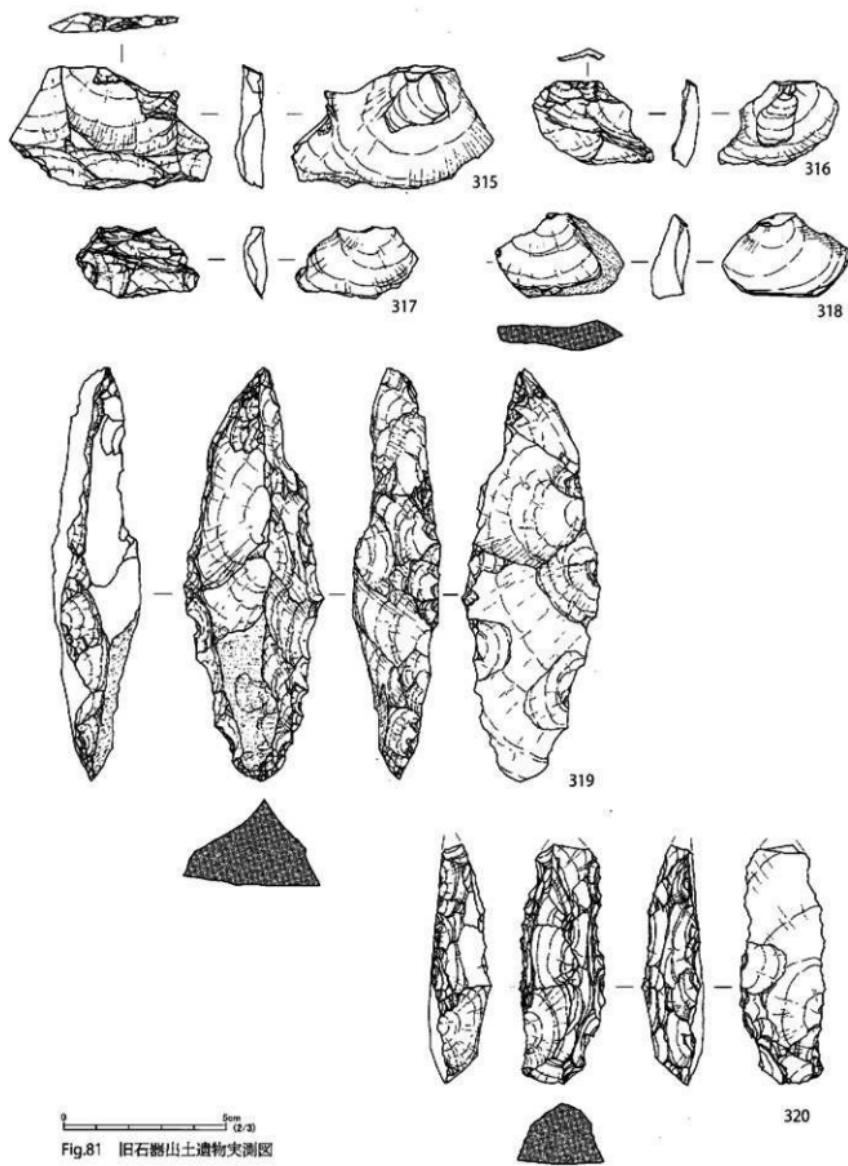


Fig.81 旧石器出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			(g)	特徴
			長さ	幅	厚さ		
315	石器 削片	試掘坑I 新開ローム上層	3.7	0.1	0.7	15.72	風化が進行し、一部が青灰色を呈する。試験削片。サメカイト。
316	石器 削片	試掘坑I 新開ローム上層	2.6	3.7	0.5	3.55	後尖頭器製作時の留め跡と見われる。サメカイト。
317	石器 削片	試掘坑I 新開ローム上層	2.2	3.7	0.6	4.3	三枚尖頭器製作時の留め跡と思われる。サメカイト。
318	石器 削片	試掘坑I 新開ローム上層	2.5	3.9	0.9	8.56	灰白色の風化石で、半透明感があると見られる。
319	石器 三枚尖頭器	試掘坑I 新開ローム上層	12.8	5.3	2.7	100.0	風化が進んでいるが、保存状態は良好な完存品。サメカイト。
320	石器 三枚尖頭器	SP-112 新開ローム上層	7.4	2.6	1.8	35.9	風化が進んでいるが、保存状態は良好。先端部が欠損。サメカイト。

Tab.50 旧石器出土遺物観察表

搅乱

調査区中央を、幅1.3mの近年の搅乱溝が延長30mにもわたり、南北方向に貫く。その途中においてSC003・SC012・SC013・SC014 竪穴式住居跡、SK025土坑を破壊する。特に住居跡の周辺では、遺物が多く認められることから、これらの遺構から混入したものと判断される。

こうした、いずれの遺構に伴うものか不明なものの中から、残存度の良い2点を選び掲載した。

杯蓋(321)は、口縁部を摘み出す程度に短く屈曲させたもので、端部は断面三角形を呈する。内側には模も認められる。8世紀代前半の所産と考える。

鉢(322)は低い筒状のもので、外面体部にハケ口がみられる。底部には葉脈の压痕があり、作成時に下に敷いたものが残ったと考えられる。こうした事例は、往時の製作状況等を窺い知る上で興味深い。

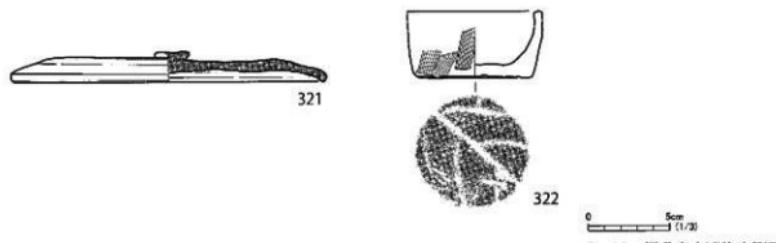
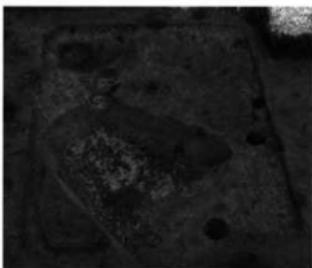


Fig.82 搅乱出土遺物実測図

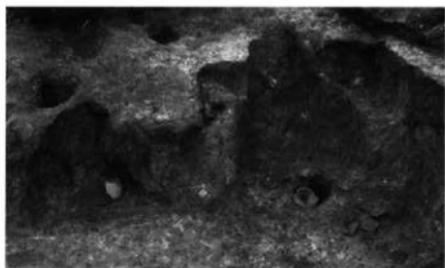
遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
321	須恵器 杯蓋	擾乱溝一括	19.4	—	2.0	淡黄褐色 10YR 8/4	口縁部内側には擦れが認められるものの、端部は摘み出した程度の擦れなものである。天下245mmへ削り直す。焼成不良で軟質。
322	土師器 鉢	擾乱溝一括	8.3	7.0	4.0	褐赤褐色 5YR 5/6	体部は直立し外側にはハケ口が施される。底部には葉脈の压痕あり。

Tab.51 搅乱出土遺物観察表

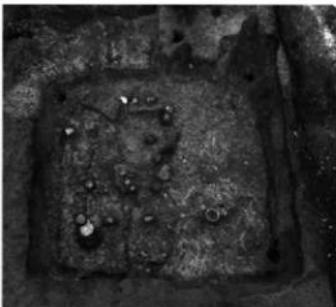
PL1



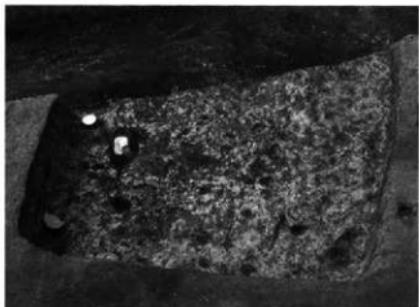
①. SC001 縦穴式住居跡（北から）



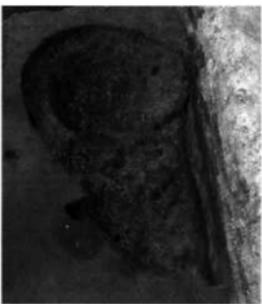
②. SC002 縦穴式住居跡 窓1・2（南から）



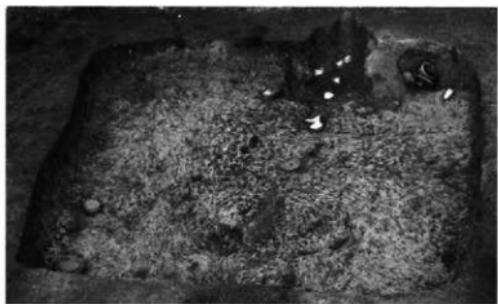
③. SC002 縦穴式住居跡（南から）



④. SC003 縦穴式住居跡（東から）

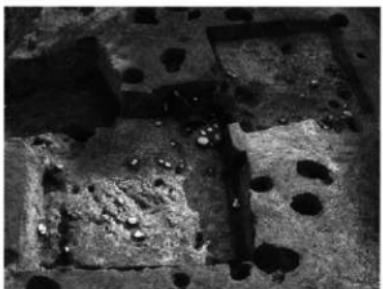


⑤. SK004 土坑（東から）



⑥. SC005 縦穴式住居跡（南から）

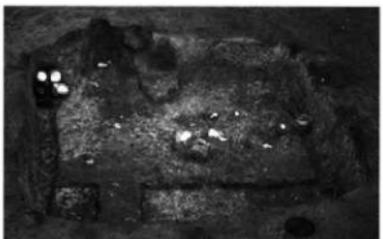
PL2



⑦. SC006 (左)・SC007 (右) 竪穴式住居跡（北から）



⑧. SC006 竪穴式住居跡（北から）



⑨. SC008 竪穴式住居跡（東から）



⑩. SC009 (左) 竪穴式住居跡・SK010 (右) 土坑
(南から)

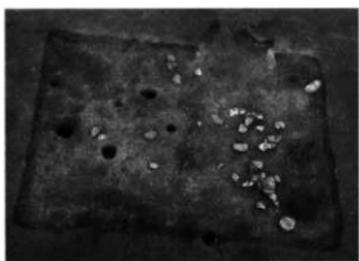


⑪. SC003 (一番奥)・SC012 (中央左) SC013 (中央右)
SC014 (中央右手前)・SC011 (手前) 竪穴式住居跡
使用面全景（南から）

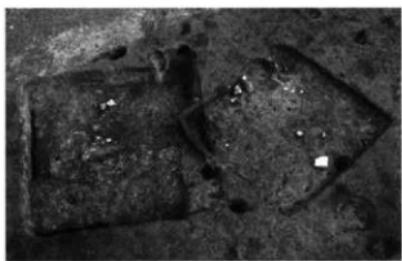


⑫. SC015 竪穴式住居跡（南から）

PL3



⑩. SC016 壁穴式住居跡（東から）



⑪. SC018 (左)・SC017 (右) 壁穴式住居跡（西から）



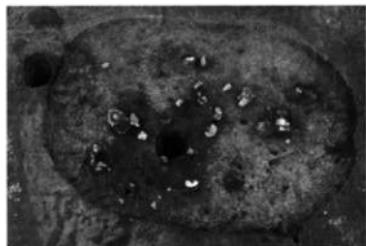
⑫. SC017 壁穴式住居跡 竈使用面完掘状況（東から）



⑬. SC018 壁穴式住居跡 竈（西から）

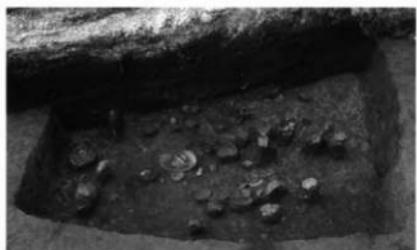


⑭. SK019 土坑（北から）



⑮. SK020 土坑（南から）

PL4



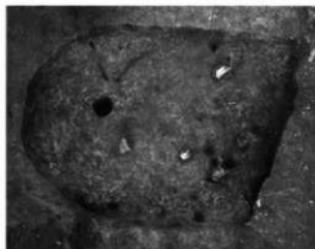
◎. SC021 整穴式住居跡（東から）



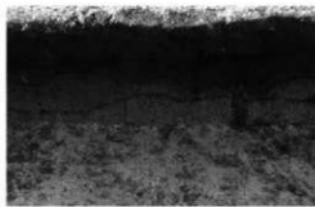
◎. SC024 (一番奥)・SC023 (中央左)・SC022 (中央右)・SK026 (手前) 土坑
完掘状況（東から）



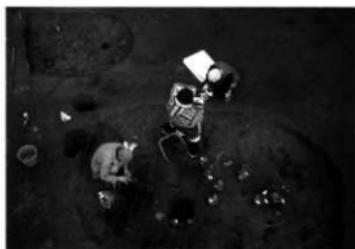
◎. 調査区南側全景（東から）



◎. SK025 土坑（南から）



◎. 試掘坑1 旧石器出土状況（北から）



◎. SK020 土坑（南から）



◎. 調査区北側全景（南から）

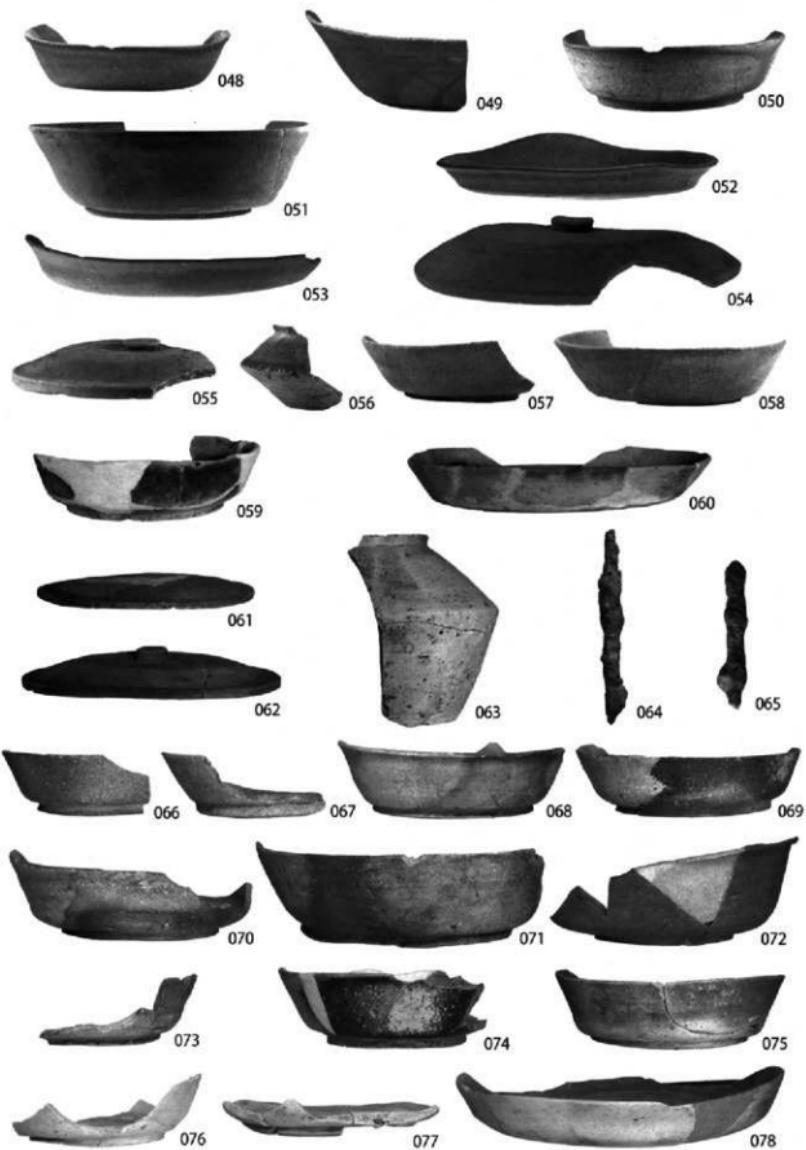
PL5



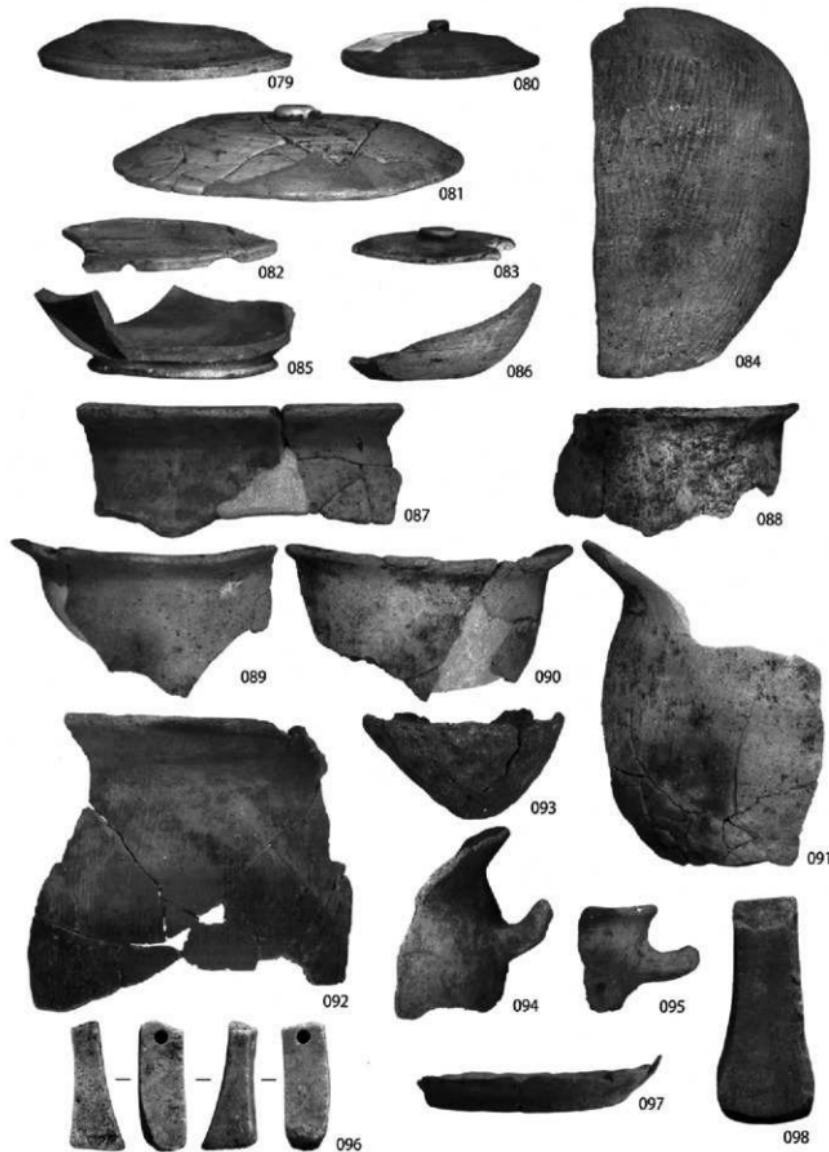
PL6



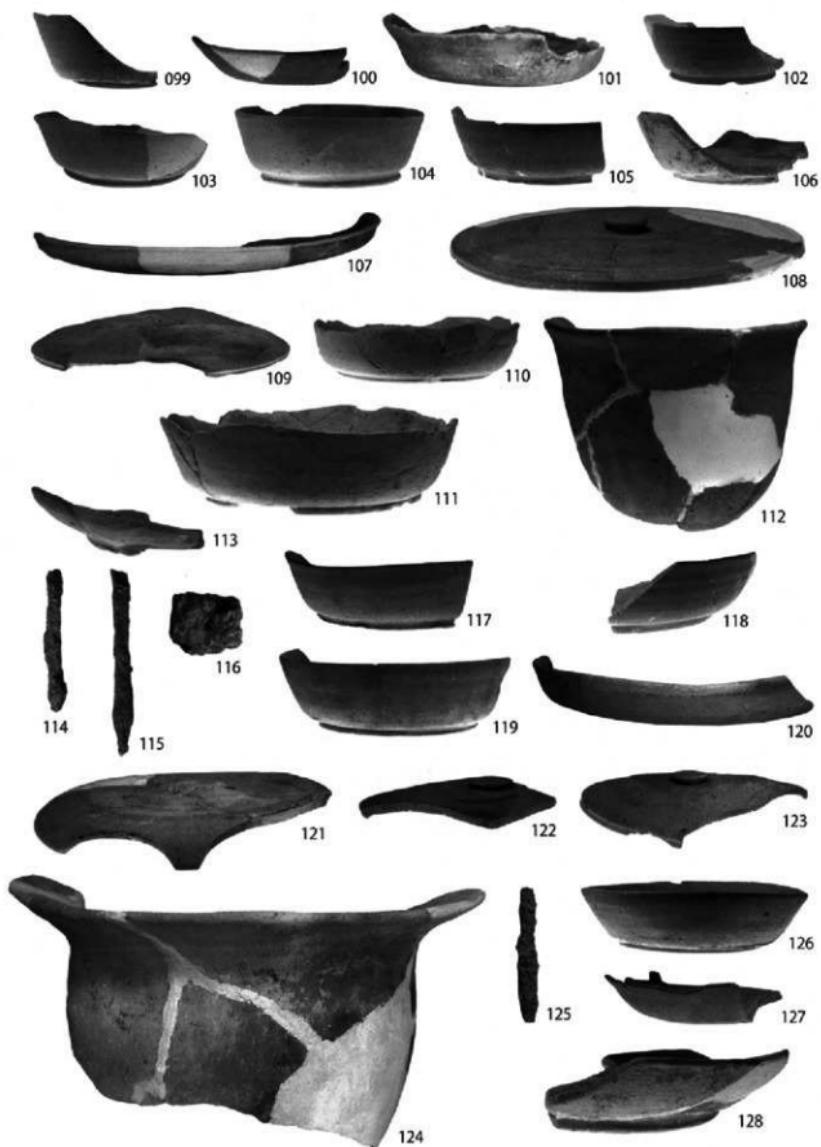
PL7



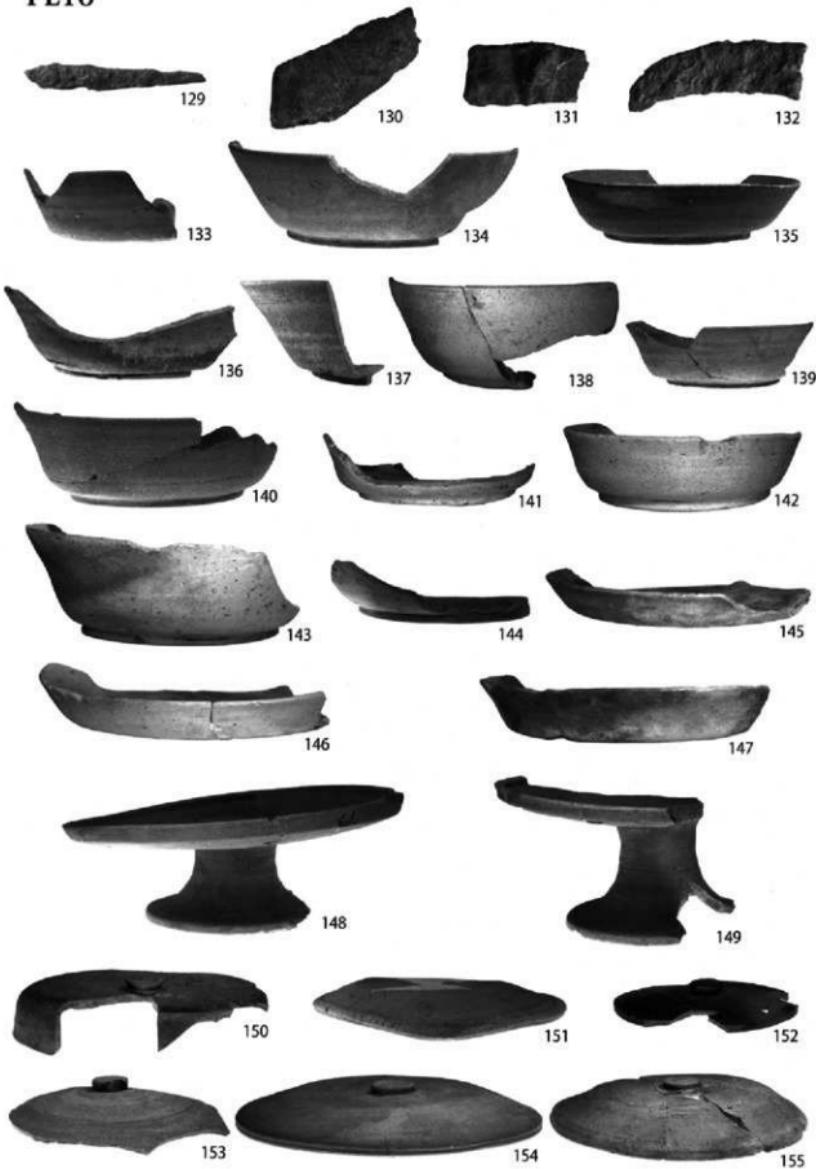
PL8



PL9



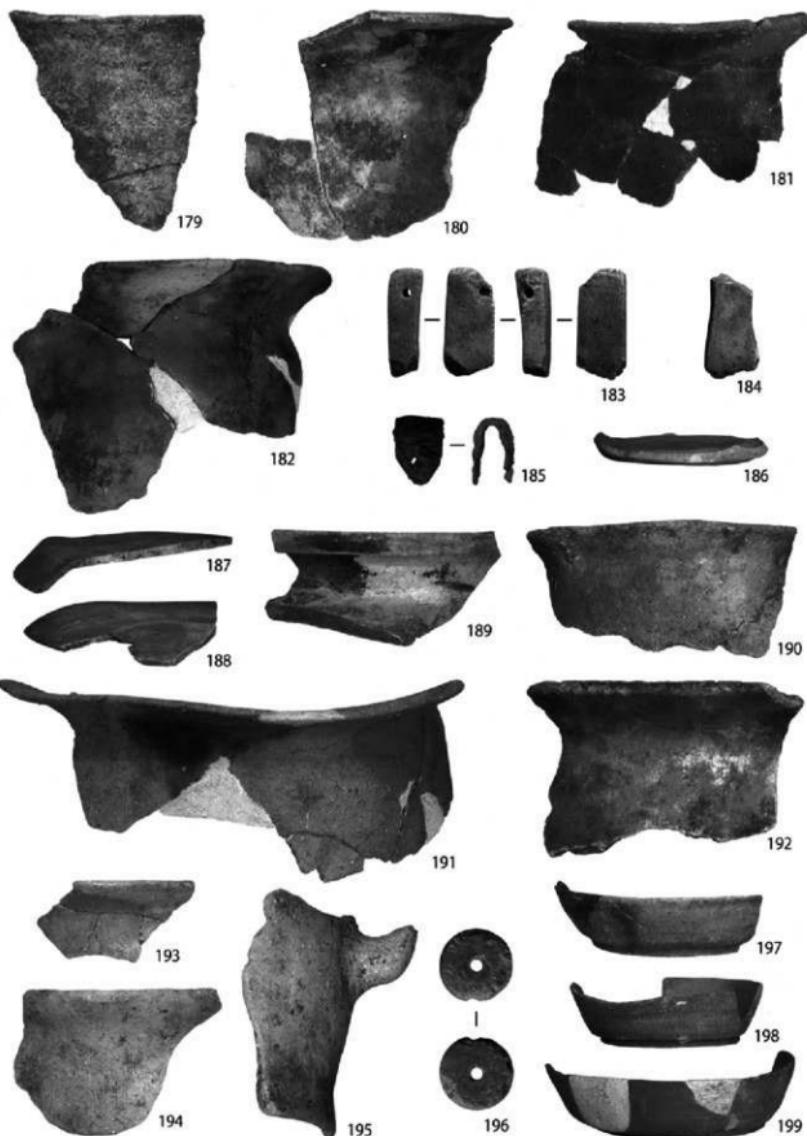
PL10



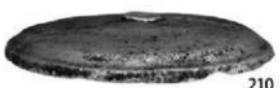
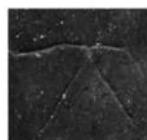
PL11



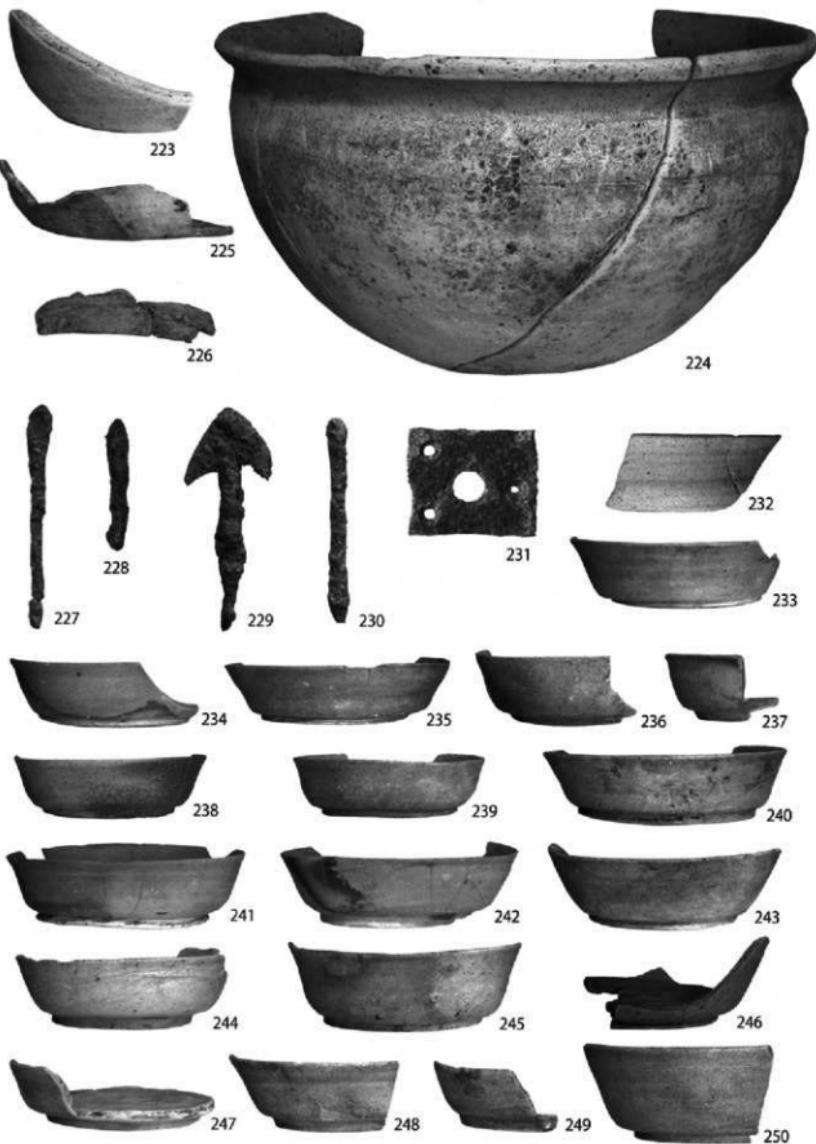
PL12



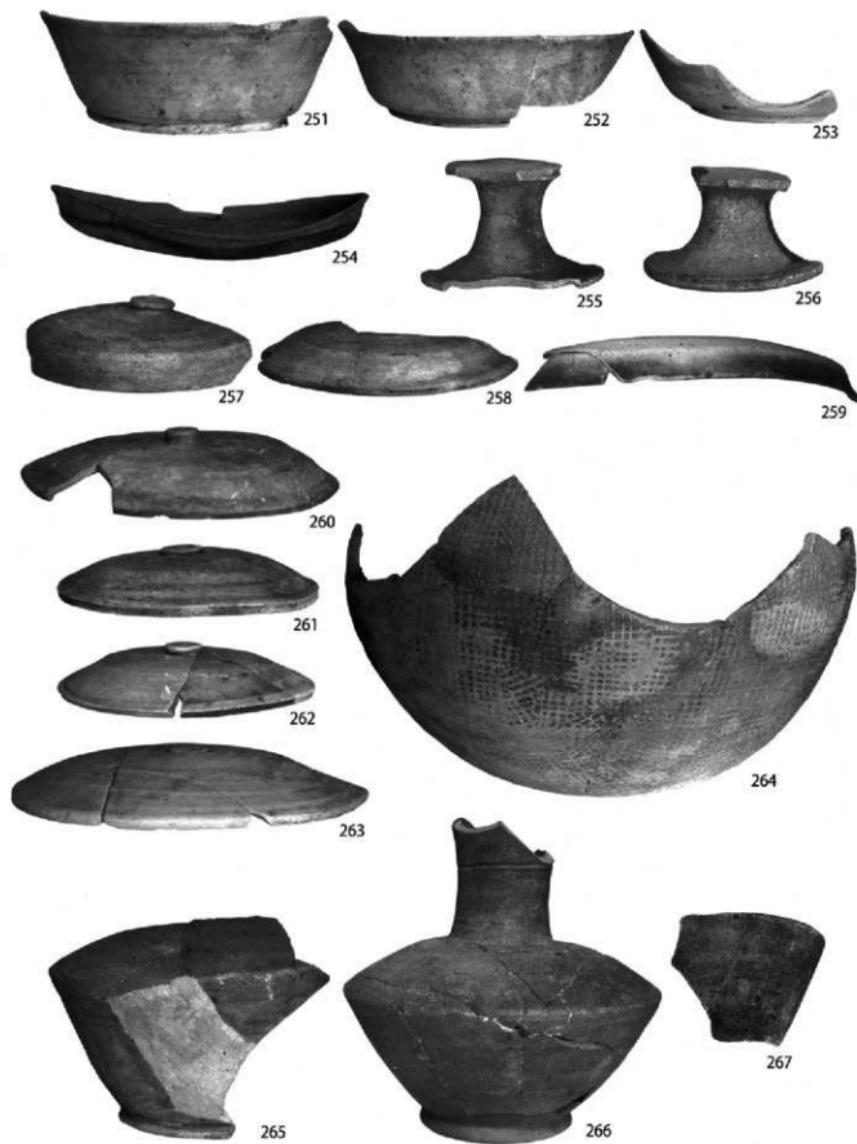
PL13



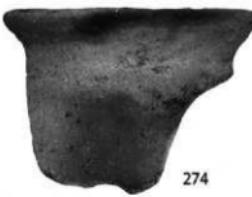
PL14



PL15



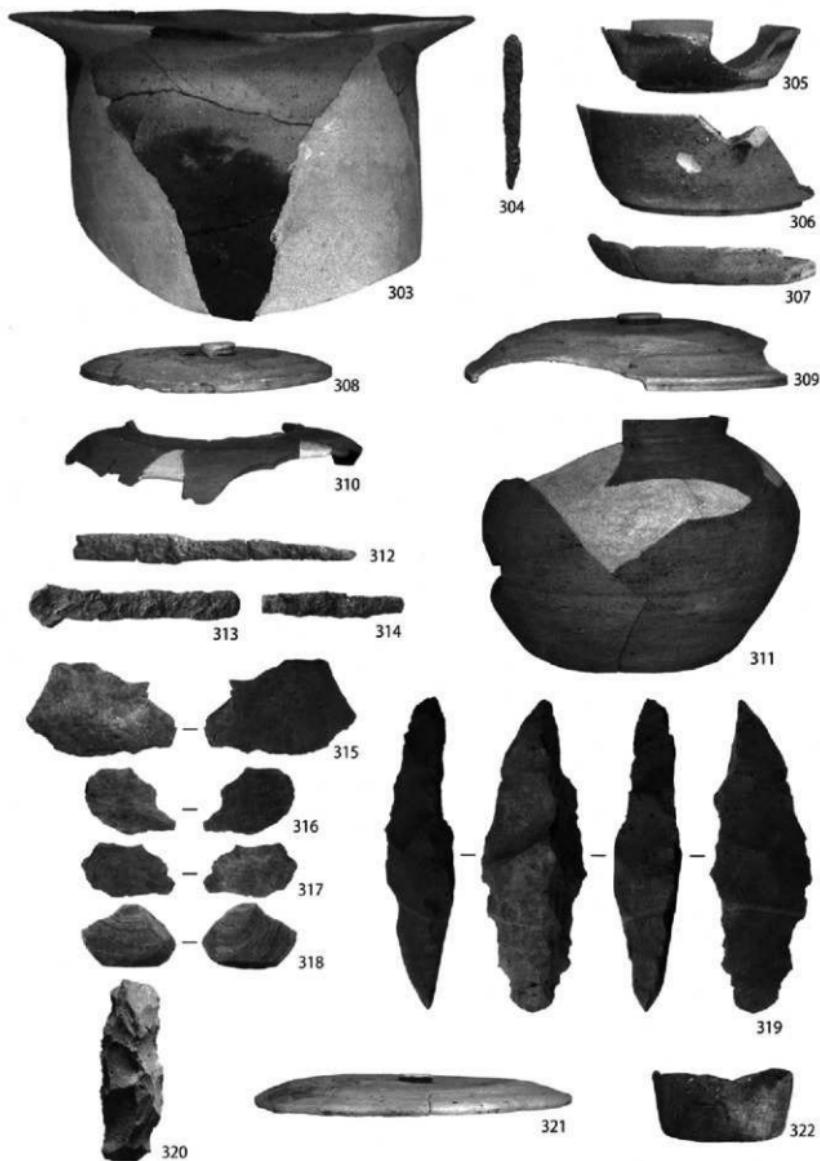
PL16



PL17



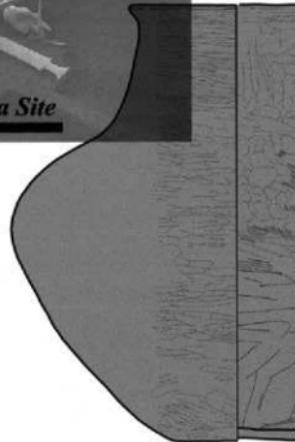
PL18



稚飼隈遺跡 第15次調査



The 15th Excavation Report of Zasshonokuma Site



IV. 第15次調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成15年8月8日に、九州旅客鉄道㈱の代表取締役社長・石原進氏より、福岡市博多区新和町二丁目25番地（総面積1,932m²）について、集合住宅建設に係る埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会に提出された（事前審査番号15-1-034）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である雜駒隈遺跡群に含まれており、申請地周辺においても埋蔵文化財発掘調査が多く行われてきた地点である。これを受けた福岡市教育委員会では、平成15年8月12日に試掘調査を行い、対象地内において遺構が存在することが明らかになった。このため事業者と福岡市教育委員会で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。

この結果、事業地内において地下に掘削がおよぶ範囲について、発掘調査を行う合意を得ることができた。しかし福岡市教育委員会が発掘調査に着手する時期と、事業者の工事日程に調整が困難な事態が生じた。そこで民間調査機関である岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が、九州旅客鉄道㈱の調査委託を受けて発掘調査を受託することになり、九州旅客鉄道㈱、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室、福岡市教育委員会の三者間で、適正な発掘調査を実施するための協定書が取り交わされた。また福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成15年11月10日から開始し、平成16年3月5日に終了することができた。整理作業および報告書作成は、調査終了後に開始し、平成17年3月31日に刊行するに至った。

なお、現地で調査を行うにあたり、ご理解と多大な協力をして頂いた九州旅客鉄道㈱をはじめとする事業者関連各位、および指導を賜った福岡市教育委員会の諸氏には、ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）

池崎謙二・池田祐司・池ノ上宏・井澤洋一・石井扶美子・岩下義之・久住猛雄・小池史哲
高野雅博・田上勇一郎・瀧本正志・田中壽夫・常松幹雄・長家伸・橋口達也・堀田正道
吉留秀敏・山口謙治・山崎純男・米倉秀紀・柳田康雄・力武卓治
福岡市教育委員会埋蔵文化財課・福岡市埋蔵文化財センター・九州旅客鉄道㈱・㈱友清商店

2. 調査体制

事業主体（調査委託）	九州旅客鉄道㈱
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当（調査受託）	岡三リビック㈱ 埋蔵文化財調査室
調査員	堀尾孝志（埋蔵文化財調査室 室長） 中山 浩（埋蔵文化財調査室 研究員） 天野直子（埋蔵文化財調査室 研究員） 整理作業のみ
発掘作業	加治久住・菊澤将憲・倉岡眞記・柴田徳平・中下まり江・古川 満 松尾祥子
整理作業	佐田祐一・倉岡眞記・中下まり江・平野由美子・松尾祥子

V. 第15次発掘調査の記録

SC001 穴式住居跡

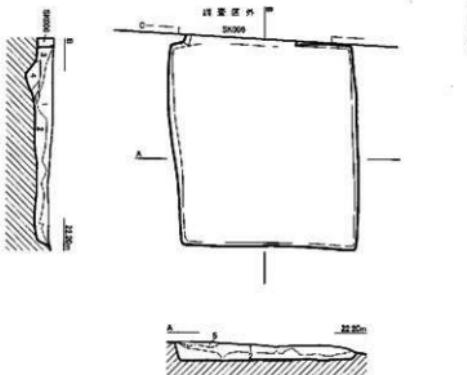
【造構】

上面は後世の造成により削平され、残存する掘り込みは浅い。東壁の一部がSK006 土坑と重複するが、相手の時期的関係を判然とすることは困難であった。但し竈が確認できなかったこともあり、或いは SK006 土坑に破壊された可能性がある。そうすると北壁側に竈は構築されたことになる。

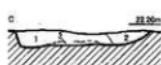
【遺物】

坏身は(001～010・012)、断面四角の低い高台が底端部より内側に貼り付き、体部が直線的に外上方に立ち上がるタイプと、体部下位が丸みを帯びるタイプの両方が認められる。

坏蓋(017～022)は、口縁部が断面三角形で、垂直に短く屈曲させ、内側に明瞭な稜が残る。こうした坏身や坏蓋の特徴から、8世紀代前半を主体とした遺物構成と考えられる。



1. 瓦器 SYR3/1 硬性あり・しまり強 ローム粒子を少量含む。炭化物を少含む。
2. 瓦器 SYR3/1 硬性あり・しまり強 ローム粒子を多量含む。炭化物を少含む。
3. 瓦器 SYR3/1 硬性あり・しまり強 ローム粒子を多量含む。
4. 瓦器 SYR3/1 硬性あり・しまり強 ロームブロックを多量含む。
5. 黒陶 SYR2/1 硬性あり・しまり強 ローム粒子を少量含む。



1. 黒陶 7.5YR3/1 硬性あり・しまり強 ローム粒子を少量含む。
2. 壁側 7.5YR3/3 硬性あり・しまり強 ロームを中量含む。
3. にぶい湯 7.5YR3/4 硬性あり・しまり強 ロームを多量含む。



Fig.83 SC001・SK006 造構平面図

全 体	平面形態	長方形
	主軸角度	東が未確認のため不明
	規 格	南北 2.30 m × 東西 2.50 m
	型 置	東西の約半分ほどが SK006 土坑と重複する
	ビット	なし
	四 溝	なし
電	床 面	全体的にロームが硬質化する
	掘り方	なし
	位 置	確認した範囲内では認められず、SK006 十坑と重複する可能性あり
	形 式	不明
中心堆積	中心堆積	不明
	焼物口部	不可
	壁	不明
	火 床	不明
油 部	油 部	不明

Tab.52 SC001 遺構観察表

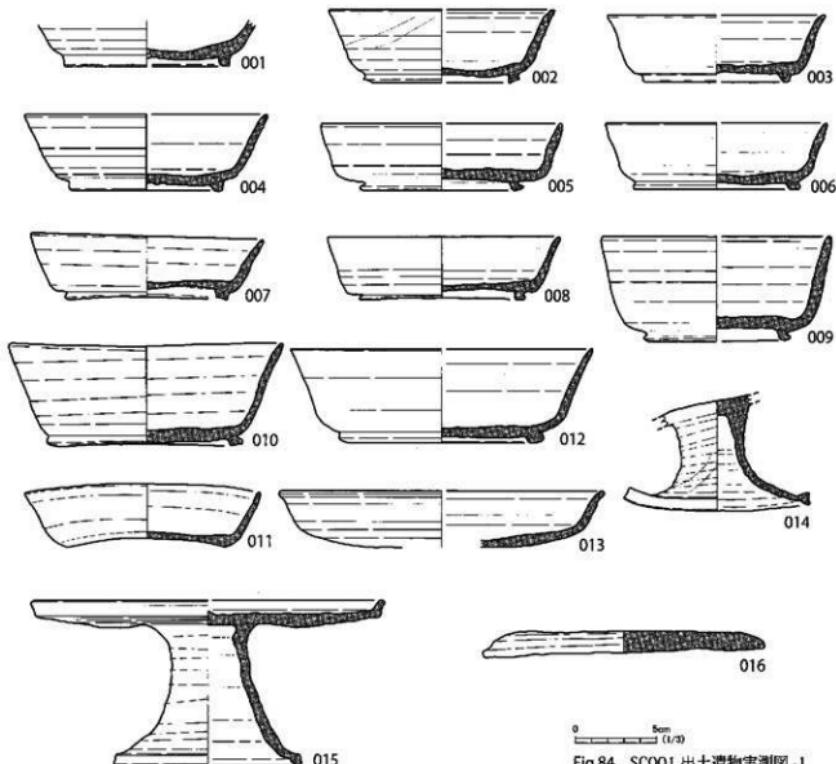


Fig.84 SC001 出土遺物実測図 - 1

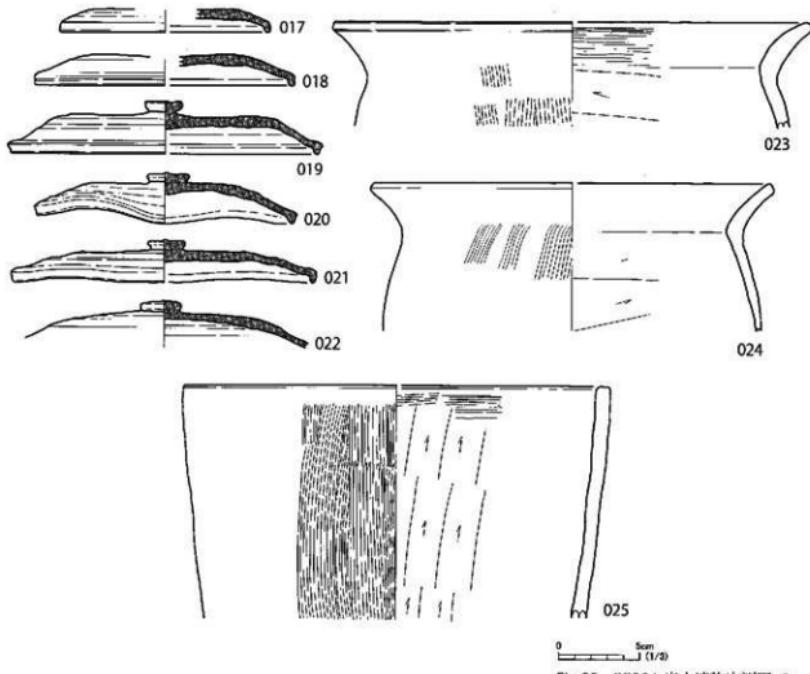


Fig.85 SC001 出土遺物実測図 -2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 権
			口径	底深	高さ		
001	須恵器 环身	埋土下層	小切	10.2	不明	褐灰 10YR 6/1	底部のみ残存。断面四角の高台が、底盤部より内側に貼り付けられる。
002	須恵器 环身	埋土下層	(13.8)	(9.5)	4.8	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部内側が外反する。体部下位には下位から口縁にかけて、絞りあげた状態で斜め方向に残る。断面四角の高台が、底盤部より内側に跳ね上がる様子で貼り付けられる。
003	須恵器 环身	埋土下層	(13.4)	(9.0)	4.1	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部内側が外反する。体部下位には下位から口縁にかけて、絞りあげた状態で斜め方向に残る。断面四角の高台が、底盤部より内側に跳ね上がる様子で貼り付けられる。
004	須恵器 环身	埋土下層	(15.0)	9.4	4.7	灰黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上る。体部下位は斜面へと削り取る。断面四角の高台が、底盤部より内側に貼り付けられる。底部内面にハケ目。
005	須恵器 环身	埋土下層	(14.8)	10.0	4.1	にぶい黄褐 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上る。高台が、底盤部より内側に跳ね上がる様子で貼り付けられる。
006	須恵器 环身	埋土下層	(13.6)	10.2	4.1	淡黄褐 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上る。断面体部の低い高台が、底盤部より内側に貼り付けられる。

Tab.53 SC001 出土遺物観察表 -1

()内の数字は測定の位置を表す

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特 製
			口径	底径	高さ		
007	須恵器 环身	埋土下層	14.3	9.9	3.7 ~ 4.1	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。前面四角の低い高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底端は円弧へラ切り後に、へラ削り調整。
008	須恵器 环身	埋土下層	14.6	10.3	3.9	褐色 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。前面四角の高い高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
009	須恵器 环身	埋土下層	(14.2)	9.0	6.4	に赤い黄褐色 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。前面四角の高い高台が、底端部より内側に貼り付けられる。
010	須恵器 环身	埋土下層	16.9	11.8	6.3	に赤い黄褐色 10YR 7/2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。前面四角の太く低い高台が、底端部よりやや内側に貼り付けられる。
011	須恵器 环	埋土下層	14.5	9.5	3.3	褐色 10YR 5/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。表面が牛じり、底端が盛り上がる。底部下辺は回転へラ削り。底端には静止系刃物が認められる。
012	須恵器 环身	埋土上層	(18.6)	12.5	5.8	灰白 10YR 8/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部と底部の端は丸みを帯び、円滑ではない。前面四角の高台が、面を無駄に貼り付けられる。焼成不良で軟質。
013	須恵器 皿	埋土下層	(20.0) (17.4)		3.5	灰白 10YR 7/1	底部は丸みを帯びる。口縁部は外反する。焼成不良で軟質。
014	須恵器 高火	埋土上層	不明	11.4	不明	褐色 10YR 6/1	底部は欠損。底部外面に取りあげた虫が斜め方向に残る。表面に虫みが生じる。
015	須恵器 蓋	埋土下層	(21.9)	(11.6)	10.2	褐色 10YR 6/1	口縁部は浅く、口縁部を強く直立させる。
016	須恵器 盤	埋土下層	14.9	—	1.1 ~ 1.7	灰白 10YR 8/1	円盤状の形状を呈する。焼成不良で軟質。
017	須恵器 环盤	埋土上層	(13.0)	—	1.4	褐色 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、表面に強く屈曲する。内側に明顯な縦が残る。天井部は回転へラ削り調整。
018	須恵器 环盤	埋土上層	(16.0)	—	1.9	褐色 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、表面に強く屈曲する。内側に明顯な縦が残る。天井部は回転へラ削り調整。
019	須恵器 环盤	埋土上層	(19.4)	—	3.2	褐色 10YR 5/1	口縁部は断面三角形で、表面に強く屈曲する。内側に明顯な縦が残る。天井部は回転へラ削り調整。
020	須恵器 环盤	埋土上層	16.2	—	3.1	に赤い黄褐色 10YR 7/2	口縁部は断面三角形で、表面に強く屈曲する。内側に明顯な縦が残る。天井部は回転へラ削り調整。表面に虫みが生じる。
021	須恵器 环盤	埋土上層	(18.8)	—	2.6	褐色 10YR 6/1	口縁部は断面三角形で、表面に強く屈曲する。内側に明顯な縦が残る。天井部は回転へラ削り調整。
022	須恵器 环盤	埋土下層	不明	—	2.9	灰白 10YR 8/1	天井部は回転へラ削り調整。焼成不良で軟質。
023	土師器 甕	埋土下層	(14.7)	不明	不明	褐 5YR 6/6	外向はハケ目、内面はへラ削りが施される。
024	土師器 甕	埋土下層	(24.8)	不明	不明	浅黄褐色 7.5YR 8/4	外向はハケ目、内面はへラ削りが施される。
025	土師器 甕	埋土下層	(26.3)	不明	不明	浅黄褐色 7.5YR 8/4	外向はハケ目、内面はへラ削りが施される。

Tab.54 SC001 出土遺物観察表-2

()内の数値は推定の法量を表す

SR002 木棺墓

【遺構】

後世の造成により、遺構上面は削平される。平面の形態は 0.7×2.1 m の長方形を呈し、約 0.3m の深さであった。棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、遺構の形態から類推し、木棺墓として取り扱うこととした。

北東隅の下層からは、押し潰された状態で、完存する壺(026)が認められる。

【遺物】

出土遺物は、副葬品の壺が 1 点のみである。器形は体部中位が大きく張り出し、球形の膨らみを作り出す。頸部は内傾気味に直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。器表面は頸部から体部下位にかけて、横向方向に研磨が施される。内面はヘラ削りが全体的にみられる。時期的には他の木棺墓出土の土器とほぼ同時期で、弥生時代早期の夜白式系として位置づけられる。

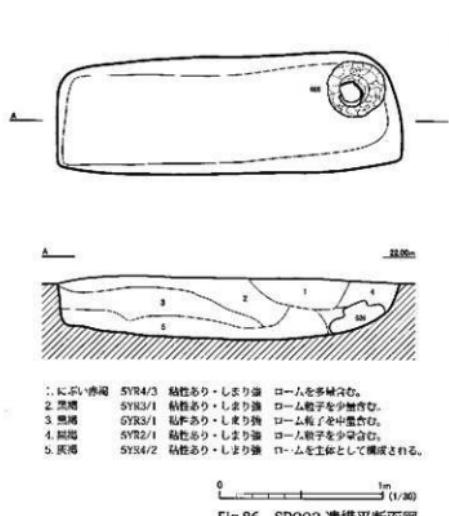


Fig.86 SR002 遺構平断面図

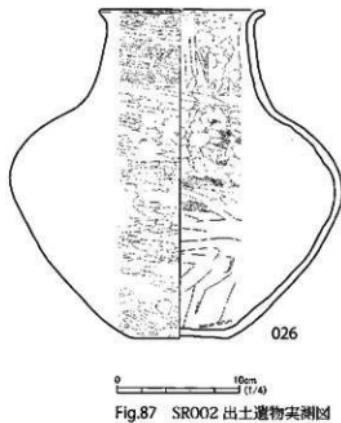


Fig.87 SR002 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
026	弥生土器 壺	埋土下層	13.5	8.1	27.0	褐焼 7.5YR 6/1	底部から体部は大きく外傾しながら、球形の膨らみを作る。颈部は直線的に内傾しつつ、口縁部で外反する。表面には横向方向に研磨が施される。

Tab.55 SR002 出土遺物観察表

SR003 木棺墓

【遺構】

SR002 木棺墓から、東側に 7 m ほど離れた位置で、長軸方向の傾きをほぼ同じくして確認された。ここも後世の造成により、遺構上面が削平される。平面の形態は 0.8×1.85 m の長方形を呈し、約 0.4m の深さであった。棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、遺構の形態から類推し、木棺墓として取り扱うこととした。

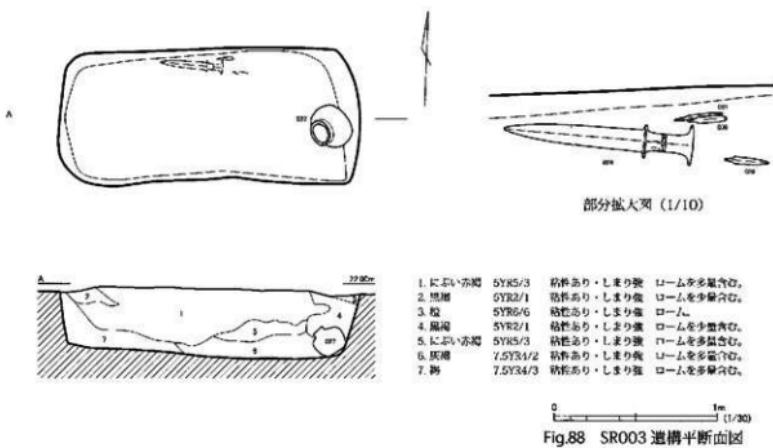
東壁中央の下層からは、完存の壺（027）が認められた。さらに北壁沿いに鋒を西側に向けた状態で、有柄式磨製石剣（028）が 1 本と、これとは全く逆位に鋒を揃えて並んだ、有茎式磨製石鎌（029・030・031）が 3 本出土した。

【遺物】

壺は他の木棺墓出土のものとほぼ同時期で、弥生時代早期の夜臼式系として位置づけられる。器形および特徴も類似する。

有柄式磨製石剣は表面が風化し、脆弱化が進んだ状態にあったため、鋒の先端が僅かに欠損するが、本来は完存品を副葬したものである。柄から鋒までの全身上には、研磨した痕が明瞭に認められる。柄の中央には節帶を有する。両面中央には鋒が通り、断面形態は菱形を呈する。基部から並行して延びる剣身は、途中で屈曲すると先細り鋒へと向かう。

有茎式磨製石鎌は 1 点が、脆弱化して先端を欠損するが、本来は完存品を副葬したものである。3 点のいずれもが細身で、柳葉形を呈する。鎌身の両面中央には鋒が通り、断面形態は菱形を成す。茎部は関からほぼ直角に作り出され、多面体に研磨されながら、末端に向かい先細る。然るに断面を角ばった多面形となる。



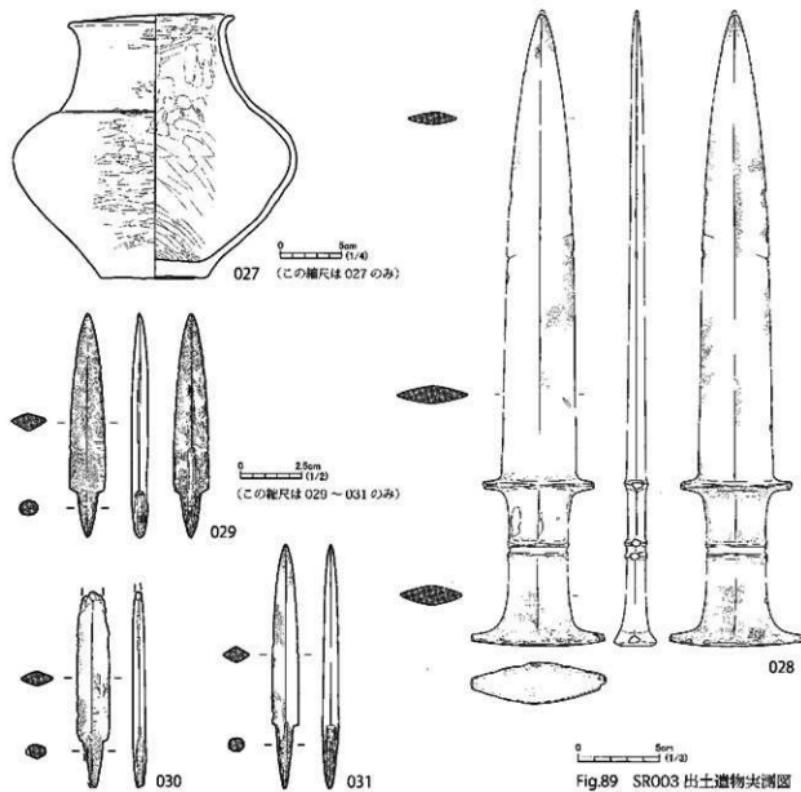


Fig.89 SR003 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法寸(cm)			色調	特徴	
			口徑	底径	断面			
027	弦文土器 壺	埴土下層	13.3	8.7	21.0 ~ 21.6 10YR 7/3	にふい黄緑	体部は大きく外傾しながら、球形の削落を作る。瓶部と体部の境には、一帯の凹陥がある。瓶部は直線的に内傾しつつ、口部部で外反する。器底面には横方向に研磨が施される。	
028	有柄式 磨製石剣	埴土下層	全長 舟型大頭	舟型人刃 38.9	4.6	1.0	260.0	先端部が欠損。全面に研磨した痕が刃面に認められる。舟の両面中央には丸みがあり、断面は菱形となる。舟の中央に棒を有する。粘板岩質。
029	有茎式 磨製石剣	埴土下層	9.2	1.5	0.7	8.2	全面に研磨した痕が認められる。茎の断面は菱形、茎部の断面は多角形を呈する。片面中央部に浅い凹みを持つ。粘板岩質。	
030	有茎式 磨製石剣	埴土下層	8.1 残存部分	1.3	0.5	6.5	全面に研磨した痕が認められる。先端部が強弱化し欠損する。茎部の断面は菱形、茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩質。	
031	有茎式 磨製石剣	埴土下層	10.0	1.1	0.7	7.4	全面に研磨した痕が認められる。茎の断面は菱形、茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩質。	

Tab.56 SR003 出土遺物観察表

SK004 土坑

【遺構・遺物】

後世の造成により、遺構上面は著しく削平される。平面の形態は、 $0.6 \times 1.5\text{ m}$ の隅丸長方形を呈し、深さ 0.15 m を測る。当遺構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明である。

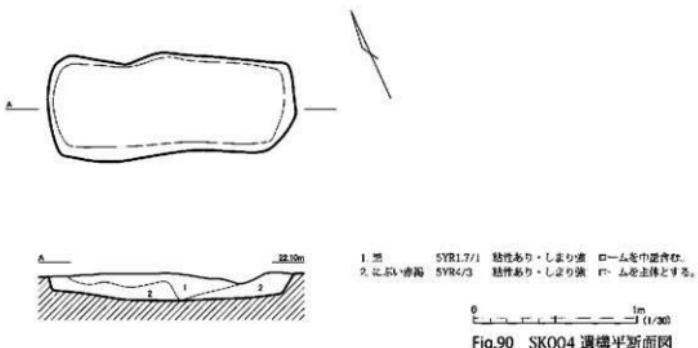


Fig.90 SK004 遺構平断面図

SC005 壁穴式住居跡

【遺構】

上面は削平されていることもあり、残存していた掘り込みは浅い。中央部を大きく抉るようにして、擾乱が床面の下までおよぶ。竈はその擾乱際にやうじて残存していた。こうした状況から、擾乱は調査区外の北壁までもおよぶものと思われるが、木調合ということもあり、南北方向の規模は不明である。確認できた床面は一部分であるが、ロームが硬質化した状態であった。

【遺物】

当遺構に伴う出土遺物はない。

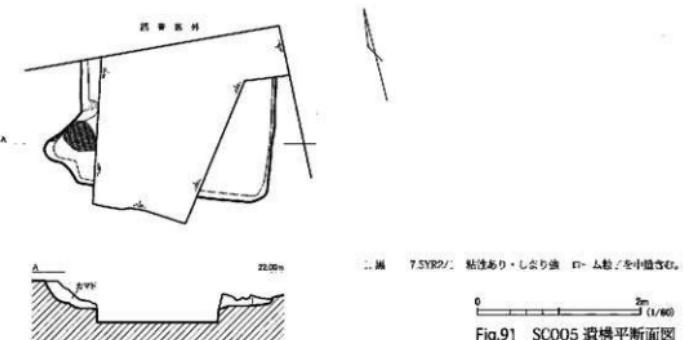


Fig.91 SC005 遺構平断面図

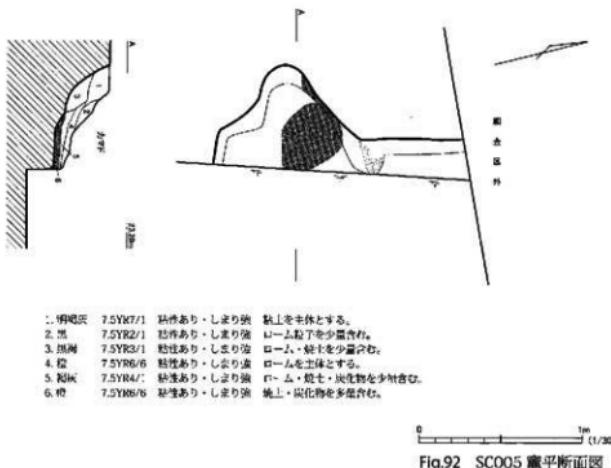


Fig.92 SC005 窓平面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	W-74-N
	頂 横	東西は2.40m、南北は複孔および調査以外のため不明
	壁	上面が削平されており、深さは0.10mと浅い
	ビット	確認した範囲内では認められず
	内 深	確認した範囲内では認められず
窓	床 面	中央部は複孔により残存しない 確認できた範囲内では全体的に被覆化する
	振り方	確認した範囲内では認められず
	位 置	東壁の南側寄り
	形 状	窓道部が突出する
燃焼口	中心輪長	0.40m
	燃焼口幅	0.50m
	壁	北側が火熱作用を受け、赤褐色に被覆化する
	火 热	燃焼口に火熱作用を受けた面が認められる
袖 部	袖 部	片袖部分に粘土が認められる

Tab.57 SC005 遺構観察表

SK006 土坑

【遺構】

SC001 穫穴式住居跡の東壁と重複するが、相互の時期的関係は前述したとおりである。当遺構は限られた範囲での確認に過ぎなく、全体的な形態については不明である。はたして土坑であることも疑問は残される。

【遺物】

当遺構に伴う出土遺物は、須恵器の环蓋(032)が1点のみであった。口縁部を短く屈曲させ、内側には稜がみられる。こうした特徴から、8世紀代前半の所産と考えられる。



Fig.93 SK006 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法 尺 (cm)			色 調	特 様
			上部	底部	厚さ		
032	須恵器 环状	埋土下層	(14.8)	—	2.5	灰白 10YR 7/1	口縁部は断面三角形で、垂れに強く弧曲する。内側に明顯な輪が現る。 天井部は回転ヘリコリ彫刻。

Tab.58 SK006 山土遺物観察表

() 内の数値は推定の法尺を表す

SC007 積穴式住居跡

【遺構】

北側が約1/3ほど搅乱により消失する。床面は住居中央部が硬質化し、その下には掘方が認められる。現況において竈は認められず、おそらく消失した北壁か、東壁に構築されていたものと考えられる。

【遺物】

山土遺物は寡少で、埋土上層から出土した环身（034）は、体部中位から口縁にかけて外反しつつ立ち上がる。

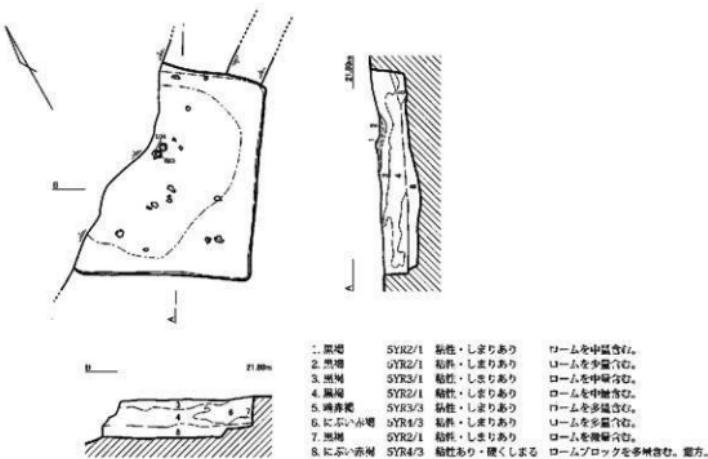


Fig.94 SC007 遺構半断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	竪が未確認のため不明
	縦 横	東西は攪乱のため不明、南北は 2.50 m
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ 0.30 m を測る
	ビット	確認した範囲内では認められず
	窓 清	確認した範囲内では認められず
	床 面	壁面開口以外の、中央部が硬質化する
	泥り方	あり
窓	位 置	確認した範囲内では認められず、崩壊を受け消失した北壁、もしくは西壁に構築された可能性あり
	形 状	不明
	中心離長	不明
	選択口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	油 脂	不明

Tab.59 SC007 遺構観察表



Fig.95 SC007 山土遺物実測図

遺物番号	岩種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	高さ		
033	須恵器	埋土二層	(11.2)	8.5	2.5 ~ 2.6	にふい黄褐 10YR 7/2	底面部の一部に、へつ切りの段差が未調査のまま残る。
	环						
034	須恵器	埋土上層	(14.0)	9.0	4.9	褐灰 10YR 5/1	全体下位は丸みを帯びつつ立ち上がり、口縁部で大きく外反する。
	环身						

Tab.60 SC007 出土遺物観察表

()内の数値は概算の法量を表す

SC008 積穴式住居跡

【造構】

擾乱により大部分が消失し、南東隅が残存するのみである。この隅には小穴が認められる。床面は全体的に硬質化する。現況において竪は認められず、おそらく消失した壁面のいずれかに構築されていたものと考えられる。

【遺物】

出土遺物は寡少であったが、時期を窺い知ることのできる遺物に、P1 内から出土した环身 (035) がある。断面四角の高台が底端部より内側に貼り付けられる特徴から、8世紀代前半の所産と捉えられる。

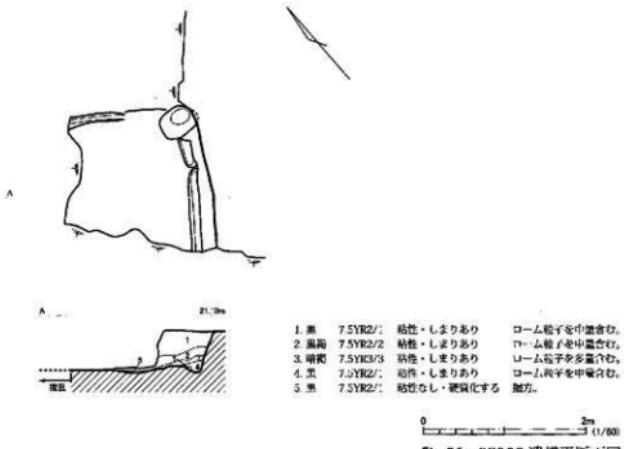


Fig.96 SC008 遺構平面図

全体	平面形態	方形
	主軸角度	崖が木確認のため不明
	傾 檻	北東側の約1/4のみが残る程度で規模は不明
	壁	ほぼ垂直に掘削された壁面で、深さ0.4mを測る
	ビット	北東側に直径0.45m、深さ0.25mの穴
竈	底 溝	確認できた範囲内では、北壁と東壁にあり
	床 面	確認できた範囲内では、全体的に硬質化する
	掘り方	あり
	位 置	確認した範囲内では認められず、壊乱を受け消失した部分に構造されていた可能性あり
	形 状	不明
	白い塊状	不明
	燃焼口痕	不明
	盛	不明
	火 灰	不明
	被 部	不明

Tab.61 SC008 遺構観察表



Fig.97 SC008 出上遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			台頭	特 徴
			口径	底径	部高		
035	楽器 环身	P 1	14.6	9.5	3.9	越灰 10YR 6/1	体部は直立的外上方に立ち上る。体部下位は直軸へラ帝り。系舌四 角の高台が、底地より内側に貼り付けられる。

Tab.62 SC008 出土遺物観察表

SC009 積穴式住居跡

【遺構】

当遺構の立地環境を俯瞰すると、舌状に延びた台地が緩やかに南側に傾斜してゆき、眼前には深い谷地形が迫る。所謂、台地の際ともいえる。そうしたことから、集落の中でも最も南側に位置することになる。

当住居跡の規模を他と比較すると、最も大型の部類に属することになる。しかし西壁の周溝をみると、途中でくい違った部分が認められる。これは、ある時期において、住居の拡幅が行われた可能性を物語る。

竈は北壁に新旧の 2 基が存在する。中央部に小さく突出する方は、手前に周溝が掘られることから、こちらを以前に使用されていた旧の竈と考えた。また奥行きが短いことから、本来の竈の位置は、この住居跡の、まだ内側にあったと想定できる。それが住居の拡幅時に、竈本体の大部分が破壊されたものと考えた。すると先ほどの周溝のくい違いも合点のいく説明ができる。

このような状況から、北壁と西壁が拡幅されたことになる。東壁については明確にはし難いが、壁面らしきものが上層断面内にみられる。また東壁周溝の掘り込みは、西壁の内側の周溝とほぼ同じ高さである。南壁については、全く様相を知る術がなかった。さて、こうした状況から察すると、単純に一回り小さな旧住居跡が、そのまま拡幅されたというのではなく、東西方向に闊していえば、西側にずれるような格好で構築されたことになる。

拡幅に伴い新たに構築された竈は、北壁東寄りの大きな方である。西側の壁面が搅乱により大きく破壊され、燃焼部も大きく抉られていた。焼土や炭化物は部分的にみられるが、火熱作用を受けた面は認められなかった。

床面は全体的に硬直化し、北東隅と竈の手前側に土坑が認められる。

南壁には出入り口と考えられる張り出しが認められる。周溝もこの部分で途切れる。張り出しはその大部分が搅乱により、消失するため規模等は不明である。

以上、こうした住居跡の規模の大きさや、張り出しを持つ特異性は、他の住居跡にみることの出来ないもので、集落内における優位性を感じられる。

【遺物】

しかし出土遺物をみる限りでは、前述したような優位性を示すものを認めるることはできなかった。また、他の住居跡と比較した場合でも、遺物の出土量は寡少で、その大半が破片で占められ、完存もしくはこれに近い良好な状態のものは僅かである。

このような数少ない資料であるが、坏蓋はタイプの異なる 2 つがみられる。まずは口縁が退化し、天井部は低く扁平なもの（040）と、断面三角形で垂直に短く屈曲させるもの（041）がある。

坏身（037・038）は体部下位が丸みを帯び、ここに底部との境が不明瞭となり、こうした位置に高台が貼り付く。いずれも外面底部に「×」印がヘラ書きされていた。

坏身や坏蓋の特徴から、8 世紀代前半の所産と考えられるが、口縁部が退化する坏蓋もある点から、前半中葉の様相を反映しているとも考えられる。

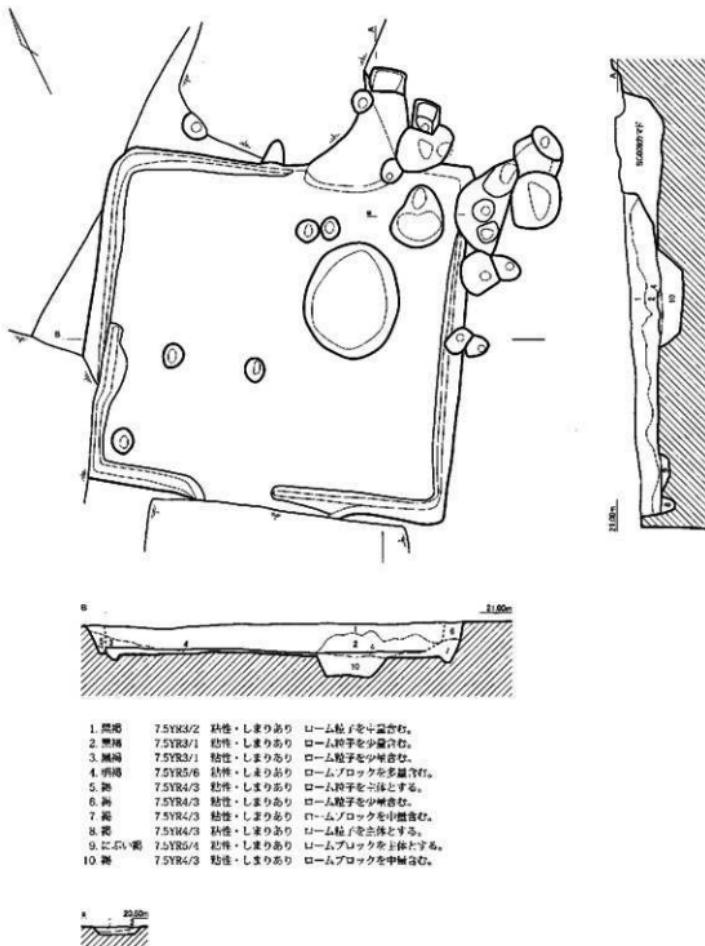


Fig.98 SC009 造構平面図

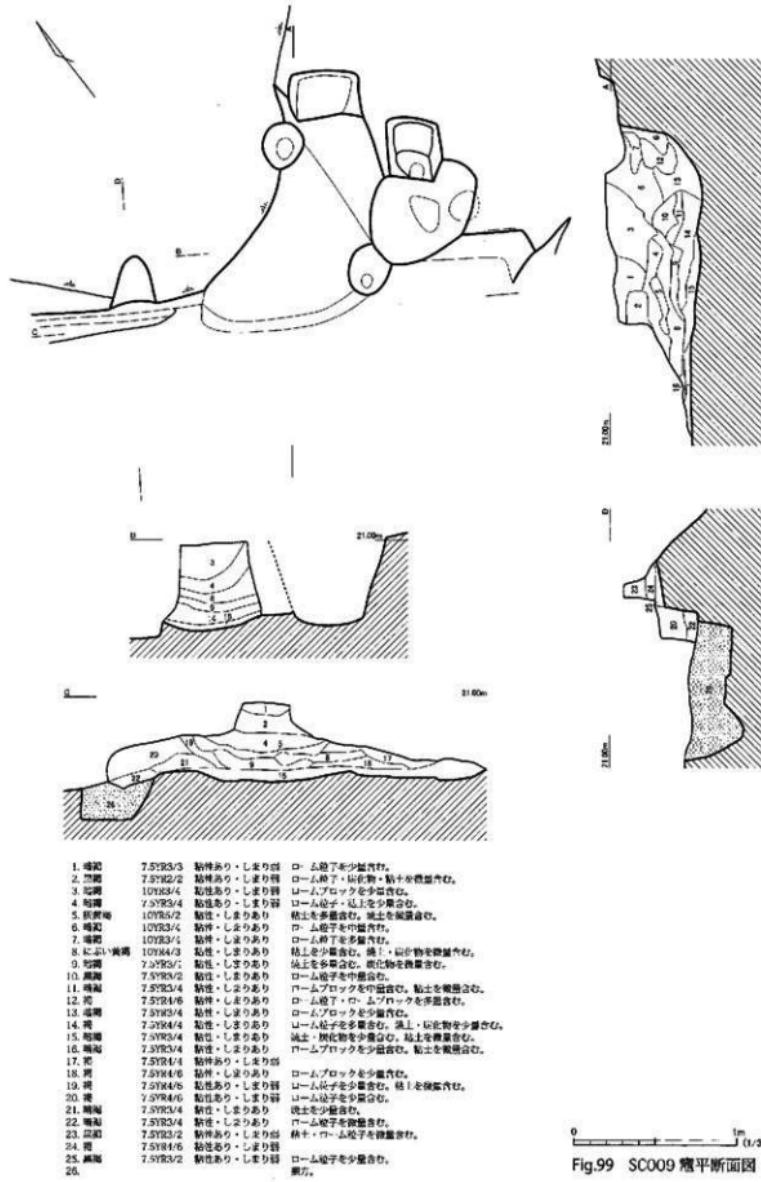


Fig.99 SC009 積平断面図

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	電2(新) N-30-E
	側 構	東西4.60m×南北4.15m
	壁	深さ0.40mを測る
	ビット	北東住居外に複数認められるが開通性は不明 住居内には7基あり、内2基は床付近に位置し規模も大きめである
	周 調	壁と張り出し部分以外で認められる
	床 面	全体的に硬質化する
	掘り方	あり
電	位 置	北壁中央を電1(旧)、東側寄りを電2(新)とする2基が認められる
	形 状	電1(旧)：奥壁部分が小さく突出する
	中心地長	電2(新)：西側壁を掘削して破壊される
	通紙...J細	電1(旧) 0.15m
	壁	電2(新) 0.75m
	火 灰	電1(旧) 不明
	着 部	電2(新) 不明
		電1(旧)・電2(新)の壁において、火熱を受けた面は斑点できず
		電1(旧)：不明
		電2(新)：不明
		電1(旧)：不明
		電2(新)：不明

Tab.63 SC009 遺構観察表

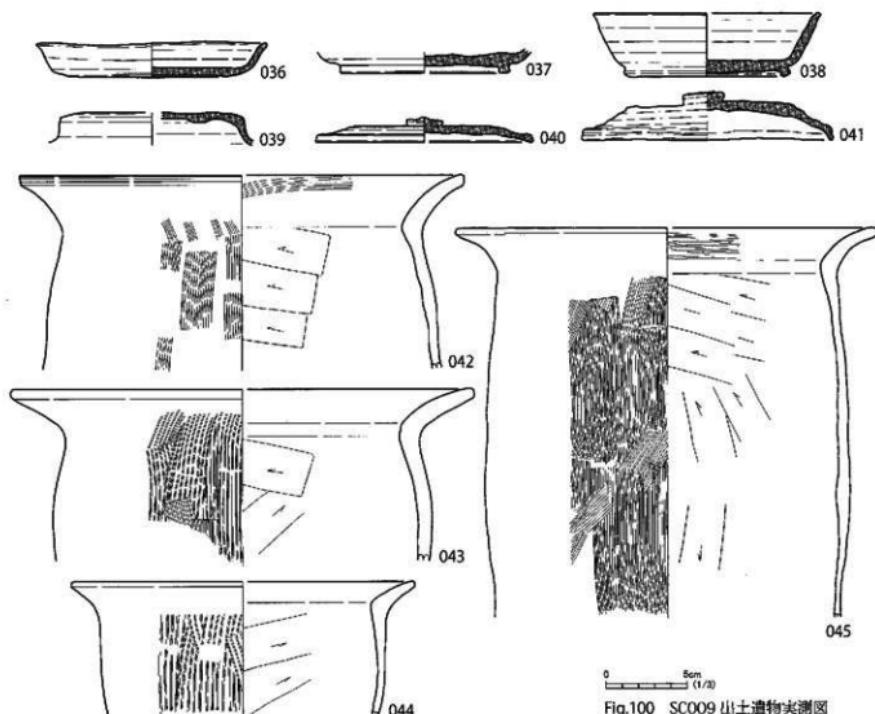


Fig.100 SC009 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法寸 (cm)			色調	特徴
			口径	底径	基高		
036	須恵器 仄	埋土上層	14.2	8.9	2.1	褐灰 10YR 6/1	口縁部が外反する。体部下位は回転ヘラ削り。
037	須恵器 仄身	埋土下層	不明	(10.4)	1.3	明褐色 10YR 7/2	体部下位は回転ヘラ削り。座山四角の高台が、底端部より内側に貼り付けられる。底部内面はナガ素地。武池山由来「×」形の縦割りあり。
038	須恵器 仄身	埋土上層	14.0	10.2	3.9	灰白 10YR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。座山四角の高台が、開き実底に成形に貼り付けられる。底部外周に「×」形の縦割りあり。
039	須恵器 仄	床面上	不明	11.2	2.1	褐灰 10YR 6/1	水平の大円脚から、体部をやや細き茎端に屈曲させ、口縁部で大きく外反させる。
040	須恵器 仄垂	埋土下層	(13.4)	-	1.5	褐灰 10YR 6/1	口縫は消失し輪められないが、内側に僅かな破がみられる。天井部は回転ヘラ削り調整。
041	須恵器 仄垂	埋土上層	15.4	-	2.8 ~ 3.0	褐灰 10YR 6/1	口縫部は断続二角形で、垂直に短く延びる。内側に弱めな棱が残る。口縫部外側には摘み出した際の、衝突の痕が状痕となって残る。
042	土師器 甕	埋土上層	(27.4)	不明	不明	褐 7.5YR 7/6	外山はハケ目。内面はハケ目、底部以下はヘラ削りが施される。
043	土師器 甕	埋土下層	(28.6)	不明	不明	褐 5YR 7/6	外山はハケ目。内面はヘラ削りが施される。
044	土器湯 甕	埋土下層	(21.2)	不明	不明	褐 SYR 6/6	外山はハケ目。内面はヘラ削りが施される。
045	土器湯 甕	埋土下層	(26.0)	不明	不明	褐 SYR 6/6	外山はハケ目。内面は口縫部がハケ目、底部以下はヘラ削りが施される。

Tab.64 SC009 出土遺物観察表

()内の数値は測定の法値を表す

SK010 土坑

【造構】

平面形態は剛丸方形を呈すると思われるが、北側は攪乱により大きく抉られ消失する。規模は壁面の深さが約 0.5m を測り、断面は浅鉢状を呈する。部分的ではあるが底面付近で、硬くしまる部分が認められる。さらに、この下面には不整形の粗い面があり、掘方として捉えられなくもない。そうすると硬質化した部分は床面ともみれることから、住居跡の可能性も考慮できる。

14 次調査においても類似する遺構が確認されているが、円形の住居跡を留意しておかねばならないであろう。

さらに類例の蓄積によって、具体的な評価がなされることを期待するところである。

【遺物】

出土する遺物は寡少といえる。仄身（046）は、体部下位が丸みを帯び、その最も下に高台が貼り付けられる。

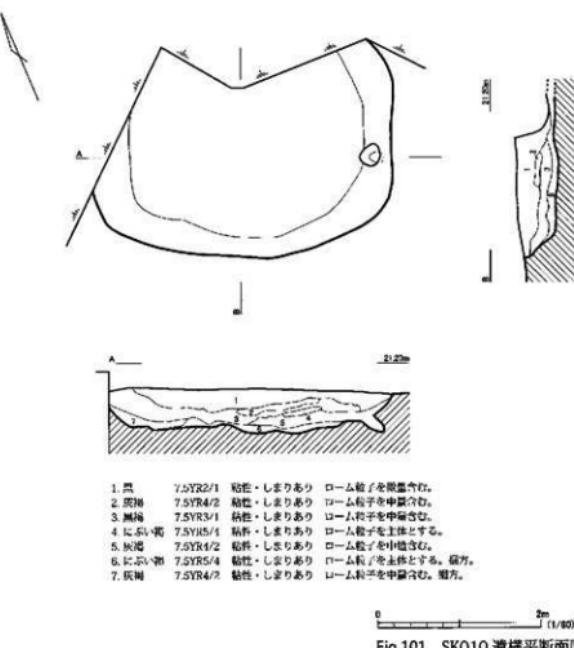


Fig.101 SK010 遺構断面図



Fig.102 SK010 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	寸法 (cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
046	須恵器 环形	理上層	13.5	9.8	3.8 ~ 4.4	褐灰 10YR 6/1	外縁と底部の端は丸みを帯び、口縁部で外反する。瓶底四角の窪谷が 崩壊跡に貼り付けられる。底深に横目の存在。

Tab.65 SK010 出土遺物観察表

SR011 木棺墓

【遺構】

遺構上面は削平され、さらに西側が約1/3と東側の一部が、既存建物の基礎により消失する。遺構の規模は幅が0.6m、現存する長さは1.3m、深さは0.4mを測る。この外周には一回り大きな広さで、段状の堆方が認められ、粘土が埋められる。おそらく木棺を納めたであろう空間との隙間に、充填されたものと裏込めと推測される。棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかつたが、最下層上面では、部分的に炭化物が認められ、床板の存在を窺わせる。こうした状況から、木棺墓と類推される。

墓壙内のほぼ中央付近からは、鋒を西側に向けた状態で、有柄式磨製石剣（048）が1本出土した。

また、墓壙の東壁の上端には壺（047）が1点認められた。ここは掘方を粘土で埋めた、位置的に棺の外側に当たる。

【遺物】

壺は、後世の攪乱で欠損する部分が多いが、他の木棺墓出土のものとほぼ同時期と捉えられ、弥生時代早期の夜白式系として位置づけられる。

一段柄式の有柄式磨製石剣は表面が風化し、他の石剣よりもかなり脆弱化が進んだ状態にあった。そのため研磨の擦痕さえも認められないほどであった。画面中央には鎧が通り、断面は菱形を呈する。基部から並行して延びる剣身は、途中で屈曲すると先細り、鋒へと向かう。

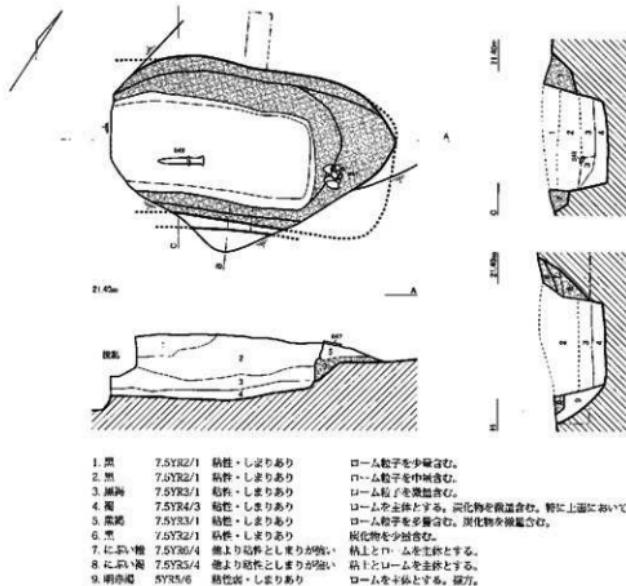


Fig.103 SR011 遺構平面図

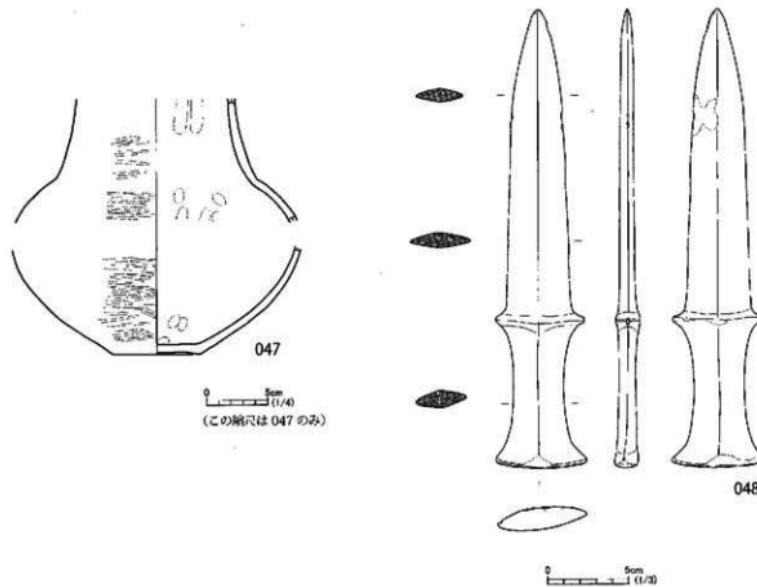


Fig.104 SR011 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口径	底径	器高		
047	弥生土器	遺構上西	不明	(7.3)	不明	浅黄褐色 7.5YR 8/4	底部から体部下位と体部上位から腹部にかけての部分が残存する。体部は大きく外傾しながら、環形の剥離を作る。頭部と体部の境は、段状に破壊される。
	壺						頭部には横方向に凹窓が複数個ある。
048	有柄式磨製石劍	埴土下層	全長	重量(kg)	身幅(大)	重さ(g)	他の石劍と比較すると墨が著しく進行しているため、表面が粗く削減の痕が残らない。両面中央には鋸が通り、断面は菱形となる。石劍石製。
			28.3	3.9	1.0		

Tab.66 SR011 出土遺物観察表

() 内の数値は縮定の法量を表す

SK012 土坑

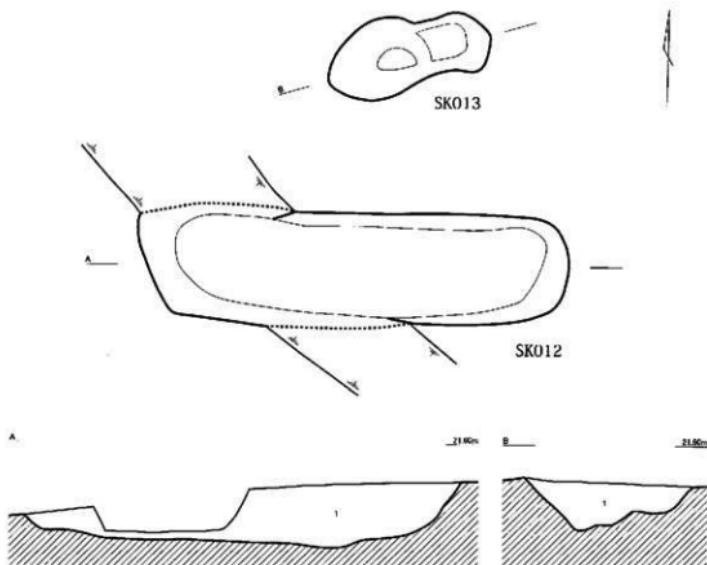
【造構・遺物】

後世の造成により、造構上面は著しく削平され、溝状に延びる擾乱が横断する。平面の形態は、約 0.7×2.6 mの隅丸長方形を呈し、深さ約0.4 mを測る。当造構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明。

SK013 土坑

【造構・遺物】

後世の造成により、造構上面は著しく削平される。平面の形態は、約 0.4×1.0 mの瓢箪形を呈し、底面には段差がみられ、深さは約0.2と0.3 mを測る。当造構に伴う出土遺物はなく、時代および性格は不明。



I. 黒鉛 7.5YR2/1 粘性あり・しまり強 不大のロームブロックを多量含む。

Fig.105 SK012・013 造構半断面図

SK014 土坑

【遺構】

後世の造成により、遺構上面は著しく削平される。平面の形態は、約 0.7×1.6 m の小さな長楕円彌字形を呈する。底面には僅かな掘り込みが認められる。深さは約 0.2 m を測る。

【遺物】

遺構確認面より有茎式磨製石器（049）が 1 点出土するが、擾乱層との境でもあり、確実に当遺構に伴うかについては疑問である。

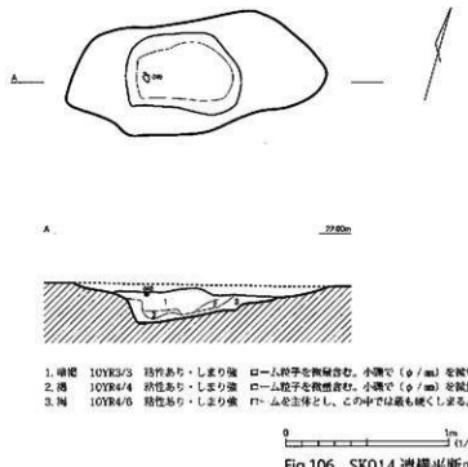


Fig.106 SK014 遺構断面図

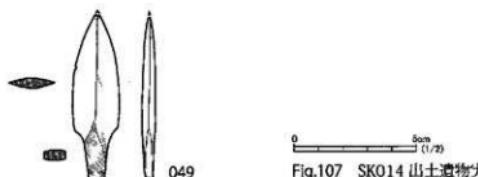


Fig.107 SK014 出土遺物尖端図

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)				特徴
			全长	最大幅	最大厚	重さ (g)	
049	有茎式 磨製石器	堆上層	6.8	1.9	0.6	7.9	全周に網状した縞が認められる。先端部が鈍化し欠損する。縞跡の両端中央には剝が通り、断面は菱形となる。矛部の断面は四角形を呈する。粘板岩質。

Tab.67 SK014 出土遺物観察表

SR015 木棺墓

【遺構】

遺構上面は削平され、西端側は排水管が横断し破壊する。平面形態は長方形で、規模は約 $0.9 \times 1.95m$ 、深さは $0.35m$ を測る。東端側には段が認められるが、この部分を掘方とすれば、木棺を納める墓壙の全長は短く約 $1.5m$ となる。

棺材および被葬者を示す人骨等は確認できなかったが、最下層上面では部分的に炭化物が認められ、床板の存在を窺わせる。墓壙の下層からは、北壁沿いに鋒を西側に向けた状態で、有柄式磨製石剣（051）が1本出土した。さらに先端を石剣と同じ方位に、揃え並べた有茎式磨製石鎌（052・053・054・054・056）が5本出土した。また墓壙の東壁の上端には壺（050）が認められた。これは位置的に棺の外側に当たる。

【遺物】

壺は弥生時代早期の、夜白式系として位置づけられる。

一段柄式の有柄式磨製石剣は表面が風化し、脆弱化が進んだ状態ながら完存である。剣身の両面中央には鏽が通り、断面は菱形を呈する。基部から並行して延びる剣身は、途中で屈曲すると先細り鋒へと向かう。

有茎式磨製石鎌はいずれも脆弱化しているが、完存品である。4点が柳葉形を呈する。いずれも鍔身の両面中央には鏽が通り、断面形態は菱形を成す。茎部は多面体に研磨されながら、末端に向かい先細る。この中でも056は、闊から鈍角に作られ、鍔身の片面片側に樋らしき溝をもつ。

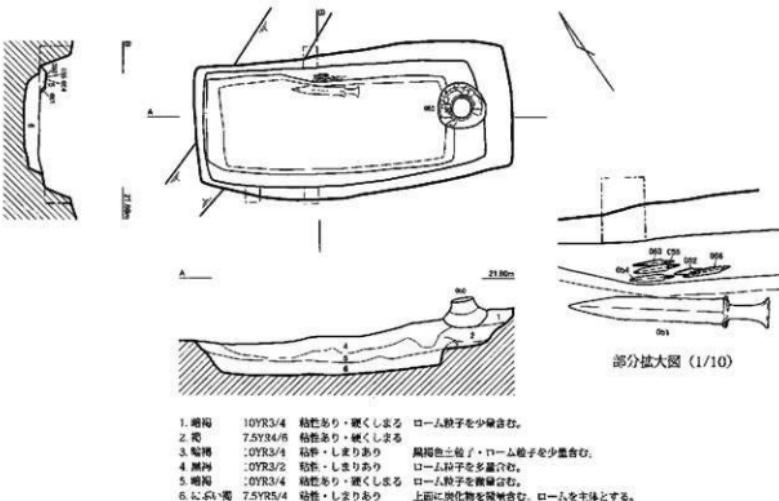


Fig.108 SR015 遺構平面断面図

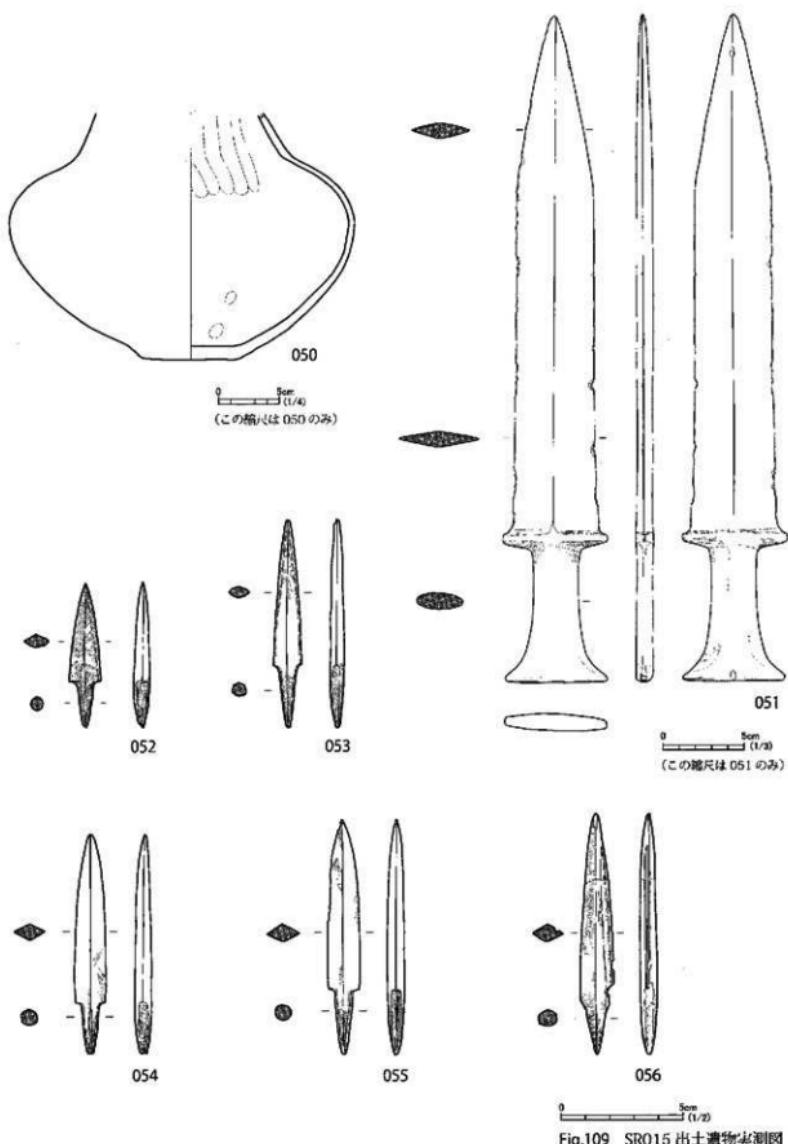


Fig.109 SRO15 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色調	特徴
			口徑	底径	脚高		
050	泥生土器 壺	遺構上面	不明	(8.2)	不明	淡黄褐色 7.5YR 8/6	口縁部を欠損する。内面はナゲ調整され、底部についてはナゲあげがある。
051	有柄式 磨製石劍	埋上下層	全長 41.0	対置大軸 5.0	舟體大ソ 1.0	重さ(g) 260.0	頭化が進んでおり、柄の部分にのみ研磨痕が認められる。両面中央には縦溝があり、刃部は変形となる。舟形の形状が、柄の右軸と比較するとよく表されている。粘板岩質。
052	有茎式 磨製石鏡	埋上下層	5.9	1.3	0.7	3.6	全面に研磨した痕が認められる。盤身の両面中央には舟が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩質。
053	有茎式 磨製石鏡	埋土下層	8.5	1.2	0.6	4.6	全面に研磨した痕が認められる。盤身の両面中央には舟が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩質。
054	有茎式 磨製石鏡	埋土下層	9.0	1.3	0.7	7.2	全面に研磨した痕が認められる。盤身の両面中央には舟が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。粘板岩質。
055	有茎式 磨製石鏡	埋土下層	9.5 馬蹄部分	1.3	0.7	7.9	全面に研磨した痕が認められる。盤身の両面中央には舟が通り、断面は菱形となる。先端部が磨削化し破損する。粘板岩質。
056	有茎式 磨製石鏡	埋土下層	9.9	1.4	0.7	6.2	全面に研磨した痕が認められる。盤身の両面中央には舟が通り、断面は菱形となる。茎部の断面は多角形を呈する。片側片側に瘤のような溝を持つ。粘板岩質。

Tab.68 SR015 出土遺物観察表

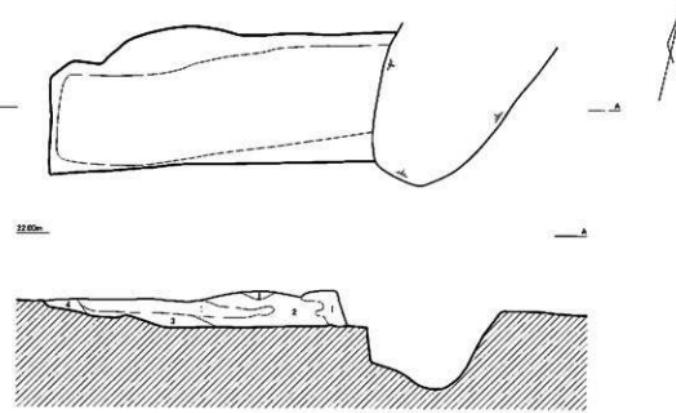
()内の数値は測定の法値を表す

SK016 土坑

【遺構・遺物】

当遺構に伴う出土遺物ではなく、時代および性格は不明。やや不整形ながら長方形の平面形態を呈する。遺構上面は後世の造成により削平され、さらに東側が擁乱により消失する。幅は約1.0mで、現存する長さは2.0m、深さは0.2mを測る。

当遺構に伴う出土遺物ではなく、時代および性格は不明。



1. 黄褐色 10YR3/2 粘性・しまりあり ローム粘土を多量含む。
 2. 壤層 10YR3/4 粘性・しまりあり ローム粘土を少量含む。ロームブロックを含む。
 3. 壽層 10YR3/4 粘性・しまりあり ローム粘土を少量含む。
 4. 壊 10YR4/4 粘性あり・しまりなし

0 1m (1/100)

Fig.110 SK016 遺構断面図

SC017・018・019 穫穴式住居跡

【遺構】

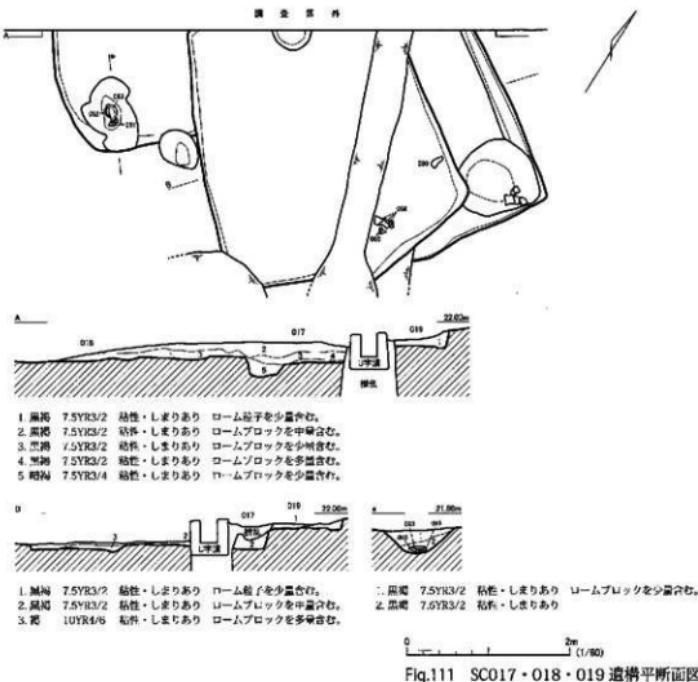
3～4軒の住居跡が重複していると思われるが、上面が削平された上に、樹木の根が床面を著しく破壊する。こうした状況から、遺構相互の重複関係を、明確にするのは困難であった。

住居跡は西側からSC018・017・019 穫穴式住居跡とした。まずSC017とSC018 穫穴式住居跡の、相互の時期関係については、前者の床面が後者の遺構内に認められない。次にSC017とSC019 穫穴式住居跡についても同様のことがあり、最も深いSC017 穫穴式住居跡がここでは新しい。SC018とSC019については、直接に重複する部分がないことから不明である。

SC017 穫穴式住居跡をさらに観察すると、その平面形態は搅乱の溝を挟み、壁面の角度が異なつており、さらにもう1軒が重複する可能性も考えられる。

【遺物】

SC018 穫穴式住居跡には南東隅に小穴が認められ、坏身（061）・皿（062）・坏蓋（063）が出上している。坏身は、体部下位は丸みを帯び、底部との境を明確にし難く、この辺りに断面四角の低い高台が貼り付く。重複するSC017 穫穴式住居跡にも坏身（058）が出上するが、先ほどのものと時期差を明確にするのは困難である。これらは8世紀代前半代の特徴をもつ。



全 体	平面形態	方形
	主軸角度	露が未確認のため不明
	堤 機	東西は調査外のため不明、南北 2.90 m
	壁	但し全体の形状がずれるため、2軒が重複する可能性もあり
	ビット	上面が削平されており、深さは 0.20 m と浅い
	四 溝	直径 0.4 m、深さ 0.20 の小穴 1 基
	床 面	確認した範囲内では認められず
	塗り方	樹木の根の影響で陥没が著しい
		確認した範囲内では認められず
壁	位 置	確認した範囲内もしくは認められず、これ以外の箇所に構築されたか復元の可能性あり
	形 状	
	中心軸長	不明
	燃焼口幅	不明
	壁	不明
	火 焼	不明
	油 脂	不明
	部	不明

Tab.69 SC017 遺構観察表

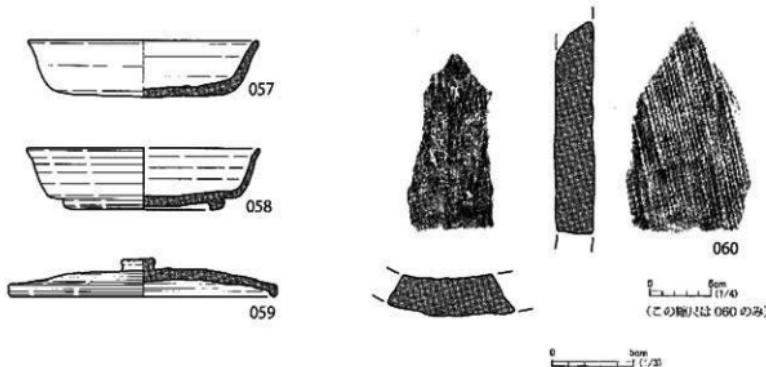


Fig.112 SC017 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色 調	特 質
			口径	底径	高		
057	須恵器 环	埋土下層	14.2	11.0	3.5	褐灰 10YR 6/2	体部は直線的に外上方に立ち上る。
058	須恵器 环身	埋土下層	(14.3)	9.9	3.8	褐灰 10YR 6/1	体部は直線的に外上方に立ち上り、口縁部がやや外反する。断面四角の臺が、底盤より内側に取り付けられる。
059	須恵器 蓋环	埋土 下層	16.5	-	2.3	褐灰 7.5YR 6/1	口縁部は断面二角形で、垂直に近く直曲する。内側に明瞭な棱が残る。大井部は両脇へラブリ開窓。焼成不良で軟質。
060	長	埋土下層		-	-	に赤い黄斑 10YR 6/4	表面には押目、裏面には凸目が認められる。

Tab.70 SC017 山土遺物観察表

()内の数値は推定の法量を表す

全 体	平面形態	方形
	主軸角度	南北
	深 度	南北約1/4のみが残存する程度で現場は不利
	標 高	上方が削平されており、深さ0.25mを浅い
	壁 壁	底径0.40m、深さ0.20mの小ぶり1基
	ビット	確認した範囲内では認められず
電	尾 溝	衛木の根の影響で破壊が著しい
	床 間	確認した範囲内では認められず
	強り方	確認した範囲内においては認められず、調査区外の部分に構造されたか、或いはSC017に構成された可能性あり
	位 置	不明
電	形 状	不明
	中心輪長	不明
	燃焼口類	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.71 SC018 遷構観察表

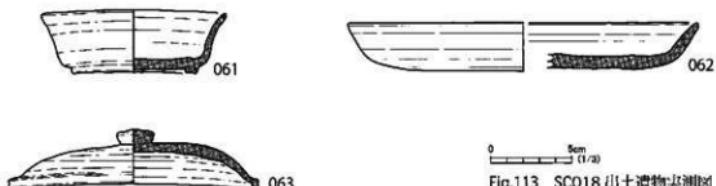


Fig.113 SC018 出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)			色 調	特 徴
			口径	底径	高さ		
061	須恵器	P 1	11.4	7.5	3.7 ~ 3.9	褐灰 10YR 6/1	体底部は丸みを帯びつつ、外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。
	环身						
062	須恵器	P 1	(21.6)	(18.6)	2.9	褐灰 10YR 7/2	体部は直線的で外上方に立ち上がる。体底部は圓錐ヘラ削り。
	皿						
063	須恵器	P 1	15.4	—	3.7	灰 5Y 6/1	口縁部は正面三角形で、垂直に短く屈曲する。内側に鋭敏な鋸が残る。 口縁部外側には掠みがした跡の、擦光の跡が赤線となって残る。天井部は円錐へラ削り調節。
	平蓋						

Tab.72 SC018 出土遺物観察表

(!)印の数値は推定の法量を表す

全 体	△山形態	方形
	主軸角度	窓が未確認のため不明
	規 格	北東隅の約1/4のみが現存する程度で破壊は不明
	壁	上面が削平されており、深さ0.05mと浅い
	ピット	南東隅に直径0.90m、深さ0.30mの小穴1基
窓	四 溝	東西にはないが、北壁に認められる これ以外は調査区外のため不明
	床 面	樹木の根の影響で破壊が著しい
	掘り方	確認した範囲内では認められず
	位 置	確認した範囲においては認められず、調査区外の部分に埋蔵されたか、或いはSC017に破壊された可能性あり
	形 状	
窓	半心船長	不明
	櫛状口幅	不明
	壁	不明
	火 床	不明
	袖 部	不明

Tab.73 SC019 遺構観察表

搅乱・表土

調査区の大部分が近現代の造成により、遺物を包含する層は失われ、現代の建物の基礎工事においてはローム面が深く抉られ、消失した遺構も多かったと想像するに難くない。

こうした状況において、どの遺構に所在するか不明になってしまった遺物も多く、残存度の高いものや特徴的なものに限り、以下に取り上げた。



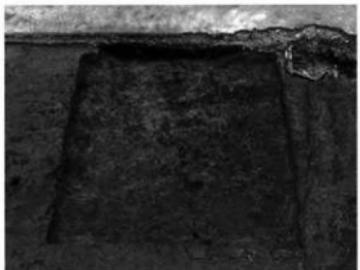
Fig.114 搅乱・表土出土遺物実測図

遺物番号	器種	出土地点	法 尺 (cm)			色調	特 徴
			(上)幅	(中)底径	(下)高		
064	須恵器 环身	搅乱	(12.0)	(8.8)	3.4	灰白 TOYR 7/1	体部は直線的に外上方に立ち上がる。断面凹角の高台が開き気味に、底盤部より内側に立ち付けられる。
065	青磁	表土	(16.0)	不明	不明	明暦灰 SC 7/1	端表面網目文が連続する。
	鏡						

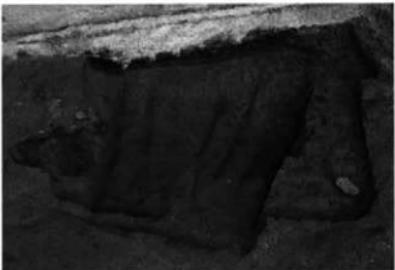
Tab.74 搅乱・表土上出上遺物観察表

()内の数値は推定の法差を表す

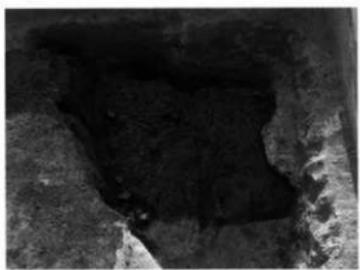
PL19



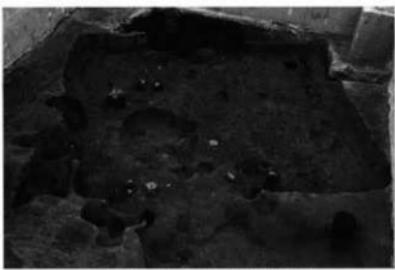
①. SC001 竪穴式住居跡（南から）



②. SC005 竪穴式住居跡（南から）



③. SC008 竪穴式住居跡（北から）



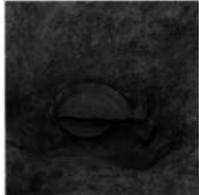
④. SC009 竪穴式住居跡（北から）



⑤. SK010 土坑（南から）

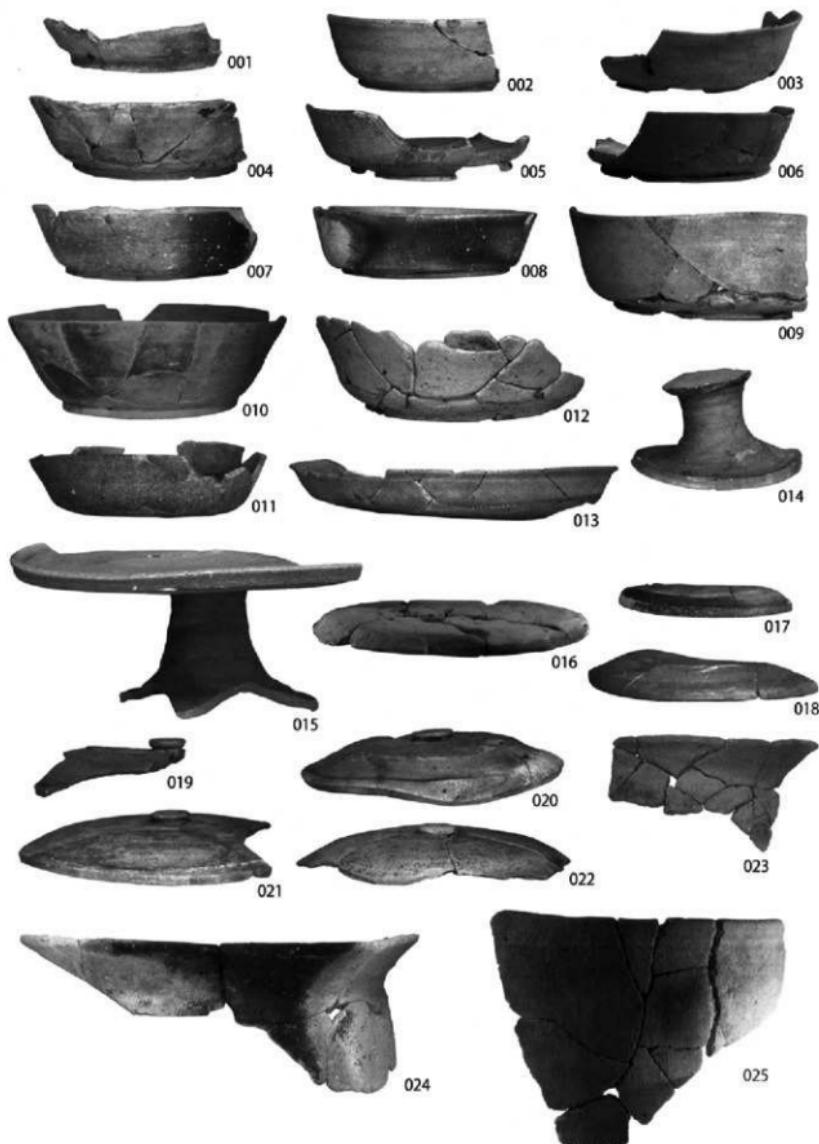


⑥. SC017・018・019 竪穴式住居跡（東から）



⑦. SC018 竪穴式住居跡
P1 遺物出土状況（南から）

PL20



PL21



026



027



028



029



030



031



032



033



034



035



036



037

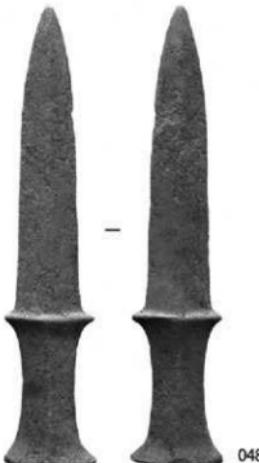
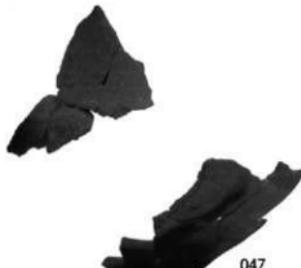
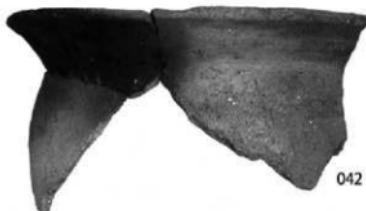


038

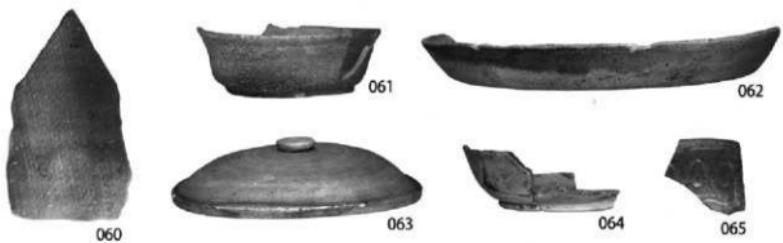
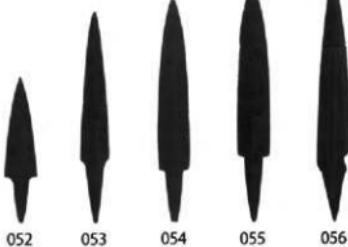
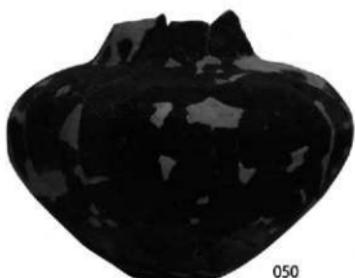


039

PL22



PL23



VI. まとめ

1. 調査の概要

今回の第14・15次調査区は、雑駄限遺跡の中でも、舌状に延びた台地の南端部に当たる。この周囲には浅い谷地形があり、遺跡の周知範囲もほぼこの辺に沿うような格好で指定されている。同様のこととは、隣接する南八幡遺跡や麦野遺跡などでも言え、ハツ手状に浅い谷が幾筋も存在している。各遺跡は便宜上から、名字を冠して呼び分けられているが、共に関連性は深く、隣接した位置に集落が形成される。

これらの集落は、8世紀代前半に突如出現したかと思うと、およそ半世紀ほど存続した後に消滅してしまう。今回の調査でも、出土する遺物から同様の傾向がみて取れる。こうした原因の背景を考えると興味は尽きないが、ここに少しばかり成果を整理をしておきたいと思う。

また、15次調査においては、予想もしなかった弥生時代の木棺墓を発見するに至った。しかも完存の有柄式磨製石剣が、1つの遺跡から3本も出土すると言う、極めて稀な事例となった。それは弥生時代の開始時期や文化の伝播について、再検討すべき必要性を迫る内容でもあった。

2. 古代の集落について

8世紀代を主体とする奈良時代の竪穴式住居跡は、第14次では19軒、第15次調査では8軒を確認した。ただ、第15次調査区は、現代の建物の基礎が著しく遺構を破壊しており、既に消失してしまったものもあると考えられる。しかし舌状に延びる台地の先端部に向かうに従い、遺構の密度は森になる傾向が窺える。

そうした状況で、最も南に位置する第15次調査のSC009竪穴式住居は、規模が約4.15×4.6mを測り、他と比較しても群を抜いて大きいのが分かる(Fig.115)。これについては前回の調査で、北

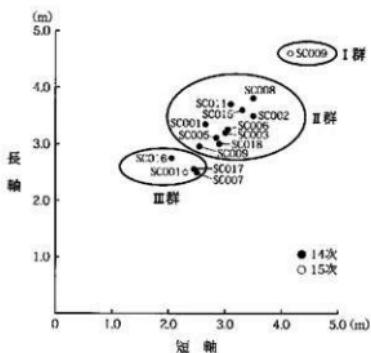


Fig.115 竪穴式住居跡の規模と類型

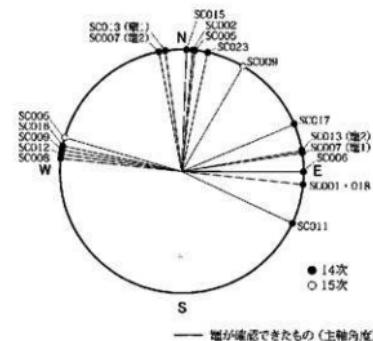


Fig.116 竪穴式住居跡の主軸角度

側に約150m離れた第5・7・8次調査（以後、前回調査とする）の成果から、集落内における階層性の存り方に、糸口を探ることができる¹⁾。

今回の成果では、第14次調査区の北側に、小穴が集中する箇所があったが、積極的に掘立柱建物跡につながるようなものではなかった。しかし大型の住居跡が、これ以下の小さな規模のものを囲うように配置される点については、SC009 窓穴式住居跡が、谷に面した集落の南限という、縁辺に位置することから、必然的に他の住居跡を取り込む格好に映らなくもないである。

次に竈の構築される位置と、住居跡の平面が真北に対してどれくらい傾くかを、主軸角度として表してみた（Fig.116）。これでみると、竈が構築される方位は北側が多くを占め、次いで東側、そして西側となる。これは前回調査でも類似する傾向を示し、北側が卓越して多く、東側そして西側の結果となっている。

また、平面形態についても若干長方形になるものが、前回調査では報告されている。今回の調査でも、第14次調査のSC001・SC016 窓穴式住居跡、第15次調査のSC001 窓穴式住居跡が、これに該当する。

さて、竈そのものの形態についても、みておく必要があるかと思われる。前回調査では住居跡内に直接に取り付くタイプと、張り出し部を設けて、構築するタイプが紹介されている。今回の調査でも、竈側壁の左右、もしくは片方に、浅い段状の張り出しを認められるものが幾つかあった。第14次調査のSC002 窓穴式住居跡の竈2やSC008 窓穴式住居跡は、それが最も顕著にみられ、両側には平坦に削り出された段がある。この上面を粘土が薄く覆うようして認められることからも、竈が構築された痕跡であることが判断できる。しかし、こうした張り出し部を持つタイプは、住居跡全体の中では少数派である。これらの有無については、住居跡の規模に起因するとした指摘がある²⁾。確かにこうした傾向は窺えるものの、小型だけでなく、大型の住居にも張り出し部を認めるものもあり、竈本体の構造まで含めて、検討していくねばならない問題ではないだろうか。

この構造を考える上で、興味ある事例を紹介しておくことにする。第14次調査のSC018 窓穴式住居跡の竈は、奥壁からにトンネル状に煙道が延び、その先に煙出しの小穴が認められた。この小穴からは「師範の破片が出土しているが、煙出し部分が崩壊しないように埋設した可能性がある。前回調査では、こうした煙道が長く延び、煙出しの小穴も残るものが多くを占めているようだが、今回の調査ではこのSC018 窓穴式住居跡の残存度が最も良好であった。これ以外にも煙道が長めなものは、第14次調査区のSC002・005・006・008・015・023 窓穴式住居跡などある。しかし、SC016・017 窓穴式住居跡に至っては、奥行きがなく、幅広の形態である。

そこで張り出しが住居の規模に関連する問題で、もし竈が寝間を占有する面積を緩和しようとした考えに基づくなら、SC016・017 窓穴式住居跡はどうであろうか。2つとも規模は小さい部類に属し、張り出し部さえ持たない上に、煙道が未発達な構造では、寝間をかなり圧迫しそうである。そうすると先に述べたように、張り出しは単純に規模に起因するだけでなく、竈本体の構造的な違いも考慮しておかなければならないと考える。

次に竈の袖部にも目を向けてみると、ロームを床面から低く削り出して基部とするものと、床面に直接に粘土を貼り付けるものがある。第14次調査のSC005 窓穴式住居跡は、その両方を併せ持つもので、竈に向かい右側は削り出されており、左側は粘土を貼り付ける。同じく第14次調査のSC011・016・017・023 窓穴式住居跡では、両側を粘土で構築している。第14次調査のSC013 窓穴式住居跡については、竈に向かい右側に粘土に覆われた礫を芯とする部材が認められる。この周囲には、さらに同じ大きさの礫が2つ転がっていたが、竈を破壊した際に転がり出たものであろう。

ここで竈の左右にも目を転じてもらいたい。そうすると、住居跡片隅のいすれかに浅い小穴が認め

られるものが、多いことに気づくはずである。そして幾つかの住居跡においては、この中から完存する上器が出土する。一般的に、この小穴は貯蔵穴などとも言われ、収納の場として認識されている。であるから川土する遺物も、通常は住居廃絶時に近いものと考えられ、遺構の時期を知る好資料になり得る。こうしたものは、第14次調査のSC001・005・008・013・017竪穴式住居跡、第15次調査のSC009竪穴式住居に認められる。第14次調査のSC011については住居片側ではなく、竈が北東隅に構築されるために、スペースを確保できない理由から、東壁の途中に設けられたと判断される。こうした小穴の存在は、この時代の住居跡では普遍的にみられるものである。しかし、第14次調査のSC005竪穴式住居跡の場合については、出土する遺物の器種構成に、収納していたものが取り残されたと、単純に判断しかねる側面がある。それは出土した遺物が、須恵器の高环と环、土師器の甕の3点で、こうした組み合わせに、祭祀的な意識性が垣間みえるからに他ならない。あいにく、これを裏付ける材料を持ち合わせていないが、住居廃絶時には祭礼行為を行う事例は、数多く報告されていることからも、そうした可能性を考慮しておく必要性はあるだろう。

最後に第14次調査のSC003竪穴式住居跡の、床に残る火熱面について触れておきたい。この火熱面は、住居跡内の南側中央でみられる直径0.4mほどの範囲で、強い火力を直接に受けたらしい、赤褐色に硬質化していた。この南側には浅い小穴が接してあるが、火熱の一部はこの中までおよんでいた。そうすると火を受けた時には、この小穴は開口していたことになる。小穴の底には平滑な面を上にした台石らしきものが据えられており、炉的な機能を果たしていたものと推測される。そこで小鍛冶などが考慮できるが、これに作る金属製品や、作業時に発生するであろう鉄片等は未確認である。

3. 古代の出土遺物について

今回の調査でも、遺物の多くは、竪穴式住居から出土する。それも下層に掘り進むにしたがい、破片から完存品へと良好な状態の資料が得られる。遺物は須恵器が圧倒的に多く、次いで土師器の甕をはじめとした器種が続く。そこで縦年作業が進んでいる大宰府政跡の出土資料に基づき、須恵器を中心に述べていくことにする。須恵器の器種は、8世紀代前半を主とした、环身・环蓋・环・高环・皿・盤・壺・甕・鉢で構成されている。この中でも环身と环蓋の出土量は、他の器種を凌駕しており、それぞれの個体を比較するのに好都合と言えた。

それらの特徴を、まずは环身からみていく。环身は高台が低く、断面が四角形のものが底端部より内側に貼り付くものが多い。稀に底端部の近くに付くものもみられるが、やはり内側に置こうとした意識性が窺える。さらに高台の形態を細かくみると、端部が外側に跳ね上がるもの、内傾するものに分けられる。これについては高台を貼り付けた後に、整形した際の指の摘み方や押さえ方に起因しているようである。体部については、外上方に傾斜する角度はあまり聞かず、ほぼ直線的に立ち上がる。この中には体部下位に丸みを帯びさせ、底部との境が不明瞭になるものが多くみられる。前者は底部との境が明確に捉えられ、したがって内側に貼り付けようとした意識も明瞭となる。しかし、後者はその境が曖昧ゆえに、貼り付けられる位置も個体により微妙に前後するようである。この両者に時期差を見出すのは容易ではなく、1つの遺構から共に出土する場合も多いことから、並行して存在していたと考えられる。

环蓋は断面三角形の山縁部を垂直に折曲げ、その際に内側に明瞭な稜線が残るものが多い。次いで、この部分を僅かに摘み出す程度で、内側の稜は不明瞭となり、外面には摘み出した際の指先の痕が浅い沈線となって廻るものもみられる。こうした特徴に、四半世紀単位での細分化は可能かと考えられ

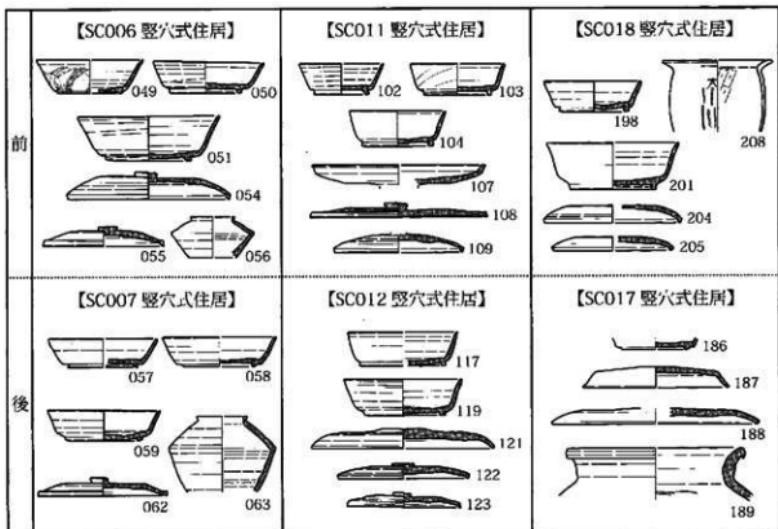


Fig.117 重複する竪穴式住居跡出土の遺物

る。この点について前後する時期から再確認しておくと、7世紀終わり頃になると反りを持たず、端部を斜め下方に折り曲げたものが現れる。8世紀代前半になると、その屈曲する角度は直下に変化し、さらに折り曲げるだけでなく、摘み出す程度の擬似的な作為のものが現れる。こうした変遷を重複し合う竪穴式住居に求めると、第14次調査のSC006と007竪穴式住居跡、SC011と012竪穴式住居跡、SC017と018竪穴式住居跡に傍証できる(Fig.117)。併し、一つの住居跡内で、口縁部を屈曲させるタイプと、摘み出す程度のタイプが、共に出土する場合もあり、こうした形態の変化は、緩やかに進んだと思われる。そして8世紀代後半になると、口縁部はいよいよ退化し、ついには消滅することが知られている。

ついでながら、SC021と023竪穴式住居跡から出土した長頸壺を紹介しておきたい。これらの特徴は、体部上位がきつく屈曲し、これより下位に回転ヘラ削りが施される。底部には低い高台が貼り付き、頸部は途中まで細く絞られるが、そこから口縁部に向かい聞くと、端部を横に屈曲させる。こうした長頸壺は、人宰府の第II期政庁の中門地鎮具として用いられたものが知られている。

以上、簡単に触れる程度であったが、さらに精査を試みる過程において、細かな編年への糸口になればと思う。

4. 古代の雜餉闕遺跡から見えてくるもの

この様に、前回との調査成果を比較するだけでも、かなり部分の類似性や問題点が浮き彫りになってきたと思う。そして、8世紀代前半の短期間だけ當まれた、集落の消長の背景を考えた時に、最もこの遺跡の持つ本質的な面白さがある。

それは、どうみても自然派的な集落の出現ではなく、為政者の強制的な意識を感じずにはいられないからである。もし、こうした意識というものが介在しているのであれば、いったい何に起因し、どのような目的、そして役割を担わされたのか、興味が尽きないところである。

このような問題を、現時点で具体的にすることは困難であるが、この地域に関連する歴史的背景をまずは概観しておきたい。それには、これ以前の7世紀後半から、触れておく必要性がある。この時期を端的に表現すると、まさに内憂外患の出来事が相次いで起きている。まずは主なものを時系列に追ってみると、天智2(663)年に百濟と連合した大和朝廷軍は、白村江で唐・新羅の連合軍に大敗を喫することになる。そして今度は来襲に備えて、翌年には筑紫に防人と烽を配置し、水城を築くのである。その翌年には大野城や基連城もさらに築かれた。しかし幸いにも憂慮した事態まで発展することなく、逆に積極的な外交関係が結ばれることになる。国内においては、天武元(672)年に壬申の乱が起こり、これにより即位した天武天皇が、強固な中央集権国家の形成へとのりだす。こうした対外的諸問題や四海道ノル国二島の九州統轄という、重要な役割を担わされたのが大宰府である。外交、防衛、九州全土の経営と統治などの多面性は、万葉集にも詠われる「大君の遠の朝廷」の言葉によく表現されている。

7世紀第4四半世紀から8世紀にかけては、こうした緊張感はさらに和らいでいくようであるが、文武2(698)年には大宰府、大野城、基連城、鞠智城を修治した記録がみられる。翌年にも大宰府、二野城、稻積城の修治が行われ、有事の危機は去ったものの、依然として維持管理は続けられていた様子が窺われる。そして大宝元(701)年には、大宝律令が制定されると、大宰府の諸制度もさらに整備が進むようである。その後も重用拠点として関連施設の造営や、同分寺をはじめとした寺院の建立が、8世紀代前半も相次いで展開したのは想像するに難くない。

地理的に大宰府に近い雑餉隈遺跡の集落も、こうした動きと決して無関係に存在していたとは思えない。こうした中枢機構に近く、そこから発せられる意向を速やかに反映するには、利便度の高い距離内にあるからに他ならない。そして国家的大事業や、その後の施設の維持管理にも、多くの労働力を必要としたはずである。この一端を窺わせるものに前回調査で発見された、7世紀末ないし8世紀初頭の大型建物群がある。その規模と配置には官衙的性格が認められ、役務に携わる人々を集住させた一つが、雑餉隈遺跡の姿であり、その必要性がなくなると同時に、集落は忽然と姿を消したのではないかだろうか。

5. 弥生早期の木棺墓について

弥生時代の雑餉隈遺跡は、第5次調査において、前期の住居跡と貯蔵穴が存在する。さらに同地點では、中期の直径8mにおよぶ、円形の大型住居跡がみつかっている。この近くでは、南八幡遺跡の2次と3次調査で、住居跡が確認されているが、弥生時代の密度は疎で、特に目立った発見もない。しかし、今回の第15次の調査成果では、夜丘式の土器を伴う4基の木棺墓が確認された。しかも3基からは、大陸よりもたらされたと考えられる有柄式磨製石剣が副葬されており、国内における弥生文化の伝播を考える上で、様々な問題を提議するに至ったのである。

まず、遺構の方からみていくと、いずれもが後世の搅乱を受け、残存状況は決して良いとは言えなかった。特にSR011木棺墓に至っては、約1/3が消失している有様であった。或いは発見された4基以外にも、完全に消失してしまったものがある可能性は否定できない。

4基の木棺墓の配置関係については、特に統一された意識性は薄いように感じられる。それは

SR002・003 木棺墓の長軸の向きがほぼ同じになる程度で、SR011・015 木棺墓とについては、そうしたものを見出すのは困難である。しかし壺を東短辺側に供献した点については、4基ともに共通した認識として捉えられる。

棺材については、いずれも腐食が進行し、全く残存しない。しかし、床面や壁面の掘り込みに、木棺の形態を類推するには可能である。こうした特徴と、遺物の出土状況をここで再確認しておきたい。

SR002 と 003 木棺墓は、隅丸長方形の掘り込みである。上面は搅乱により削平されていた。規模は SR003 木棺墓の短辺は、SR002 木棺墓よりも長いものの、長辺はかなり短い。両者とも床面は平坦で、棺材を支える溝等は認められず、東側短辺際の床面からは夜臼系の供献された壺がみつかっている。そこで、この壺が被葬者を埋葬する時に、何処に置かれたかについては、注意を払わねばならない点である。それは木棺の中なのか、或いは外に置いていたものが、棺材が朽ちていく過程で床面に転げ落ちてしまったのかなど、葬送時の様相に結びつくからである。こうした点に留意しながら、出土時の状況を振り返ってみると、壺は正位に近い状態形で、壁面際で発見されている。つまり、動いた形跡が少ないと考えられる。すると、木棺内に被葬者と共に、埋葬された蓋然性がみえてくるのである。

さらに壺の置かれた方位は、多少の角度の振はあるが、4基とも東短辺側に当たる。それは明らかに、東側という方位を意識して、埋葬を執り行つたことが分かる。おそらく被葬者も、これに合わせて、頭の向きをどちらか一方へ統一したことが考えられる。

そうすると石剣や石鎌の、向きはどうであろう。SR003 木棺墓は、北側長辺際の床面から有柄式磨製石剣 1 本と 3 本の有茎式磨製石鎌が出上している。これについても、周囲の状況などから、被葬者の傍らに置かれたものであり、動いた形跡が少ないと判断できる。そうすると、鎌の向きは石剣が西側に、石鎌が東側と反対を指す。ところが SR015 木棺墓も動いた形跡が少ないのであるが、1 本の有柄式磨製石剣と 5 本の有茎式磨製石鎌は、共に鎌を西側に揃えて並んでいる。置かれた位置は被葬者の傍らに当たり、頭の向きが統一されていたとすれば、身体の左右という問題も考えなくてはならない。例えば、SR003 と 015 木棺墓の被葬者の頭が、東側の壺の置かれた方にあるとすれば、仰向けの状態では右手の傍らに、石剣と石鎌が置かれたことになる。SR011 木棺墓でも、有柄式磨製石剣が 1 本みつかっている。位置は床面の中央付近で、鎌を西側に向けていた。これについては傍らに置かれたものではなく、被葬者の身体の上か、蓋板上が想定される。土層の断面からみても、床面から浮いた位置にあり、有機物の腐食と共に埋没したことを物語る。しかし、こうした過程を経ても、鎌の向きが全く反対になることは考え難く、指した方向には変化はないものと判断される。

ここで再び、木棺墓の形態に話を戻すことにする。SR011 木棺墓は、西側の約 1/3 が現代の建物の基礎により消失するが、隅丸長方形であったことには変りはない。特徴としては掘方が認められる点で、側壁には段もしくは緩やかな傾斜が設けられ、棺材との隙間を粘土で裏込めしていたようである。SR015 木棺墓も隅丸長方形で、床面に浅い掘り込みがあり、2 段掘りとなる。しかし SR011 木棺墓とは異なり、粘土で裏込めした形跡は認められない。また、石鎌は 2 段掘りされた上の段にまとまっており、この位置までを棺内として捉えた場合には、掘方を考慮すると無理な構造となる。残念ながら棺材が全く残存しない状況で、構造まで復元するにはどうしても限界があるかに感じられる。

先でも述べたが、SR011・015 木棺墓でも東短辺側から壺が発見されている。時期も夜臼式系で、SR002・003 木棺墓と同様に早期に属する。おそらく、この集団内においては、壺を供獻する風習が少なくともあったと考えられる。しかし、SR011・015 木棺墓のものは、どうも棺内ではなく、棺外に置いた形跡が窺える。それは、先の 2 基のように、床面から出土するのではないからである。

さらにSR011木棺墓の壺は、裏込めに用いられた粘土の上面で発見されており、明らかに棺外に置かれたことが判明している。SR015木棺墓についても、1段目の面から、かなり浮いた位置にあり、供獻時に壺の置く場は、棺の中と外の2つのパターンがみられる。

以上、様々な問題点を思いつくままあげてみたが、これまでに確認されている木棺墓とも比較していく過程で、何らかの法則性や地域性が明らかにされていくことを期待している。

6. 有柄式磨製石剣と弥生早期の雜餉隈遺跡

これまでの雜餉隈遺跡の調査では、前期以降の遺構が認められているが、早期に属するものは専門にして知らない。では周辺地域まで視野を広げてみると、春日市の伯父社遺跡で有茎式磨製石鎌が出土しており、時期もほぼ近いが早期の遺跡分布はやはり疎らに過ぎない。

そうした状況の中で、夜白式系の土器を作った4基の木棺墓は、予想もし得ない発見となった。しかも3基からは、完存する有柄式磨製石剣が副葬されており、大きな話題を提供した。おりしも炭素14年代測定(AMS 加速器質量分析計)の較正結果において、弥生時代の開始年代が紀元前5世紀から、更に500年も遅る可能性が発表されて、まだ間もない頃である³⁾。実は3本の石剣も、こうした問題とは深い関わりがあり、今後は様々な形で傍証される機会も増えるであろうが、慎重に取り扱わねば、全く違った結果につながりかねない。こうした危惧も踏まえて、考古資料として石剣が持つ有効性を再確認し、弥生文化の伝播について、拙いながら予察を試みてみたい。

大陸側において石剣が分布するのは、遼東から朝鮮半島、そして沿海州南部の地域にかけてである。列島内では、対馬や北部九州、西部瀬戸内地域を主に、早期から前期末にかけて分布することが知られている。そもそも石剣は、銅剣を模倣した代用品であると、かねてより指摘されている。しかし列島内で、銅製品が認められるのは、前期末以降である。然るに石剣の故地は、大陸側に求められることになる。そこで祖型となった銅剣を特定できれば、曆年代の把握が可能点から、クロス・データリングを試みることにより、石剣の制作時期も自明となるはずである。しかし、祖型と考えられるものには、幾つかの候補があり、時代も大きく異なることから、慎重を期さねばならない問題がある。

そこで簡単ではあるが、こうした点を整理しておきたい。石剣の古い段階の形態は、有茎式で遼東に分布がみられるようである。次いで有柄式で、柄の部分に段をもつ二段柄式が現れるのだが、古式遼寧式銅剣を模倣したことが指摘されている⁴⁾。問題はその次に現れる節帶を持つ石剣である。これは段の部分が装飾化して、有節式になると、あくまでも遼寧式銅剣を祖型にして、單一系譜の変化を遂げる考え方で、次の段階では節帶は消失し一段柄式となる⁵⁾。これとは別に、節帶を中国式銅剣の柄にみられる、二重の円環に類似性を求める考え方もある⁶⁾。朝鮮半島において石剣が有節式から一段柄式にあるのは、先松菊里式から松菊里式土器の時代である。すると前者を祖型と考えた場合では、古式遼寧式銅剣は遼西・遼東において紀元前800年頃から紀元前6世紀段階にかけて用いられたことが知られている。そして後者の祖型である中国式銅剣は、春秋後期の紀元前500年以降に登場するもので、両者には時間的に大きな隔たりがみられる。だが、有節式石剣の祖型を中国式銅剣に求める考え方には、矛盾点が指摘されている。その最大の矛盾は、模倣される側の中国式銅剣の出現以前に、模倣した側の有節式の石剣が既に存在するという、説明し難い点があげられる⁷⁾。

第15次調査において、有節式の石剣はSR003木棺墓から1本、一段柄式の石剣はSR011・015木棺墓より2本が出土している。それぞれに供獻された壺をみると夜白式系で、早期の木棺墓に副葬されていたことになる。そこで弥生時代早期の時期を、これらの石剣から見直すと、紀元前6世

紀を下限に選ぶ可能性が考えられるのである。もちろん副葬されるまでの伝世性も考慮しておかねばならない。国内において出土する石劍の多くは破損品が多く、スダレ遺跡に物語られるように、戦闘において折れた鋒が人骨に突き刺さったものなど、副葬品としてはみなしがたい。それが一つの遺跡内で、完存品が3本も同時に発見されるのは稀であり、これほど複数本を所有し、副葬できた集団において、伝世の意識がどれ程あったかを考えると疑問が残る。また朝鮮系の柳葉形をした磨製石鎌も、石劍と共に持ち込まれたと考えられるが、SR003・015木棺墓の2基から、合計で8本が副葬品として確認されている。こうした背景には、石劍や石鎌を多数所有していたか、或いは供給が比較的容易な環境にあったことが推測され、伝世品としての可能性は低いと判断される。

今回の3本の有柄式磨製石劍は、弥生時代の開始時期を知る上で、極めて重要な定点資料となり得ると確信している。そして東アジアの広い視座から、弥生文化を再び問い合わせ直す絶好の機会を与えてくれた。

堀苑孝志

- 註1) 福岡市教育委員会「小括」『福岡市埋蔵文化財報告書 第569集』1998年
この調査において、奈良時代を主体とする58軒の竪穴式墓が確認されている。これらを規模から、1類からIV類まで4つのグループに概略化した試みがなされている。この中で、IV類とされる1辻が4.6m以上を測るもののが6軒あり、掘立柱建物跡群とI～III類の住居跡を区画するように配置される点に着目している。これは集落の共有の施設である掘立柱の棟持苔理と、そしてIII類以下の住居跡を囲むような格好から、集落内における隣接性の存在を指摘している。
- 註2) 同上
竪に張り出し部を持つ住居は、小さな規模に多く認められ、大きな規模になるに従い少なくなる傾向が指摘されている。これについては張り出しを得ることにより、竪を少しでも外側に取り付け、住居内の使用面積を広く確保しようとした目的があると推測している。
- 註3) 国立歴史博物館が1997年以来行なってきた、炭素14濃度の高精度データを、AMSにより毎年に校正することに成功した。これにより弥生時代初期の寛年代が、紀元前400から500年と考えられていたのが、一気に1000年まで遡る可能性が示唆された。
- 註4) 近藤義一「東アジアの銅劍文化と向洋具の銅劍」『山口県史 資料編 考古1』2000年
朝鮮半島の、慶尚南道蔚山郡東部採集品や慶尚南道義昌郡熊谷洞箱式石棺墓出土の、二段柄式の石劍が、中国の遼寧省遼寧省小石溝8501号墓の銅劍と形態的に類似することから、遼寧式銅劍を模倣して製作した点を指摘している。
- 註5) 庄田慎一「韓国嶺南地方西南部の無文土器時代編年」『古代文化論叢 第50集下』2004年
- 註6) 柳田康雄「日本・朝鮮半島の中國式銅劍と寛年代論」『九州歴史資料館研究論集 29』2004年
- 註7) 宮本一夫「中國大陸からの視点」『季刊考古学』第88号 雄山閣 2004年

引用・参考文献

- 穂波町教育委員会「スダレ遺跡」1976年
- 福岡市教育委員会「福岡県周辺遺跡群 福岡市埋蔵文化財報告書 第528集」1997年
- 福岡市教育委員会「雄隈隈遺跡 福岡市埋蔵文化財報告書 第569集」1998年
- 春日市教育委員会「佐玄海社遺跡 春日山文化財調査報告書 第35集」2003年
- 福永伸哉「木棺墓」『弥生文化の研究 8 祭と墓の調べ』雄山閣 1987年
- 長沼 孝「歌い 石の武器」『弥生文化の研究 9』雄山閣 1986年
- 橋口達也「歌い 弥生者」『弥生文化の研究 9』雄山閣 1986年
- 西谷 正「東アジアの弥生文化 朝鮮半島と弥生文化」『弥生文化の研究 9』雄山閣 1986年
- 森秀爾「弥生時代の年代推定」『季刊考古学』第88号 雄山閣 2004年
- 人賀静夫「研究史からみた駒門塚 遠東の造車式銅劍を中心に」『季刊考古学』第88号 雄山閣 2004年
- 柳田康雄「日本・朝鮮半島の中國式銅劍と寛年代論」『九州歴史資料館研究論集』29 九州歴史資料館 2004年
- 藤原 哲「弥生時代の銅鏡製作」『日本人考古学』第168号 日本人考古学協会 2004年

VII. SUMMARY

Zasshonokuma site is located at the center of Fukuoka plains that stretch over Fukuoka City, Japan. It is placed about 10km from Hakata bay and at an altitude of approximately 25m. The 14th and 15th excavation investigations were executed before the apartment construction on the archaeological site.

The Fukuoka City Board of Education took a primary role in this project regarding administrative control and academic guidance. Okasan Livic Co., the archaeological research section was in charge of the actual excavation, the material organization, and the report on these investigations.

I will make a brief report on the result of this investigation.

Nineteen pit dwelling marks were discovered on the 14th investigation and eight pit dwelling marks on the 15th investigation. We have found a large number of life tools which include bowls, lids, jars, plates of the Sue ware, and jars of Haji ware. These tools were mainly used during the Nara Period of the early eighth century, when they had lived in the pit dwellings. However, we have never found the pit dwelling marks of other periods. The excavated dwelling clusters were formed quickly but they disappeared within a limited time of fifty years thereafter.

As a background, I can imagine that these dwelling clusters were residence for the people who worked for administrative and military reform, along with the centralization process of the Yamato Court. Once they completed the reform, they did not need to reside in the pit dwellings any longer and the dwellings lost its "raison d'être."

The most notable result of the 15th investigation was the discovery of the wooden coffins of the earliest Yayoi period. They were much older than the pit dwelling marks of the 14th excavation. Three out of four wooden coffins were found with a polished stone dagger with a hilt in. It is the very first time in Japan that complete figure of three polished stone daggers with a hilt were discovered all at once from the one site. The stone dagger with a hilt is made from one stone material and precisely polished up. They were distributed from Liaodong to a Korean peninsula and Maritime Provinces and had been discovered mostly in northern part Kyushu.

The stone daggers were found with the Yuusu style carthenware pots, which belong to the very first stage of the Yayoi period. This was around the same time when rice agricultural skills were brought into the Japanese archipelago from the Chinese Continent. Along with the advanced farming skills and stone daggers which were made in imitation of its bronze sword, these too, were imported from the Continent.

In fact, it is possible to clarify the real calendrical age of the stone daggers through cross dating, using the original model of the bronze sword and investigating the historical material of the East Asian Continent. However, there are still a few questions remaining in order to specify the original model. Most likely, the Liaoning style bronze sword, which developed in Liaodong, could be the model of the stone daggers. This consideration raises a new point of view for the time when the Yayoi period had exactly begun. Surprisingly, it may have begun in the sixth century B.C., which reveals a several century gap from the current estimated year.

In association with this, the noteworthy result of the carbon-14 dating technology has been presented recently, which reported the beginning of the Yayoi period to be in the tenth century B.C. The fortunate discovery of the three polished stone daggers with a hilt is so important because we now, should reconsider the Yayoi period in historical circumstances over the East Asian Continent.

報告書抄録

ふりがな	ざっしょのくまいさき						
書名	雜納隈遺跡 5						
副書名	第14・15次調査の報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第868集						
編著者名	堀苑孝志 人江俊行 大野真子						
編集機関	岡三リピック株式会社 埋蔵文化財調査室						
所在地	〒108-0023 東京都港区芝浦4-16-23 AQUACITY芝浦 TEL 03-5442-1980						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	市町村	遺跡番号	北緯 °' "	東經 °' "		
雜納隈遺跡 (第14次)	福岡県 福岡市 博多区 新和町 一丁目 24番1号	40132	0308	33° 31' 59"	130° 27' 59"	2002.11.1 2003.1.24	600 集合住宅建設
(第15次)	福岡県 福岡市 博多区 新和町 二丁目 25番	40132	0308			2003.11.10 2004.3.5	650 集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
雜納隈遺跡 (第14次)	散布地 集落	旧石器時代 奈良時代 (8世紀代前半)	竪穴式住居跡 19軒 土坑 8基	石器(三稜尖頭器・剥片) 須恵器 土師器 石製品	散布地 奈良時代の集落跡		
(第15次)	墓域 集落	弥生時代 (早期) 奈良時代 (8世紀代前半)	土坑 木棺墓 7基 4基 竪穴式住居跡 8軒	夜白式系の弥生土器 有柄式磨製石劍 有茎式磨製石鏡 須恵器 土師器	弥生時代早期の墓域 奈良時代の集落跡		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 868 集

雜餉隈遺跡 5

2005. 3. 31

発 行 岡三リビック㈱ 埋蔵文化財調査室
東京都港区芝浦四丁目 16 番 23 号

印 刷 (株) 第一印刷所
東京都台東区根岸二丁目 14 番 18 号

The 14th and 15th Excavation Report of Zasshonokuma Site

~ Excavation and Studies of ZASSHONOKUMA SITE in FUKUOKA ~

This report will cover the 14th and 15th excavation investigations of the Zasshonokuma archaeological site in Fukuoka, Japan.

In this particular investigation, we have discovered three wooden coffin graves from the earliest stage of Yayoi Period. In these graves, there were three polished stone daggers with a hilt and polished stone arrowheads, which are considered to have been brought from the Chinese continent. This is a valuable discovery to know how the rice farming culture had spread in Japan. Many pit dwellings from the early eighth century were also discovered. It has demonstrated the fact that a cluster of dwellings had been formed in this site. We have also found a number of relics, including Sue and Haji wares.

March 2005

FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION

OKASANLIVIC.CO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH SECTION